

Death-Education のための指針および具体的方略の

開発と実践・評価

—— 小・中学生を対象とした ——

課題番号 13672495

平成13年度～平成15年度

科学研究費補助金 [基盤研究(C)(2)] 研究成果報告書

平成16年3月

研究代表者 岡田 洋子

(旭川医科大学医学部教授)

【目 次】

はしがき	1
I. はじめに	3
II. 国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ	3
III. 研究の目的・方法	4
IV. 結果	
1. 小学校低学年	9
2. 小学校高学年	27
3. 中学生	42
V. 全体考察	
1. 死と対峙する仲間からの学び	73
2. Death-Educationの欠如を超えて	74
3. 学校教育におけるDeath-Educationのすすめ	75
4. Death-Educationの臨床的意義	76
VI. Death-Educationの評価と課題	77
VII. おわりに	79
VIII. 引用文献・参考文献	80

はしがき

研究組織

研究代表者	:	岡田 洋子	(旭川医科大学医学部)
研究分担者	:	菅野予史季 荃津 智子 井上ひとみ	(旭川医科大学医学部) (天使大学看護栄養学部) (石川県立看護大学)
研究協力者	:	井上由紀子 宮川妃佐子 志賀加奈子	(札幌医科大学保健医療学部 大学院生) (旭川医科大学大学院生) (旭川医科大学医学部看護学 科非常勤講師)

研究経費

平成 13 年度	1,170 千円
平成 14 年度	900 千円
平成 15 年度	1,400 千円

研究発表

1. 岡田洋子、佐藤雅子他：学童期にある小児のアニミズム－過去と現在の比較－、第 48 回日本小児保健学会講演集、612－613、東京、2001 年 11 月
2. 荃津智子、岡田洋子他：学童期にある小児の死の概念－性別・地域差からみた－、第 48 回日本小児保健学会講演集、610－611、東京、2001 年 11 月
3. 井上ひとみ、岡田洋子他：学童期の小児が抱いている死および死後のイメージ、第 21 回日本看護科学学会講演集、P323、神戸、2001 年 12 月

4. 岡田洋子、菅野予史季他：学童期にある小児の死への関心と社会経験、第21回日本看護科学学会講演集 P322、神戸、2001年12月
5. 井上由紀子、岡田洋子他：死および死者に対する小児の受け止め－身近な人との死別体験を通して－、第22回日本看護科学学会講演集、P335、東京、2002年12月

研究発表予定

1. 岡田洋子、志賀加奈子他、Death-Educationのための指針および具体的方略の開発－小・中学生を対象とした－、日本小児看護学会、2004年7月、（宮崎市）
2. 宮川妃佐子、岡田洋子他、Death-Educationの実践・評価－小学校低学年を対象とした－、死の臨床研究会、2004年11月
3. 荃津智子、岡田洋子他、Death-Educationの実践・評価－小学校高学年を対象とした－、日本看護科学学会、2004年12月、
4. 井上ひとみ、岡田洋子他、Death-Educationの実践・評価－中学年を対象とした－、日本看護科学学会、2004年12月
5. 井上由紀子、岡田洋子他、Death-Educationの実践・評価－小学生を対象とした－、日本小児保健学会、2004年10月、（盛岡市）
6. 志賀加奈子、岡田洋子他、Death-Educationの実践・評価－小・中学生を対象とした－、日本小児保健学会、2004年10月、（盛岡市）
7. 菅野予史季、岡田洋子他、学童期にある小児のDeath-Educationの実施・評価とターミナルケアへの意義－小・中学年を対象とした－、第2回日本小児がん看護研究会、2004年11月、（京都府）

I. はじめに

私達は先行研究をベースに、子どものアニミズムや死の概念発達と生活体験について、北海道・関東・九州で調査を実施した、科学研究成果報告書：基盤研究（C）平成13年3月¹⁾で報告した。調査対象は、小学1年生から中学3年生の合計2,700名である。その結果、約10年前の調査²⁾と比較し身近な人との死別体験もペットとの死別体験も減少していなかった。死んだ人を実際に見たことがある生徒は全体の5割、その中の7割弱は、「その人はよく知っている人」であった。葬式・お通夜への出席もお墓参りも、10年前と比較し、減少していなかった。死について、今までに家族の人と話したことがない生徒は、全体の4割以上であった。さらに、死についてなるべく話したくないと思っている生徒が、全体の6割であった。

子どもを取り巻く現代社会は、テレビやビデオを通じたバーチャルな死の体験が、死の実体験より先行して子どもの日常生活に入り込んでいる。さらに近年、青少年の生き物や人間（自分の命・他者の命）に対する残虐な事件があとをたない。このような現代社会において、日本における Death-Education のための具体的方略を開発およびその実施の必要性は、急務と考える。

II. 国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ

キューブラー・ロスは、子どもは死について大人とは異なった観念を持っていると、その特徴を挙げている。国内では山梨大学心理学研究室³⁾が子どものアニミズム的思考における生命概念の発達を調査している。岡田が1979年に行った調査⁴⁾では、すみやかに崩壊するといわれる小学校中・高学年でアニミズム傾向がみられた。波多野⁵⁾は小学校低学年のアニミズムと小学校6年生頃から始まり中学校頃まで続くアニミズムとは質的に異なり、科学や芸術が開花した高次のアニミズムであると述べているが、その後高次のアニミズムに着目した研究は少ない。岡田らが平成10年度科研費を得て行った調査⁶⁾では、「お人形」を生きていると小学1年生の39.3%、中学3年生の23.1%が、「かみなり」では小学1年生の48.6%、中学3年生の37.6%が、「ポケモン」では小学1年生の68.0%、中学生3年生の31.9%が回答し、一度低下したアニミズム的思考は中学生で再び上昇傾向を示した。さらに学童期の小児の死の概念発達は、認知的発達段階、入院・死別体験などの社会経験が関連要因として影響していることを確認した。

子どもを取り巻く現代社会は、テレビやビデオを通じたバーチャルな死との出会いが、死の実体験より先行して子どもの日常生活に入り込んでいると言える。一方、身近な人やペットとの死別体験が少ない社会環境が危惧されている。このような社会環境の中で育つ子どもが、どのような「死の概念」「生命の大切さ」を体得していくのか、大きな関心をもって研究に取り組んできた。高次のアニミズムの「実態」と同時に、生き物や人間（自分の命・他者の命）に対する残虐な事件の低年齢化が社会問題となってきた今日、日本における Death-Education のための具体的方略を開発し実施することは、必須と考える。

アメリカではすでに死への準備教育が幼児・小学校教育で実施されている。日本においても Death-Education の必要性が認識されつつある。日本文化に根ざした Death-Education ための具体的方略の開発・実施は、「限りある命の大切さ・愛おしさ」をはぐくむ小児看護および学校教育において不可欠である。

Ⅲ. 研究の目的・方法

私達は、テレビやビデオによるバーチャルな死との出会いが死の実体験より先行して子どもの日常生活に入り込んでいる現代社会において、学童期の小児が死別体験をどのような「体験」として行動シエマ（ピアジェの認知発達）にとり込み学んでいるか、さらに死をタブー視し大人が子どもとの会話を避ける傾向にある社会環境が、子どもの死生観形成に及ぼす影響について、関心をもって研究に取り組んできた。

その結果、死について今までに家族の人と話したことがない生徒が、全体の4割以上で、さらに死についてなるべく話したくないと思っている生徒が、全体の6割であった。これらの結果から、日本における Death-Education のための具体的方略の開発と実施・評価を必要としている社会環境であると言える。

1. 目的

本研究の目的は、死をタブー視し大人が子どもとの会話を避ける傾向にある現代社会において、Death-Education のための指針と具体的方略を開発すること、さらにその実践・評価を行なうことである。

- 1) 子どもに「命の大切さ」や「生きること」、「死について」どのように教えまた学ぶか、Death-Education のための指針と具体的方略を開発する。
- 2) 開発した Death-Education 方略の実践とその評価を行う（評価研究）。

2. 研究期間

研究期間は、平成13年4月から平成15年3月までの3ヵ年である。

3. 研究対象

第一段階として、大学教育に携わる知り合いを通じて、北海道A市にある小・中学校に本研究の意図・目的を説明し協力依頼を打診した。その結果、協力意向の返答を頂いた。第二段階として、研究当事者が直接小・中学校を訪ね、研究の目的、考えている方法について説明を行い、正式に協力の返答を頂くことができ、同市の小・中学校に通学する小学2・4年生・中学2年生を対象に、Death-Educationを実施することになった。

小学生は、学校側と打ち合わせを重ねた結果、道徳教育の時間を頂き、道徳教育の位置づけでDeath-Educationを実施した。

中学生は、本人に研究の主旨を説明し、承諾が得られた生徒には、承諾書（資料1）に同意のサインを頂き、同時に中学校を通して保護者へも研究の主旨説明と協力依頼を書面で行い、保護者からも承諾書（資料2）に同意のサインを頂き実施した。

4. 倫理的配慮

先生方と打ち合わせを重ねた結果、小学生は前述した通り道徳教育の一環として、先生方の協力を得て実施した。特に、身近なあるいは大切な人の死に出会って間もない生徒の有無といった個別的状況に対して、実施前後で個別的配慮を依頼した。

中学生は、前述した通り協力するか否かは自由であること、成績にはいっさい関係がないこと、気持ちが変わった場合、途中で中止しても良い旨を説明した。

5. 研究の方法

研究の方法は、生徒がDeath-Educationの前と後で各々記述し提出したレポートを逐語録として用い分析する、帰納的記述的方法を用いた評価研究である。

小学校低学年・高学年、中学生用は、各々Death-Educationのための教材を作成し、事前に担任をはじめ学校責任者に見て頂いた後、実施した。小学2年生（低学年）には、実施前に1）命について日頃思うことを、同じく実施後2）命について今思うことを原稿用紙1枚程度に記載し提出を願った。小学4年生（高学年）と中学2年生にも各々実施前に1）命について、生きることに日頃思うことを、同じく実施後2）命について、生きることに今思う

こと、を原稿用紙1枚前後に記載し提出を願った。

分析方法は、帰納的記述的方法を用いた質的分析法である。具体的には生徒が提出したレポートから、①文節・コード化を行い、データがどのカテゴリーに属するか、②サブカテゴリー化（仮説設定過程）を推定し、③カテゴリー化を試みた。

6. Death-Education 方略の作成過程と指針

まず第一に、日本における Death-Education の取り組み例（下記）を研究メンバーで共有した。

1) 小学校低学年対象：「生まれてくるってすごい」 長野県下の小学校の試み

2) 中学生対象：「死について考えよう」 愛知県下の中学校の試み

3) 高校生対象：「いのち」を体で感じよう 茨城県下の高校の試み

第二に、幼児・学童を対象に「命」や「死」のテーマをとりあげている絵本・本を読み、Death-Education のための方略作成の参考にした。

第三に、色々な立場・角度から Death-Education が試みられつつあるが、小児看護の立場から行なう Death-Education の意義について、メンバーで話し合い共通理解を図った。具体的方略の開発において：

1) 以下に示す小児の認知的発達段階（ピアジェ）を考慮に入れる。

(1) 死の不可逆性・不可避性・普遍性を理解する前の段階（前操作段階）

死のイメージ・概念を外界から取り入れ、形成していく段階（同化）

(2) 死の理解が体験の有無により影響を受ける段階（具体的操作段階）

死のイメージ・概念を外界から自己の行動シエマに取り入れ、形成していく段階（同化）と、外界に応じて自己の行動シエマや死のイメージ・概念を変えていく段階（調節）

同化と調節の均衡のとれた状態、バランスのとれた状態（適応状態）

(3) 体験の有無にかかわらず大人と同様な死の理解（死の不可逆性・不可避性・普遍性）ができる段階（形式操作段階）

2) 方略の作成に、病気・入院体験といった健康に関するテーマや内容を積極的にとり入れ活用する。

3) 具体的事象を用いる。

4) 同年代の病気・入院体験者自身、あるいはその家族・兄弟姉妹を講師として依頼し、体験者の体験談（を）を積極的に導入した内容とする。

5) 健康や病気・入院体験（児・者）を通して、「命」・「生きること」について考える出発点としていく（From Death to life）。

7. Death-Education のための方略開発の実際

1) 小学校低学年用（前操作段階）：

絵本・視聴覚映像を教材に、「命」について考えるメッセージを送ることを主たるねらいとした。

方略開発・設定理由は、4歳から10歳の小児を対象に作られた「死」ってなあに？ー考えよう命の大切さー、を参考に作成した教材を用いた。具体的には「絵本、菊田まりこ、いつでも会える、学研、1998」⁷⁾。仲良しで一緒に遊んでいたポチ（犬）との死別を描いたストーリーを参考に、独自に作成した。

「画像」に研究メンバーの「ナレーション」と「吹きかえ」を交えて実施した。

2) 小学校高学年用（具体的操作段階）：

同年代の子どもの闘病生活をとり上げたドキュメンタリー番組「天国のたかし君 奇跡をありがとう」を編集し直して、教材として一部を用いた。

方略開発・設定理由は、同年代の子どもが経験している生と死を通して、生きたくて生きることができない友がいること、さらにたかし君の死後もクラスメートの心の中に生き続ける今は亡きたかし君を通して(From Death to life)、「命」・「生きること」について考える出発点となればと考えた。そのための教材として、たかし君の学校での生活も紹介されているこのドキュメンタリーは、健康な学童にとっても身近で具体性に富む教材であると判断したからである。

3) 中学生用（形式操作段階）：

平成14年6月、学生の実習指導で小児外科病棟に出入りしている折、入院中の中学3年生U君に出会う。彼は二分脊椎症という先天性疾患で入退院を繰り返しながらも、明るく前向きに生きていた。実習後半、障害を有しながら夢を抱いて前向きに生きている彼に、思案中のDeath-Educationについて話し、実施段階に至った折は講師として体験談を語ってほしいと希望を話す。即答はなく様子を見ていたが、実習最終日に「引き受けても良い」旨の意志表示を受ける。その後退院となるが退院後も連絡をとり合う。

平成15年4月、U君は高校に入学する。中学校との打ち合わせを重ね、実施時期が二度三度変更となり、夏休み前の予定が11月となるが、その間彼の意志は変わらなかった。

高校生になったU君に、①入院生活を通して体験したこと、②生まれた時から障害を有し、松葉杖を使用しながらも、歩き、自転車に乗って障害を克服してきた自分から見た同年代の仲間に伝えたいことなどについて、具体的に講演を依頼した。同時に、U君の体験した入院生活を少しでもイメージできるよう、

骨腫瘍で下肢の切断術を受けた中学生の闘病生活を取り上げたドキュメンタリー番組を短く編集し、併用することとした。

なお協力依頼に内諾を得た後、U君と保護者に各々書面で依頼を行い承諾書の提出を得てから実施した。

方略開発・設定理由は、事故・事件・自殺といった問題を有する社会に生活しながら、健康に恵まれ、勉強が唯一であるかのような価値社会に身を置いている中学生は、病気体験あるいは病気体験者といった自分とは異なる人と日々接していても、何かを感じたり発見したり、何らかの影響を受けるといった「人間として出会う」体験は少ないのではと考えた。そこで当たり前と思って生活している健康であることの幸せ・感謝、自分のそして他者の「命」の大切さを実感してほしいと考え、講演を依頼した。同時に癌で下肢切断術を受けた同年代である中学生の闘病生活ドキュメンタリー番組のビデオを編集し併用することとした。

8. 研究スケジュール

- 1) 平成13年度：Death-Educationのための準備（教材作成・協力小・中学校の開拓）
 - (1) 平成13年4月－9月：先行研究結果、基礎データの確認
 - (2) 平成13年10月-14年2月：研究教材ビデオの分析
 - (3) 平成14年2月－3月：Death-Educationのための指針およびモデル作成
- 2) 平成14年度：Death-Educationの実施段階
 - (1) 平成14年4月－9月：Death-Educationのための指針とモデル作成
 - (2) 平成14年10月－平成15年2月：Death-Educationの実施
- 3) 平成15年度：Death-Educationの実施・評価段階
 - (1) 平成15年3月－9月：Death-Educationの実施、評価
 - (2) 平成15年10月－平成16年1月：Death-Educationの実施・評価
研究報告書の作成

IV. 結果

調査に協力が得られたのは、小学2年生が80名、小学校4年生が80名、中学2年生が112名（122名中：欠席者4名、協力辞退者6名）名であった。中学生は本人の意志による協力辞退が6名おり、辞退した生徒に対しては、中学校が辞退生徒のために用意した別メニューの学習内容を受けた。

1. 低学年

1) 実施方法

日時：2003年9月9日（火）11：40～12：25

実施場所：小学2年生の教室およびプレイルーム

対象：小学2年生、1組（40名）、2組（38名）2クラス計78人

実施内容：

- (1) 役割分担等：2教室に各々3名の研究者を配置。1名が研究の趣旨を説明し、2名は用紙の配布および回収（実施前後に感想文を書く）。担任及び教育実習生が見守った。
- (2) 教材：「ポチとルナはいつも一緒」（創作絵本）
- (3) 教材選定理由：5～9歳では、死の不可逆性を認識するが、自分の身や家族にも起こりうるという死の絶対性と普遍性は受け入れることが困難（マリヤ・ナギー）である。子どもたちの多くは、自分のペットが死んだときにはじめて死と向かい合い、生徒期の半ばころ（8～9歳）までの子どもは、近親者やペットの死により、分離の不安、悲しみ、怒り、不満などを強く体験する。子ども達にとってできるだけ身近に思える存在であることが重要であると考え、Death-Educationの導入として、「死ぬってどういうこと」と言う投げかけと共に、「ポチとルナ」というフィクションの少女と犬の物語を出発点として「いのち」「生きること」を考えてみた。
- (4) 授業の進め方：授業の進め方は、表1の通りである。

表1. 授業の進め方

導入：10分 （各教室）	①自己紹介 ②研究の趣旨、授業の進め方の説明 ③「命について思うこと」を書く
展開：30分（プレイルーム）	⑤創作絵本の鑑賞「ポチとルナはいつも一緒」
まとめ：10分（各教室）	⑥「命について思うこと」を書く

『実際の説明内容』

【導入】

2年生の皆さん、おはようございます。

はじめまして。私達は、前は小児科の看護師でした。今は大学で、看護師になるために勉強している学生さんを教えています。

病院では、病気で亡くなっていく人がいます。そして、同時に新しい生命（赤ちゃん）が生まれます。今日は皆さんと一緒に、「命」について考えてみたいと思いやってきました。後で部屋を移り「ルナという少女」と「ポチという犬」のお話しを見て頂きます。その前に「命について思うこと」を書いて下さい。用紙を配ります。書けなくても良いので、隣りのお友達と相談はしないで下さい。番号と名前も忘れないで書いて下さい。

【展開】

教室からプレイルームに、2クラスの生徒全員が移動。「これから『ルナという少女』と『ポチという犬』のお話をみてもらいます」

（パワーポイントに入れた「ポチとルナはいつもいっしょ」の画面を映写、事前に録音したナレーション流し、10分間見た。）

【絵本の内容】

ルナはポチが大好きです。一番の友達で、いつも一緒です。しかしある朝ポチが動かなくなり、別れの日が突然やってきます。ルナは、ポチに声を掛けますが、ポチは目覚めることなく段々冷たくなっていきます。ルナは悲しくて涙が止まりません。そしてポチに「痛くなかった」「怖くなかった」「今、どこにいるの」「とても会いたいよ」と語りかけます。ポチは言います。「ルナちゃん、もう一緒に遊べないけれど、目を閉じてごらん、ずっとルナちゃんと一緒にだよ」と。そう、目をつぶればいつも一緒。

【まとめ】

絵本（パワーポイント）の終了後、各々の教室に戻り、生徒に用紙を配布し、1「ルナとポチのお話しを見て、『命』について、今、あなたが思うこと」を10分間で書いてもらい、回収した。

（5）生徒の反応

- ①「命について思うこと」の記述についてのレポートを書いてもらっている時は、周囲の生徒や、教育実習生、担任に相談する生徒が多く見受けられた。また、早々と書き上げて机に伏している生徒、時間ギリギリまで書いている生徒、机の中に用紙を入れてしまった生徒などがいた。
- ② お話の映像を見ているときは、おしゃべりもなく、皆、真剣に見てく

れていた。犬の声がどこから出ているのか？不思議がっている生徒の声も聞こえた。映像が終了後、生徒から拍手が起こった。

③ お話しを見た後の感想文の記述場面では、周囲の生徒や担任・教育実習生に話しかけることもなく、先のレポートより集中して書いている生徒が多かった。また、お話の感想を語り合っている声が聞こえた。

2) 分析結果

(1) Death-Education 実施前の記述内容

低学年 78 名への絵本鑑賞前のレポートは 73 名分が回収された。生徒達が日ごろ「命や生きること」について、どのように感じ、考えているのかに着目して内容を分析した結果、全記述数は 141 であり、以下の 6 つのカテゴリーが抽出された。カテゴリーおよびサブカテゴリーについて以下に記述した。また、抽出過程は表 2 に示した。

第 1 カテゴリー：みんなの生きる大切な命

- 1) 一つしかない命
- 2) みんなの生きる命
- 3) 神様から借りている命

第 2 カテゴリー：はかない命・限りある命

- 1) 一つしかない
- 2) 死んだら戻らない
- 3) はかない命

第 3 カテゴリー：命がなくなる原因と機能の停止

- 1) 命がなくなる原因
- 2) 機能の停止

第 4 カテゴリー：命を守ろうという意志・具体的な手立て

- 1) 一つしかない命を守ろう
- 2) 交通事故の防止
- 3) 危険な行為をしない

第 5 カテゴリー：命や死に対する問いや死別への思い

- 1) 命・死への疑問
- 2) 死に逝くものへの悲哀
- 3) 残されたものへの憐憫

第 6 カテゴリー：死後の命

- 1) 神様になる

2) 骨になる

以下に各カテゴリーの特徴と具体的内容について述べる。

第1カテゴリー：みんなの生きる大切な命

このカテゴリーは、人間だけではなく、生きているすべてのものに命は一つだけあるものであり、その命は、大小を問わず大切な宝物であることを表している。サブカテゴリーとしては、1) 一つしかない命、2) みんなの生きる命、3) 神様から借りている命から構成されている。

1) 一つしかない命

このサブカテゴリーでは、命の大切さをどんな生き物にも一つしかないという有限ゆえに、大切なものとして捉えていた。具体的な記述内容は、「命は一つしかないから大事・大切」「命は一つしかないから一番の宝物」の2つであるが、対象の半数以上が記述していた。

2) みんなの生きる命

これは、命は、生きるために必要で、人間だけではなく、木にも魚にも動物にもみんなにあること、大きくても小さくても同じように大事であることとして捉えていた。具体的な記述としては、「命は人間だけではなく、動物にも魚にもある」「鳥も魚も木も命がないと生きていられない」「命は大きくても小さくても同じ」

などがあった。

3) 神様から借りている命

これは、命は自分のものではなく、借りているものだから大切であるとして捉えていた。具体的には「神様からかりている大切なもの」である。

第2カテゴリー：はかない命・限りある命

このカテゴリーは、一つしかない命のはかなさ、有限性、非可逆性、非予測性を表現している。サブカテゴリーは、1) 一つしかない、2) 死んだら戻らない、3) はかない命から構成されている。

1) 一つしかない

これは、「1つしかない」という命の限定性を表し、具体的な記述は、「命は一つしかない」「命は一つしかないからそれが無くなると死んでしまう」「命は世界のみんな、動物も一人一つ」などであった。

2) 死んだら戻らない

これは、「死んだら戻らない」という命・死の不可逆性を表現している。具体的な記述は、「たとえ赤ちゃんでも命が無くなったら一貫の終わり」「赤ち

ゃんが生まれても死んだ人は返ってこない」「命は絶対交換とかできない」などである。

3) はかない命

これは、ちょっとしたことで思いがけずに失われるという命のはかなさを表している。具体的には、「命はあっという間に無くなると残念だな」「命を無くなさいようにしていないと、すぐ、命が無くなってしまう」などである。

第3 カテゴリー：命を失う原因と機能の停止

このカテゴリーは、命が失われる原因にはどのようなものがあるか、命がなくなると活動が停止することを表現している。サブカテゴリーとしては、1) 命がなくなる原因、2) 機能の停止から構成されている。

1) 命がなくなる原因

これは、交通事故や病気、虫に刺されるなど、死をもたらす直接的な原因について表されている。具体的な記述は、「車にひかれそうになったとき」、「ガンや病気にかかったとき」「生まれるとき病気にかかったり、目があかなかつたら大丈夫かなと思う」「虫やハチに刺されたとき死んでしまう」などである。

2) 機能の停止

これは、命が生きて活動する源であり、その命がなくなると何もできなくなり、それが死ぬことと捉えていることを表現している。具体的な記述は、「命がないとなにもできない」「命がないと生きていけない」「命がないと死んでいるのと同じ」などである。

第4 カテゴリー：命を守ろうという意志・具体的な手立て

このカテゴリーは、命を守ろうという意志の表明と命を守る具体的な手立てについて表されている。サブカテゴリーは、1) 一つしかない命を守ろう、2) 交通事故の防止、3) 危険な行為をしないから構成されていた。

1) 一つしかない命を守ろう

これは、一つしかない大事な命を大切に守らなければならないという意志について表されている。具体的な記述は、「命の時計を大事にする」「誰だって命は一つしかないから命は守らなきゃいけない」「大きくても小さくても一つの命は自分で守らなければ生きていけない」などである。

2) 交通事故の防止

これは、命を失う身近な原因である交通事故を防ぐために、日ごろ子ども自身が気をつけていることを表現している。具体的な記述は、「横断歩道を渡るときは青になってから渡る」「車道に上がらないで歩道を歩く」「道路や線路

に飛び出さない」などである。

3) 危険な行為をしない

これは、毎日の生活の中で、家庭や学校で注意を喚起されている事故を防ぐための手立てを表している。具体的な記述は、「危ないものを使うときはお父さんやお母さんと一緒に使う」「火遊びをしない」「子どもだけで花火をしない」などである。

第5 カテゴリー：命や死に対する問いや死別への思い

このカテゴリーは、死や命に対する漠然とした疑問と死ぬ人や動物、大事なペットや身近な人を失った人の悲しみに共感し哀れむ感情を表現している。サブカテゴリーとして、1) 命・死への疑問、2) 死に逝くものへの悲哀、3) 残されたものへの憐憫から構成されている。

1) 命・死への疑問

これは、命や死に対する漠然とした疑問を表すもので、具体的な記述は、「どうして人間は死んじゃうのですか」「どうして命は一つしかないのですか」「人間は、病気でも死んじゃうことがあるんですか」などである。

2) 死に逝くものへの悲哀

これは、死に逝く人や死ぬ人の辛さに共感し哀れみを感じることを表している。具体的な記述は、「生きる力が無くなってしまった人は辛いと思う」「亡くなってしまった人はとってもかわいそう」「事故で亡くなった人はかわいそう」などであった。

3) 残されたものへの憐憫

これは、死ぬ人や動物に対してではなく、死に別れ残った人の気持ちを悼む気持ちを表現している。具体的な記述は、「動物を飼っていて死んだら悲しい」「命を失うとみんなを悲しませる原因になる」「子どもが死んだら両親がとてもかわいそうです」などであった。

第6 カテゴリー：死後の命

これは、死後の生き方や、死んだらどのような扱いを受けるのかということ表現していた。サブカテゴリーとして、1) 神様になる、2) 骨になるから構成されている。具体的な記述は「命は一つしかないから生き返らないけど神様になって人間は生きる」「命がなくなったら拜んでから焼いてお骨にされちゃう」であった。

(2) Death-Education 実施後の記述内容

絵本鑑賞後のレポートは76名分が回収された。鑑賞前と同様に「命や生きる

こと」について、どのように感じ、考えているのかに着目して内容の分析を行った。鑑賞前に比べ、記述量が3割増し、全記述数は182であり、6つのカテゴリーが抽出された。6つのカテゴリーについては以下に記述した。カテゴリーおよびサブカテゴリーについて以下に記述した。また、抽出過程は表3に示した。

第1カテゴリー：命の大切さへの実感

- 1) 命はすごく大切なもの
- 2) 大きくても小さくても大事な命

第2カテゴリー：はかなく戻らない命

- 1) 命のはかなさ
- 2) 命は戻らない

第3カテゴリー：死の不動性

- 1) 死んだら動かなくなる
- 2) 機能を失う

第4カテゴリー：命を守る必要性の実感と命を守る行動

- 1) 自分で命を守ろうという意志
- 2) 事故を防ぐための手立て

第5カテゴリー：死や死別に対する思い

- 1) 死に逝くものに対する憐憫
- 2) 死別の悲しさ・つらさ
- 3) 心に残る命の存在

第6カテゴリー：お話の中で疑問に感じた命や感動

- 1) 死や命への問い
- 2) 死や命への感動

以下に、各カテゴリーの特徴と具体的内容について述べる。

第1カテゴリー：命の大切さへの実感

このカテゴリーは、鑑賞前でも抽出されている命が大切なものであることの単純な表現であるが、ここでも最も記載が多く「すごく」という修飾がさらに付与されている。サブカテゴリーとしては、1) 命はすごく大切なもの、2) 大きくても小さくても大事な命で構成されている。

1) 命はすごく大切なもの

これは、命の大切さを寄り深く実感し、さらに大事にしていきたいという気

持ちを表現している。具体的な記述内容としては、「命はすごくたいせつなものなんだな」「命は一つしかないからもっともっと大切にしなければならないんだなあと思いました」「本当に命は一つだからちゃんと大切にしないといけない」「自分も命の大切の仕方がだんだんわかってきた」などである。

2) 大きくても小さくても大事な命

これは、大きさに関わらず大事であるが、小さいほど大事にしたいという思いを表現している。具体的な記述としては、「好きなペットがいたら人より小さいからもっと大切にしなければならない」「大きくても小さくても大事な命」などであった。

第2 カテゴリー：はかなく戻らない命

このカテゴリーは、命のはかなさ、死の非予測性、非可逆性、有限性を表現している。サブカテゴリーとしては、1) 命のはかなさ、2) 命は戻らないで構成されている。

1) 命のはかなさ

これは、死が予測できず、ちょっとしたきっかけ瞬時に死に至ることがあるということを表している。具体的な記述内容としては、「命はパッと無くなる」「僕も犬を飼っているからそういうことがあるかもしれません」「死はちょっとした弾みで起こるかもしれない」「99%良くて、1%悪ければ死ぬ可能性はある」などであった。

2) 命は戻らない

これは、命が有限で、非可逆的な性質のものであることを示す表現である。具体的な記述内容としては、「命を亡くすと戻ってこない」「命は死んだらもう二度と返ってこない」「僕も犬を飼っているからそういうことがあるかもしれません」などであった。

第3 カテゴリー：死の不動性

このカテゴリーは、死ぬという生物的反応と死によって失う機能について表現している。サブカテゴリーとしては、1) 死んだら動かなくなる、2) 死ぬと失う機能で構成されている。

1) 死んだら動かなくなる

これは、身体的機能や状態から死について表現している。具体的な記述内容としては、「命がなくなると動かなくなる」「動物は体が冷たいと死んでいる」、「命の不思議なパワーが無くなると死ぬんだ」などである。

2) 死ぬと失う機能

これは、子どもの日常生活範囲で、楽しみとしていることが、死によって失われることを表現している。具体的な記述内容としては、「命が無くなったら誰とも遊べない」「一緒におやつを食べられない」「お散歩もできない」などである。

第4 カテゴリー：命を守る必要性の実感と命を守る行動

このカテゴリーは、命を自ら守ることの必要性を感じ、命を守る具体的な方法について言及している。サブカテゴリーとしては、1) 自分で命を守ろうという意志、2) 事故を防ぐための手立ての2つで構成されている。

1) 自分で命を守ろうという意志

これは、具体的な記述内容としては、「命はすごく大事なものだから自分の命は自分で守らなきゃいけないんだとようやくわかった」「自分の命は世界に一つしかないのできちんと自分で管理する」などである。

2) 事故を防ぐための手立て

これは、交通事故防止や日常生活における事故防止に関して表現している。具体的な記述内容としては、「信号も無い道路に飛び出さず、左右をよく見て道路を渡る」「車が留まっているところを通らない」「線路に石を投げない」「自転車に気をつける」「危ないものはお父さんお母さんと一緒に使う」「体に悪いものを食べない」などである。また、人間だけではなく、「犬や動物は人より生まれる時間が短いからいっぱいかわいがらないと」「ペットも自分なりにお世話してあげる」などもあった。

第5 カテゴリー：死や死別に対する思い

このカテゴリーは、死に逝く対象だけではなく、死別によって残された人の悲しみに共感する思いの一方で、死後も心にのこる対象の命の永続性を表現している。サブカテゴリーは、1) 死に逝くものに対する憐憫、2) 死別の悲しさ・つらさ、2) 心に残る命の存在で構成されている。

1) 死に逝くものに対する憐憫

これは、死に逝く人や動物に対し、同情や共感する思いを表現している。具体的な記述内容としては、「生き物が死んでしまったらかわいそう」「死んでしまった人は生き返りたくても死んでしまったから生き返れないのですごくかわいそう」などである。

2) 死別の悲しさ・つらさ

これは、死に逝く対象そのものではなく、残された家族や友達の悲しみに共

感ずる思いを表現している。具体的な記述内容としては、「一番仲良くしている人、生き物が死んでしまったら悲しいね」「死んでしまった人の友だちやお母さんたちは生きていた中で一番悲しいんだなと思いました」などであった。

3) 心に残る命の存在

これは、身体的な命は失っても、記憶の中には生きていたときの存在や関係性がいつまでも失われないという、命の永続性について表現されている。具体的な記述内容としては、「犬のポチは目をつぶれば一緒といわれたことで新たな一歩を踏み出したと思う」「死んだら一生会えないけれど私のそばに死んでしまったゲンタがきっとそばにいてくれると思います」などである。

第6 カテゴリー：お話の中で疑問に感じた命や感動

このカテゴリーは、お話を鑑賞後の新たに生じた命や死への疑問や、読後の感想が表現されている。サブカテゴリーは、1) 死や命への問い、2) 死や命への感動で構成されている。

1) 死や命への問い

これは、死や命に対する一般的な疑問や希望を表現している。具体的な記述内容としては、「どうしていつか死んじゃうの」「命ってどこにあるんだろう」「命はどうしても一つしかないのかなもっと一杯あればいいのに」などである。

2) 死や命への感動

これは、鑑賞後に感じた命への感動に関する感想を表現した。具体的な記述内容としては、「突然ポチが死んでしまうところが心に残った」「命ってすてきだ」「感動した」などである。

3) 考察

(1) 低学年における実施前後の記述内容に見られる特徴

① 漠然とした記述から、理由も考えた表現へ

抽出したカテゴリーからの実施前後における特徴を検討すると、実施前では、命の大切さは、「命は大切・大事」という漠然とした記述が最も多かったが、後では、「命はすごく大切なものなんだな」というように感情移入のある表現が最も多く、また、「好きなペットがいたら人より小さいからもっと大切にしなければならぬ」とか「本当に命は一つだからちゃんと大切にしないとイケない」など、大切にしなければならぬ理由を説明するようになっていた。

② 死や命を守ることの一般的知識から感情表出へ

教育前では「虫やハチに刺されたら死ぬ」「横断歩道を渡るときは手を挙げて渡る」など、死に至る原因や交通安全・事故防止など、日ごろ学校や家庭で

教えられている注意事項（交通安全や事故防止）の記述が最も多く、全体の4分の1以上を占めていた。しかし、教育後では、そうした一般的な知識の記述は、10分の1にも満たなくなり、「死ぬってかわいそうだね」「もしそういうことがあったら寂しいだろうなと思った」などの死別の悲しみや死に逝くものへの哀悼など、個々の生徒が感じた感情を表現している記述が多くなっていった。

③ 死の不動性

教育前でも、命が生きて活動する源であり、命が失われると動けなくなり、それが死ぬことと捉えているが、その記述は漠然としており、「命がないとなにもできない」、「命がないと生きていけない」、「命がないと死んでいると同じ」等であった。しかし、教育後では、死の不動性を具体的に「命がなくなると動かなくなる」、「動物は体が冷たいと死んでいる」「命が無くなったら誰とも遊べない」、「一緒におやつを食べられない」、「お散歩もできない」などと表現しできるようになっていた。

④ 命のはかなさや死の普遍性、精神的な命の永続性

教育後では、「死はちょっとしたはずみで起こるかもしれない」、「99%良くても、1%悪ければ死ぬ可能性はある」、「僕も犬を飼っているからそういうことがあるかもしれません」など、命のはかなさや死の普遍性に対する認識が深まり、記述も多くなっていった。また、教育前には見られなかった死後の死者とのつながり、すなわち、精神的な命の永続性について表した記述が教育後には多くみられた。その内容は、「ポチとルナは命と命のアンテナがつながった」や「ポチは死んじゃったけれど、離れていても一緒ずっと友だち」、「ポチは死んじゃってもルナに会いたかったんだね」など低学年の生徒は、素直にお話しを受け止め、共感していることが読み取れた。

(2) 低学年における Death-Education の評価

① 教材および実施方法の評価

実施前におけるレポートの記述時には、私語があり実習生や担任に質問する様子が見られた。しかし、絵本鑑賞中は、私語もなく集中して見ており、終了後は、拍手も起こった。このことから、生徒の集中力が持続する10分程度の時間内で視覚的聴覚的に伝えたことは、理解力の面からも適切であったと考える。

また、レポート提出は、実施前は73名であったが、実施後には76名に増えていた。さらにレポート内容では、実施前に比べ実施後は、記述量も増え、記述数では、141から182に増加している。さらに、実施前には、一般的、概念的に感じていた思いが再認識され、感情が込もっていることを表す修飾語が増え（例：「命は大切」が「命はすごく大切」「命はやっぱり一つなんだな」な

ど)、センテンスが長くなっていた。このことから、生徒が絵本鑑賞を通して命や死について考える何らかの機会となったことが示唆される。

今回は、低学年の生徒に直接「人間の死」教材にすることによる衝撃を考慮し、身近であるペットとの死別をテーマとした。しかし、レポートの中には、「生まれるとき病気にかかったり、目があかなかったら大丈夫かなと思う」「死んでしまった人の友だちやお母さんたちは生きていた中で一番悲しいんだなと思いました」など、低学年の生徒なりに人の死についても見つめる力が感じられた。祖父母の死を体験している生徒もいる。今後は、低学年にも、病気や人の死も視野に入れて検討していきたい。

② 生徒のレポートからの評価

死の準備教育として、1回限りの絵本鑑賞がどの程度効果があるかを評価することは困難である。しかし、絵本の鑑賞を通して、命の有限性や不可逆性を再認識し、命の大切さを実感する機会になっていたこと、絵本を通して死別の悲しみを擬似体験することで、他人の悲しみを共感することもできるようになることなどが読み取れた。

また、授業を受けた生徒の中の何人かがペットとの死別体験をしており、「自分の犬が死んでしまったけれど、ずっと心の中にいると思う」「ぼくの犬はこころのなかにずっといる」などの記述から、授業を通して、ペットの死を自分の心の中に肯定的に位置づける機会となったことが推量された。

表2. 低学年：Death-Education 実施前

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
1. みんなの生きる大切ないのち	1) 一つしかない命	<ul style="list-style-type: none"> ・命は一つしかないから大事・大切 ・命は一つしかないから一番の宝物 ・命は小さいけれどたいせつだね
	2) みんなの生きる命	<ul style="list-style-type: none"> ・命は人間だけではなく、動物にも魚にもある ・家族みんな命をもっているね ・鳥も魚も木も命がないと生きていられない ・命は人間だけではなく、動物にも魚にもある ・命は人や動物には必ずあるものなので一つ一つ大事にする ・みんなの生きる命 ・みんなみんな生きている。 ・命は大きくても小さくても同じ ・命があると長生きできるかもしれない
	3) 神様から借りている命	<ul style="list-style-type: none"> ・神様からかりている大切なもの
2. はかない命・限りある命	1) 一つしかない	<ul style="list-style-type: none"> ・命は一つしかないからそれが無くなると死んでしまう ・命は世界のみならず、動物も一人一つ ・たとえ赤ちゃんでも命が無くなったら一貫の終わり
	2) 死んだら戻らない	<ul style="list-style-type: none"> ・赤ちゃんが生まれても死んだ人は返ってこない ・命は絶対交換とかできない
	3) はかない命	<ul style="list-style-type: none"> ・命はあっという間に無くなると残念だな ・命を無くなさないようにしていないと、すぐ、命が無くなってしまう
3. 命がなくなる原因と機能停止	1) 命がなくなる原因	<ul style="list-style-type: none"> ・車にひかれそうになったとき ・ガンや病気にかかったとき ・虫やハチに刺されたとき死んでしまう ・けがをしてもいのちにかかわる

	2) 機能停止	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとと、堅いところに頭をぶつけること ・世界の人口が減るので大変なことになる ・命が無くなったらもう友だちやお父さんお母さんに会えなくなる ・命がないとなにもできない ・命がないと生きていけない
4. 命を守ろう という意志・具 体的な手立て	<p>1) 一つしかない 命を守ろう</p> <p>2) 交通事故の防 止</p> <p>3) 危険な行為を しない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・命の時計を大事にする ・誰だって命は一つしかないから命は守らなきゃいけない ・大きくても小さくても一つの命は自分で守らなければ生きていけない ・交通事故にあわないようにする ・横断歩道を渡るときは左右をよく見てそして手を挙げて渡ります ・止まっている車の前を通ること ・車道に上がらないで歩道を歩く ・道路や線路に飛び出さない ・危ないものを使うときはお父さんやお母さんと一緒に使う ・火遊びをしない ・子どもだけで花火をしない ・手のひらの半分が火傷したら病院に行く
5. 命や死に対 する問いや死別 への思い	<p>1) 命・死への疑 問</p> <p>2) 死に逝くもの への悲哀</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・どうして人間は死んじゃうのですか ・どうして命は一つしかないのですか ・人間は、病気でも死んじゃうことがあるんですか ・生きる力が無くなってしまった人は辛いと思う ・亡くなってしまった人はとってもかわいそう ・事故で亡くなった人はかわいそう ・動物を飼っていて死んだら悲しい

	3) 残されたものへの憐憫	<ul style="list-style-type: none"> ・命を失うとみんなを悲しませる原因になる ・子どもが死んだら両親がとてもかわいそうです ・長生きできればいいな
6. 死後の命	1) 神様になる	<ul style="list-style-type: none"> ・命は一つしかないから生き返らないけど神様になって人間は生きる
	2) 骨になる	<ul style="list-style-type: none"> ・命がなくなったら拜んでから焼いてお骨にされちゃう

表 3. 低学年：Death-Education 実施後

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
1. 命の大切さへの実感	1) 命はすごく大切 2) 大きくても小さくても大事な命	<ul style="list-style-type: none"> ・ 命はすごく大切なもの ・ 本当に命は一つだからちゃんと大切にしないとイケない ・ 命は一つしかないからもっともっと大切にしなければならないんだなあ ・ 自分も命の大切の仕方がわかってきた ・ 命は大きくても小さくても大事な命 ・ 好きなペットがいたら人より小さいからもっと大切にしなければならない
2. はかなく戻らない命	1) 命のはかなさ 2) 命は戻らない	<ul style="list-style-type: none"> ・ 死はちょっとした弾みで起こるかもしれない ・ 99%良くても、1%悪ければ死ぬ可能性はある ・ 命はパッと無くなる ・ 命は死んだらもう二度と返ってこない ・ 僕も犬を飼っているからそういうことがあるかもしれません
3. 死の不動性	1) 死んだら動かなくなる 2) 機能を失う	<ul style="list-style-type: none"> ・ 命がなくなると動かなくなる ・ 動物は体が冷たいと死んでいる ・ 命の不思議なパワーが無くなると死ぬんだ ・ 命が無くなったら誰とも遊べない ・ 一緒におやつを食べられない ・ お散歩もできない ・ 命が無くなると何もできなくなると思いました
4. 命を守る必要性の実感と命を守る行動	1) 自分で命を守ろうという意志 2) 事故を防ぐための手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・ 命はすごく大事なものだから自分の命は自分で守らなきゃいけないんだとようやくわかった ・ 自分の命は世界に一つしかないのできちんと自分で管理する ・ 信号も無い道路に飛び出さず、左右をよく見て道路

		<ul style="list-style-type: none"> ・車が留っているところを通らない ・線路に石を投げない ・自転車に気をつける ・危ないものはお父さんお母さんと一緒に使う ・体に悪いものを食べない ・体調に合わせて行動する ・犬や動物は人より生まれる時間が短いから・いっぱいかわいがらないと、と思う ・ペットも自分なりにお世話してあげる ・かわいそうだとすぐ病院に連れて行く
5. 死や死別に対する思い	<p>1) 死に逝くものに対する憐憫</p> <p>2) 死別の悲しさ・つらさ</p> <p>3) 心に残る命の存在</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生き物が死んでしまったらかわいそう ・死んでしまった人は生き返りたくても死んでしまったから生き返れないのですごくかわいそう ・一番仲良くしている人、生き物が死んでしまったら悲しいね ・死んでしまった人の友だちやお母さんたちは生きていた中で一番悲しいんだなと思いました ・死んでしまったら悲しいけれどお墓に入ってしまったらもっと悲しいな ・ずっと一緒だったのに別れるって辛いね ・ポチは死んじゃったけれど心にはずっと生きてるんだなと思いました ・犬のポチは目をつぶれば一緒といわれたことで新たな一歩を踏み出したと思う ・死んだら一生会えないけれど私のそばに死んでしまったゲンタがきっとそばにいてくれると思います
6. お話の中で疑問に感じた命や感動	1) 死や命への問い	<ul style="list-style-type: none"> ・どうしていつか死んじゃうの ・命ってどこにあるんだろう ・命はどうしても一つしかないのかなもっと一杯あればいいのに ・ポチはどこにいてしゃべったの

	2) 死や命への 感動	・突然ポチが死んでしまうところが心に残った ・命ってすてきだ ・感動した
--	----------------	--

2. 高学年

1) 実施方法

日時：2003年9月9日（火）9：35～10：20

実施場所：小学4年生の教室およびプレイルーム

対象：小学4年生、1組（40名）、2組（40名）の2クラス計80名

実施内容：

- (1) 役割分担等：2教室各3名の研究者を配置。1名が研究の趣旨、方法の説明を行い、2名は用紙の配布、回収を実施した。
- (2) 教材：ドキュメンタリー番組「天国のたかし君、奇跡をありがとう」を10分程度に編集したもの。内容は、病を抱えながら、亡くなる直前まで、学校生活を送り続けていた「たかしちゃん（12歳男児）」が、いくつかの出来事を通して、「命」や「生きること」について感じたり、考えたりしながら、懸命に生きる姿を描いたものである。
- (3) 教材の選定の理由：この時期の子どもの認知・思考の特徴は、具体的な思考を中心として身近な問題や具体的に知覚したことを通して物事をとらえ、思考する特徴を持つといわれている。そこで、子ども達にとってできるだけ身近に思える存在であることが重要であると考えた。このドキュメンタリーの主人公の「たかしちゃん」は、対象とする子ども達と同年代の子どもであること、そのたかしちゃんの体験や思いを知ること、感じることを出発点として「いのち」「生きること」を考える第1歩となると考えた。
- (4) 授業の進め方：授業の進め方は、表4の通りである。

表4. 授業の進め方

導入：5分 (各教室)	①自己紹介 ②研究の趣旨、授業の進め方等の説明・用紙の配布
実施前レポート：10分	③「命」「生きること」について、日頃思うこと・考えていることをA4用紙に自由記載する。
ビデオ視聴：15分 (プレイルーム)	④研究者がビデオ内容の概略を説明した後、視聴
実施後レポート：10分	⑤「命」「生きること」について、今思うこと・考えていることをA4用紙に自由記載する。
まとめ：3分	⑥授業のまとめ、協力への謝辞

『実際の説明内容』

皆さん、おはようございます。はじめまして。私は、____といます。私達は、病気を持っている子ども達の看護をしていたことがあります。特に私たちは、皆さんと同じくらいの年の病気をもっている子ども達と接してきました。そのような子ども達と接していく中で、「いのち」や「生きる」ということについて考えさせられます。今日は皆さんと「いのち」や「生きる」ことを一緒に考えていきたいと思っています。そこで皆さんが普段「いのち」や「生きる」ということについて感じていることを自由に書いてもらったり、ビデオを見たりして考えていこうと思います。では、最初に「いのち」や「生きる」(板書)ということについて普段思っていること、感じていることを自由に書いてください。用紙を配ります。皆さんが書ける範囲で自由に書いて下さい。

(5) 生徒の反応：子ども達の反応は、真剣に話しを聞き、レポートを書いている間もそれぞれが自分の思いを一生懸命書いている様子があった。

ビデオ視聴後は、最初、隣同士でビデオのことを話す様子もあったが、今はお友達との相談ではなく、自分で感じたことを書いてみてくださいと伝えるとそれぞれが取り組んでいる様子があった。

(6) データ収集：参加者は、ビデオ視聴前後にそれぞれ「命」「生きること」について、思うこと・考えていることをA4用紙に自由に記載し提出することを依頼した。

2) 分析結果

(1) Death-Education 実施前の記述内容

高学年(4年生)80名の事前レポートから子ども達が「命、生きること」について、日頃どのように考えたり、感じたりしているのかに着目し分析した結果、次の4つのカテゴリーが抽出された。カテゴリーおよびサブカテゴリーについて以下に記述した。また、抽出過程は表5に示した。

第1カテゴリー：かけがえのない命

- 1) 大切な一つの命
- 2) 授かりものとしての命

第2カテゴリー：生きている実感

- 1) 生きている感覚
- 2) 生きていることを意味する活動

第3 カテゴリー：他者の死や存在を通して考える生・死

- 1) 世界に生きる人々の生と死
- 2) 殺人や自殺への思い
- 3) 病気と死
- 4) 身近な人の生・死からの思い

第4 カテゴリー：生や死への意味づけ

- 1) 不可逆的な死
- 2) 存在することすなわち生
- 3) 生きる意味

以下に各カテゴリーの特徴と具体的記述内容について述べる。

第1 カテゴリー：かけがえのない命

このカテゴリーは、命の大切さや命が唯一無二のものであること、それゆえに大切なものであることを記述したものである。サブカテゴリーとしては、1) 大切な一つの命、2) 授かりものとしての命から構成されている。

1) 大切な一つの命

これは、具体的な記述内容としては、「命は大切」「命は世界中どこでも一番大切」「命が一番の宝物」など、命の存在そのものが大切であるとストレートに表現しているもの、「命は一人に2つない」「命が2つあったらみんな大切にしないから命は大切」「命は一人にひとつしかないもの。命が2つも3つもあれば人は命を捨ててしまう。」「2つもあれば1回くらい死んでもいいやと思ってしまう。一つだから大切に生きる。」など、命は人間にとって唯一無二のものであり、それゆえに大切であるという考えを表していた。

2) 授かりものとしての命

これは、命が、神様からの与えられたものとして受けとめていることを意味していた。神様などの存在から「授かったもの、贈られたもの」であるから大切にしなければならないという表現が特徴として見られたものである。具体的内容としては、「神様からの授けもの」「神様がくれた贈り物だからせいっぱい生きて、命を大切にしたい」などの記述内容があった。

第2 カテゴリー：生きている実感

このカテゴリーには、子ども達が、自分の日常生活の体験から生きていることを感覚的、感情的に受けとめている内容と、自分の身体的な活動を通して生きていることを実感している内容を表している。このカテゴリーは、サブカテ

ゴリーの1) 生きている感覚、2) 生きていることを意味する活動の2つから構成される。

1) 生きている感覚

これは、生きているということを感じや感情で表現しているもので、具体的記述内容は、「生きているってしあわせ」「生きることはすばらしい」と感嘆的な表現や、「生きることは笑うこと」「生きることは怒ること」「生きることは楽しい」「生きることは喜び」「生きることの嬉しいこと、悲しいことなどいろいろある」など、生きることの喜怒哀楽を表現したものがあつた。また、「鬼ごっこして痛いと思った時」「お花を見てきれいだなって思った時」「星を見て微笑んだり、ホッとする時」「ご飯を食べておいしいと思う時」「色々なものを見てすごい、おもしろいと感じる時」など子ども達が、日常生活の体験から感じる気持ちや感情を表していた。さらに、「生きていることが不思議に思うときがある」「命がないと思うとちょっと嫌だ」など、生きていることを感覚的に表現している内容も含まれる。

2) 生きていることを意味する活動

これは、生きていることを日常的な活動や行動から表現しているもので、具体的記述内容は、生きることは「友達と遊ぶこと」「勉強すること」など、学童期の子ども達が、日頃の学校生活から生きていることを実感している内容であつた。また、生きることは「歩くこと」「食べること」「しゃべること」「走ること」「ねぼけること」など、日常の自分の活動を通して生きることを表現していた。さらに、生きることは「自由に動ける」「色んなことができる」「鼓動が動く」など生きていることを、身体的な行動や活動から実感している表現もあつた。

第3カテゴリー：他者の死や存在を通して考える生・死

このカテゴリーは、子ども達にとって身近な人の生や死から考えたものから日頃テレビや新聞から情報として見聞きする世界にある飢餓、殺人や自殺などの事件を通して他者の死や自分の状況とは異なる人々の状況や存在を通して生や死を考えていたものであつた。このカテゴリーは、1) 世界に生きる人々の生と死、2) 殺人や自殺への思い、3) 病気と死、4) 身近な人の生・死からの思いのサブカテゴリーで構成される。

1) 世界に生きる人々の生と死

これは、世界で起きている主に貧困や飢餓を通して生や死について記述したものである。具体的記述内容は、「世界には食べ物も水もなく貧しい人がいっぱいいる」「世界の子ども達は、食べられない人もいるのに私はぜいたくな

と思う」「世界には食糧難で亡くなる人もいるんだと思った」等であった。

2) 殺人や自殺への思い

これは、事件や自殺などを通して子ども達が考える生や死について表現されたものであった。具体的記述内容は、「ニュースや新聞で殺された、亡くなったと聞くと可哀想だなと思う」「こんなに恵まれているのに若い人の自殺が増えている」「悪いことをしていないのに殺される人、自殺する人もいるけどやっぱり生きていい」「人殺しは絶対に良くない」「人の命を殺しては絶対いけない」などであった。

3) 病気と死

これは、病気ということに注目して表現されていたもので、具体的記述内容は、「テレビで病気で苦しむ人がいて可哀想だった」「ほとんどの人が病気で死んでいる」「テレビで手術しても死んでいく人がいて家族が悲しそうだった」などがあった。

4) 身近な人の生・死からの思い

これは、「おじいちゃんの死」や「家族と会えなくなる死」「家族の死から生きることへの思い」など身近な人の死を通して生への思いが表現されていた。具体的記述内容は、「大好きなおじいちゃんが死んだ」「自分も死んでしまったら、またじいちゃんに会えると思った」「死んでしまったら大好きな家族とも会えなくなる」「生きていって大きくなったら家族の役に立ちたいと思った」などがあった。

第4カテゴリー：生や死への意味づけ

このカテゴリーは、命や生きることそのものがどのような意味を持っているのかを子どもなりに表現したものである。サブカテゴリーとしては、1) 不可逆的な死、2) 存在することすなわち生、3) 生きる意味から構成される。

1) 不可逆的な死

命と死の対比をしながら死の不可逆的な意味について記述しているもので、具体的記述内容は、「命がないと死んでいる」「命がないと死んでしまう」「死んでしまうとまた生きられない」「命は寿命がくると消える」「命がないと生きていない」「死んでしまうとまた生きることができない」などであった。

2) 存在することすなわち生

これは、命や生について存在するということから意味づけているもので、具体的記述内容は、「命がないと今ここにいない」「生きることにはこの世に存在すること」「生きることは子ども、大人がいること」「生きることは今ここにいないこと」など、存在することそのものが生きることを意味する表現であった。

3) 生きる意味

これは、生きるということ子どもなりに表現していたもので、具体的記述内容としては、「何をやっても生きることができないガンの時、生きることは大変なこと」「生きることって死ぬよりも大変なこと」などがあつた。さらに、「生きることは、自分のことだけじゃなく生物を助けること」「生きることは、人々を助けること」「生きることは社会に役立つこと」など、生きることの意味を他者へのはたらきかけからも表現しているものもあつた。

(2) Death-Education 実施後の記述内容

高学年 80 名ビデオ視聴後に「命や生きるということ」について感じたこと、考えたことについて記述した内容を分析した結果、5つのカテゴリーが抽出された。5つのカテゴリーおよびサブカテゴリーについては以下に記述した。抽出過程は表6に示した。

第1カテゴリー：死の不公平さへの思い

- 1) 良いことをしても、頑張っても死ぬ
- 2) 死ぬことへの恐れ・不安

第2カテゴリー：いのちの大切さの再発見

第3カテゴリー：生きることのすごさへの感動・発見

- 1) 生きることはそのものが役に立つこと
- 2) 生きることのすばらしさ
- 3) どんな状況でももてる生への希望

第4カテゴリー：生きる姿勢

- 1) 考えさせられた生き方、生きる心
- 2) 人・動物にやさしくありたい、役立ちたい思い
- 3) 人の役に立ちたい

第5カテゴリー：意図的な命の抹殺への憤り

- 1) 殺人への憤り
- 2) 自殺する人への憤り

以下に各カテゴリーの特徴と具体的データについて述べる。

第1カテゴリー：死の不公平さへの思い

このカテゴリーは、子ども達がビデオ中で日々の生活の中で自分のできることを見出しそれに対して懸命に努力した、主人公が、最後には死んでしまったことに対する気持ちとして表現されたものである。サブカテゴリーとして、1)

良いことをしても、頑張っても死ぬ 2) 死ぬことへの怖れ・不安という2つから構成されている。

1) 良いことをしても、頑張っても死ぬ

これは、努力をしたのに報われなかったという思いを表現しているもので、死の持つ不公平さや不条理を表現していた。具体的記述内容は、「なぜいいことをしても死んだのかわからない」、「あんなにがんばったのに死んでしまった」、「できるものなら生き返らせてあげたい」「悪い人が光に戻ってほしい」と記述していた。

2) 死ぬことへの恐れ・不安

これは、主人公の死を通して直接的に死を実感したことによると思われる、死を身近に感じ怖いもの、そうなったらどうしようなどの思いを表現しているものである。具体的記述内容は、「命がなくなるってすごく怖いということもわかった」「命はなくなると死んでしまう」「家族が重い病気になったらどうしよう、ひとりになったら生きられない、生きていけない」などがあつた。

第2 カテゴリー：命の大切さの再発見

このカテゴリーは、命の大切さをあらためて感じたり、命は何にもまして大切なものという気持ちを表現したものである。

ビデオ視聴前にも同様の記述として表されているが、「命の大切さがいっぱいわかった」「いのちがあるだけで幸せなことがわかった」「命の大切さあらためてわかった」などの「すごく」「あらためて」「本当に」などの感嘆の表現を付加して記述していることに特徴があつた。

第3 カテゴリー：生きることのすごさへの感動・発見

このカテゴリーは、主人公の生き方を通して生きることそのものについて子ども達なりの考え、意味づけを表現しているカテゴリーである。その内容は、生きるすばらしさ、強さといったものを実感したのものとして表現されている特徴がある。サブカテゴリーとして1) 生きることはそのものが役に立つこと、2) 生きることのすばらしさ、3) どんな状況でももてる生への希望から構成されている。

1) 生きることはそのものが役に立つこと

これは、ビデオを通して主人公が人の役に立ちたいという思いで行動したことから感銘した内容やその姿から生きることは人の役に立つという言葉キーワードとして生きることについて記述されていたものである。具体的記述内容としては「自分以外の人に役に立つすばらしさ」「生きることは誰かの役に立

つこと」「生きていることは自然に役にたっていた」などがあつた。

2) 生きることのすばらしさ

これは、ビデオでの主人公の姿を通して生きることのすばらしさ、すごさを子どもなりの言葉で表現されていたものである。具体的記述内容として「生きつづけようとがんばる姿に感動した」「命があればこんなこともできるんだと思った」「大人でもできないすごいことをしてびっくりした」「生きるっていうのがどんなに大切かわかった」「生きるということがこんなにすばらしいことと思った」「生きることは勇気を試すこと」などがあつた。

3) どんな状況でももてる生への希望

これは、命があり生きてさえいれば、どんなことでもできる可能性があるという希望や前向きな思い、たとえ死んでも心の中には存在しつづけつ事などを表現したものである。具体的内容としては「障害を持っていても生物の命を救ったりできると思った」「重い病気でも励ましあいながら生きていく」「病気になっていたのに一生懸命がんばっていたところがすごかった」「12年しか生きられなかったけど100年分がんばった気がする」「自分が病気になってもたかし君みたいになれるんだと思った」「なくなってもちゃんと心の中にいる」などがあつた。

第4カテゴリー：生きる姿勢

これは、ビデオを通して子どもなりに生き方、生きる姿勢について考えたことや自分もこうありたいという思いを表現したものである。サブカテゴリーとして、1) 考えさせられた生き方、生きる心、2) 人・動物にやさしくありたい、役に立ちたい思いの2つから構成される。

1) 考えさせられた生き方、生きる心

これは、たかし君の姿から生きる意味や生き方への姿勢を表現しているものである。具体的記述内容としては、「生きる大切さを教えてくれた」「生きつづけるということを忘れないと思った」「いっぱい生きるっていい喜び、つらいときもあるけどその喜びでできる」「どんなことがあっても生きていればいい」「自分からやろうと思う気持ちが大切」「宝物だというくらい命を大切にしたい」などがあつた。

2) 人・動物にやさしくありたい、役立ちたい思い

これは、自分自身もこうしていきたい、ありたいという自分としての姿勢を子どもなりに表現したものである。具体的記述内容は、「私もやさしい気持ちを持ちたい」「人にやさしくしてあげようと思った」「私も人や動物にいいこといろいろしたいなと思った」などであった。

第5 カテゴリー：意図的な命の抹殺への憤り

これは、自殺や殺人ということで意図的に命がなくなる行為や状況に対する思いを表現したものである。これは、サブカテゴリーは、1) 殺人への憤り、2) 自殺する人への憤りから構成される。

1) 殺人への憤り

これは、日頃安易に使われている「殺す」などの言葉を言うことなどに対する憤りを表現していたものである。具体的記述内容は、「殺してやるとか平気で言っている人がいる、どうしてそういうこと言うんだろう」「絶対ころすなんて言いたくない」等である。

2) 自殺する人への憤り

これは、自ら命を絶つことへの憤りを表している。具体的記述内容は、「みんな命を大切にしているが、自殺するばかりがいる」などである。

3) 考察

(1) 高学年における実施前後の記述内容に見られる特徴

抽出されたカテゴリーから前後での特徴を検討すると、実施前は、第1 カテゴリー「かけがえのない命」は、命の大切さを表現しており記述も比較的多かった。しかし、これは命について問われれば、「命は大切なもの、一つしかないもの、神様からの贈り物」といった観念的な範囲で命の大切さを記述していた特徴がある。また、第2 カテゴリー「生きている実感」では、生きている、生きるということについては、生きていることを、「生きることはしあわせ、すばらしい」「生きることは笑うこと…」など生きることを感嘆的、感覚的に表現したり、「生きることは食べる、走る…」「ご飯をおいしいと思う時」「…痛いと思う時」など、日常生活行動や日常の具体的な生活体験を通して感じる気持ち、感覚を中心に生きている実感を表現していた。

また、生・死を貧困や飢餓による死、病気による死などから考えているものも少なくなった。これらは、生・死を想像以上に様々な視点から考えているが、生・死を考える糸口もメディアからの情報が中心とし、それらは、「そういう人々がかわいそう」など、死を自分の身近なものというより遠い存在として考えている傾向があると思われた。自分にとって身近な人の死からその思いを記述しているものもいたが、全体的には少なかった。

現代社会の中では、子どもの生活から死は身近なものとして存在することが少なくなり、メディアなどの媒体を通して知るものとなっていると言われている。このような傾向は、生と死の教育を実践している研究者や現代の子どもの心身医療に携わっている人々からも指摘されている。冨田⁸⁾は、社会面からみ

た子ども達の死の現状について、高度成長に伴う社会環境の変化（地域社会の崩壊と核家族化など）により、生と死は、家族から離れ、病院に任され、人生に最も大切な出来事である生と死を子ども達の視界から奪ってしまったと指摘し、現代の日本社会の特徴は、子ども達が死を実感できないことであると述べている。今回の実施前の記述内容を見ても生・死については、自分にとって身近なものとして考えているというよりは、やや観念的であったり、遠い世界の人にとって大変なことという範囲に留まっていると考えられた。

次に実施後の特徴をみると、第2カテゴリー「命の大切さの再発見」は、実施前にも数多くあった「命の大切さ」を記述しているものであるが、「あらためて大切さを感じた」「本当に大切」「すごく大切」という感嘆的な修飾語を付加して記述しているのが多かったのが特徴的であり、カテゴリーとしては「再発見」というカテゴリー名で特徴を表した。また、同時に死の不公平さや死への恐れ・不安の記述が見られるようになり、「自分だったら…」など自分に引き寄せた形で記述していた。これは、ビデオの中で同世代の子どもの死を体験したことで死が自分の身近にも起こることとして感じた結果と考えられる。また、この年代の特徴として、原因・結果の因果関係も単純なとらえであることや死を単純に懲罰的なものとしてとらえ、死は不当なもの、良くないこととしてみる傾向があるためか、「いい事をしたのに…」、「病気なのにがんばったのに…」という死の不公平さ、不条理さを強く感じている記述が見られたのも特徴的であった。

また、実施前には生きていることを日常的な具体的な現象から表現していたものが多かった。しかし、実施後の第3カテゴリー「生きることのすごさへの感動・発見」の特徴に見られるように、生きることそのものが、他者に影響を与える意味を持つこと、生きることのすごさや力強さというものを実感したなど生き続けることの意味や生きていくことそのものが、すごいことであるといった生への希望や価値を見出していた。さらに生きることを考えさせられた結果、自分自身がどのように生きたい、人に対してこのようにありたいなど人としてのあり方、姿勢についても記述されていたのが実施前には見られなかった特徴であった。

実施前後いずれにも、自殺や殺人に対する記述が見られるが、実施前は、世界の貧困や飢餓の人々への関心と同様に一般的な範囲で殺人は良くないこと、命は大切なので自殺は良くないことという範囲で記述していた。しかし、実施後は、生きたくても生きられない人がいることを重ね、だからこそ殺人や自殺は良くないこと、命を粗末にすることのように表現されていた。

実施後に見られた特徴は、子ども達が、ビデオを通して自分と同じ年代の子

の生きる姿を見ることで、死そのものも含め、遠い世界の出来事から自分の身近な出来事の中に存在する生や死であることを実感した結果と考えられる。死を通して生を考える重要性とともに、その難しさについても多くの実践者から報告されている。北山⁹⁾らの、小学校4年生を対象とした人形劇による生と死の授業結果では、参加者の子ども達の多くが、感想として「命の大切さがわかった」「死ぬということがわかった」と表現する一方で、死ぬことについて「怖い」「悲しい」という否定的なイメージのこたえに留まり、まだ死をよりよく生きることと関連付けて考えられない様子が伺えた。この点から、死を通して命の大切さを伝えるためには、構造化したプログラムの開発が必要であると述べている。

今回の教材では、主人公は、最後は亡くなってしまったが、子ども達は亡くなったことそのものに注目し死への恐れや不安の増大というよりは、その生き方や死ぬまでががんばった姿に注目し生きる意味や人間の可能性にまで注目したことが印象的であった。生・死などの問題に対しても本質をつかみとる子ども達の力をあらためて感じたとともに、子ども達と生きること、死ぬことについて語り合うことの必要性を感じた。カテゴリーの中にあるように身近に感じたゆえに「死の不公平さや死への恐れ」といったものを記述した子ども達もいた。このような子ども達とは、時間をかけて一緒に語り合う場も大事と思われた。

(2) 高学年における Death-Education の評価

今回の教材は、この時期が具体的操作段階後半の時期に位置する事、また、死の概念については、死の不可避性、普遍性、不可逆性などを理解する年齢といわれ、それらを自分のものとして取り込むにはどのような体験をするのかに影響を受けるといわれている。そこで、子ども達にとって身近な存在と感ずることができるものであることを意識して教材を検討した。

実施前後の記述内容を検討してみると、今回の教材は、子ども達にとっては生・死を身近な問題として考える機会にはなったことが伺われる。これは主人公となった少年が子ども達と年齢が近いこと、日常の学校生活の中での様子がえがかれていたことが身近に感じたことにつながり実感して考えることになった。今回は、教材に対する子ども達の反応等も知るために、実施前後で子ども達一人一人が考えたことを記述する方法としたが、今後は子ども達同士が感じたこと等を語り合う場の設定なども含めた教育のあり方の検討も必要と考える。

表5. 高学年：Death-Education 実施前

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
1. かけがえのない命	1) 大切な一つの命 2) 授かりものとしての命	<ul style="list-style-type: none"> ・ 命は1番大切 ・ 一人で一つしかない ・ ひとりに2つない ・ 一つだから大切に生きる ・ 神様の授けもの ・ 神様の贈り物ゆえに大切に生きる
2. 生きている実感	1) 生きている感覚 2) 生きていることを意味する活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生きるしあわせ・すばらしさ ・ 生きことは笑うこと・おこること ・ 生きていることの不思議さ ・ 命のはかなさ ・ 生きることは嬉しさ・悲しさ ・ 遊ぶこと・勉強すること ・ 生きることは動くこと ・ 生きることは活動（走る、食べる…） ・
3. 他者の死や存在を通して考える生・死	1) 世界に生きる人々の生と死 2) 殺人、自殺への思い 3) 病気と死 4) 身近な人の生・死からの思い	<ul style="list-style-type: none"> ・ 世界の貧困・飢餓がかわいそう ・ 世界の一人の死もその家族の悲しみ ・ 人殺しは絶対いけない ・ 恵まれている人の自殺 ・ 病気の人がかわいそう ・ 病気で死ぬ人がかわいそう ・ 病気の人とその家族もかわいそう ・ 死んだおじいちゃんにはまた会える気持ち ・ 自分の死は家族に悲しみをもたらす ・ 家族の死を思うと悲しい ・ 家族の死から生きること大事
4. 生と死への意味づけ	1) 不可逆的な死	<ul style="list-style-type: none"> ・ 死んだら戻れない ・ 寿命での死

	2) 存在することすなわち生	・ 生きることはこの世に存在すること ・ 今ここにいることが生きること
	3) 生きる意味	・ 生きることは人に役立つこと ・ 生きることは死ぬより大変なこと ・ 生きることは大変なこと

表6. 高学年：Death-Education 実施後

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
1. 死の不公平さへの思い	<p>1) 良いことをしても、頑張っても死ぬ</p> <p>2) 死ぬことへの怖れ・不安</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ いいことをしても死ぬ人がいる ・ 悪い人が戻るところ ・ 頑張っても死ぬ ・ 命がなくなるのは怖いこと ・ 死ぬことは悲しい ・ なぜ重い病気になるのか
2. 命の大切さの再発見		<ul style="list-style-type: none"> ・ 命の大切さがあらためてわかる ・ 命は宝物 ・ 命は大切 ・ 生きることは大切
3. 生きることのすごさへの感動・発見	<p>1) 生きることそのものが役に立つこと</p> <p>2) 生きることのすばらしさ</p> <p>3) どんな状況でも持てる生への希望</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生きていることは自然に役立つこと ・ 生きることは勇気を与えること ・ 人に役立つすばらしさ ・ 生きていることのしあわせ ・ 生きることのすばらしさ ・ 生きつづけようとがんばる姿への感動 ・ 生きるっていいな ・ 12年も100年分の生 ・ 病気でもがんばるすごさ ・ 生きることは自分の勇気を試すこと ・ いのちがあれば何でもできる可能性 ・ 病気になっても自分にも何かできる ・ 生きることは夢や希望をもつこと ・ 生きることはがんばれること ・ 生きつづけることを忘れない ・ つらいことも生きる喜び
4. 生きる姿勢	1) 考えさせられた生き方、生きる心	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生きることを教えてくれた ・ 大切な生きる心

	2) 人・動物にやさしくありたい、役立ちたい 思い	<ul style="list-style-type: none"> ・やさしい気持ちを持ちたい ・私も人の役に立ちたい ・ボランティアも大事なこと
5. 意図的な命の抹殺への憤り	1) 殺人への憤り 2) 自殺する人への憤り	<ul style="list-style-type: none"> ・殺すことはいけないこと ・生きられない人もいるのに自殺はいけないこと

3. 中学生

1) 実施方法

日時：2003年10月30日（木）14:25～15:15

実施場所：体育館

対象：中学2年生、A組（37人）B組（38人）C組（37人）の3クラス計
112人

実施内容：

- (1) 役割分担等：4名の研究者で、1名が研究の趣旨を説明、2名はビデオの準備、1名は記録のためのビデオ撮影を行った。また、中学生の担任が見守った。
- (2) 教材：二分脊椎症という先天性疾患をもつ高校1年生の男子学生に、入院生活の体験、同年代の仲間に伝えたいことなどを講演してもらった。また、骨腫瘍で下肢の切断術を受けた中学生の闘病生活を取り上げたドキュメンタリー番組を編集し、ビデオで見てもらった。
- (3) 教材選定の理由：子どもは、形式操作段階である11歳前後から、死の普遍性・不可逆性・不可避性を理解できるようになり、成人の死生観に近づくといわれている。故に、中学生は小学生と異なり、「死」に関して、抽象度が高い教材を使用しても理解可能であると考えた。また、彼らと年齢が近い障害者や闘病体験をもつ人々から、「命」の大切さや尊さを実感して欲しいと考え、高校男子学生に講演依頼、さらに、視覚を通してイメージ化しやすいように関連ビデオを編集し、併用することとした。
- (4) 授業の進め方：授業の進め方は、表7の通りである

表7. 授業の進め方

導入：5分（体育館）	①自己紹介 ②研究の趣旨・授業の進め方の説明
展開：20分（体育館）	③高校男子学生の話 ④ドキュメンタリー番組のビデオ上映
まとめ：20分（各教室）	⑤「命について」「生きることについて」日頃思うことを、原稿用紙に自由記載する。

*10月22日（水）に、事前レポートとして、「命について」「生きることについて」日頃思うことを、原稿用紙（400字）1枚に書いてもらった。各々のクラスの担任によって行われた。レポートに要する時間は、30分間とし、書き終わるまで延長可とした。なお、注意事項として、担任はレポート内容に関して方向づけは行わないように依頼した。

【高校男子学生の話の趣旨】

僕は障害をもって生まれました。生まれた時からずっと障害と背中合わせで育ってきました。小・中・高とも普通の学校に入学しました。松葉杖を使って歩行していますが、自転車に乗って通学をしています。楽しい高校生活を送っています。

入院生活を通して、病気で亡くなる多くの子どもたちを見てきた僕は、今、ニュース等で報じられる「事故」「事件」「自殺」といった、自分の命や他人の命を大切にしない出来事を見聞きする度に悲しい気持ちになります。生まれた時から健康な人は、健康であることが「当たり前」になっていて、それがどんなに幸せなことであるか、忘れて生活しているように感じる場合があります。病気は、深刻な病気であればあるほど、健康だった昨日までと、生活全てが変わります。僕の話だけではイメージが難しいと思うので、ここで入院生活のビデオを見て頂きたいと思います。

（ドキュメンタリー番組のビデオ上映）

ビデオ、いかがでしたか？入院中、「生きたくて、生きるために、辛い検査や治療も一生懸命頑張っていた多くの友達に出会いました。それにもかかわらず、亡くなっていきました。一方、命を粗末にした事件・事故が毎日のように起きています。なぜ、このようなことが起こるのでしょうか？病気と闘って一生懸命生きている人がいます。その人たちから学ぶことがたくさんあるように思います。皆さん方は「命について」「生きることについて」どのように考えますか？僕はこのようなことを考えることは、とても大切なことだと思うようになりました。皆さんと一緒に考えていけたらと思います。ありがとうございました。

【ドキュメンタリー番組の内容】

骨腫瘍のため、下肢切断術を受けた中学生の男の子と付き添いの母親との闘病生活の様子を記録したドキュメンタリー番組である。男の子は抗癌剤のため辛い副作用に悩まされるが、母親に励まされながら、抗癌剤治療を終えた。番組を通して、男の子と母親の心の葛藤・不安・悲しみ・怒り・安堵・喜びなどの心の変化が描かれており、治療から退院に至るまでの闘病生活の様子を伺うことができた。

（5）生徒の反応：

U君の講演時には、私語もほとんどなく皆真剣に聞いていた。ドキュメンタリー番組放映時も同様の反応であった。実施後のレポートは、各々の教室に戻り、A4用紙に自由記載して提出するよう依頼した。

2) 分析結果

(1) Death-Education 実施前の記述内容

中学2年生 112名の事前レポート記述内容から、生徒達が日頃「命・生きること」について、どのように考えたり、感じているのかに着目し分析した結果、7つのカテゴリーが抽出された。7つのカテゴリーおよびサブカテゴリーについては以下に記述した。抽出過程は、表8に示した。

第1カテゴリー：かけがえのない命

- 1) 大切な命
- 2) ひとつの命

第2カテゴリー：限りあるはかない命

- 1) はかない命
- 2) 限りある命

第3カテゴリー：命・生への意味づけ

- 1) 生物学的な命の意味
- 2) あらゆる生命の存在と価値
- 3) 与えられた存在としての命
- 4) 命の不思議さ
- 5) 命のあり方や生きることの意味
- 6) ひとつの流れとしての生と死
- 7) 命・生への問い

第4カテゴリー：死について思うこと

- 1) 死への恐れ
- 2) 死や死後への問い
- 3) 死への意味づけ

第5カテゴリー：命を軽んじることへの怒り・疑問・批判

- 1) 自殺する人への怒り・疑問
- 2) 他者の命を奪う言動への批判・疑問
- 3) 地球・自然の命を汚す行為への批判

第6カテゴリー：自分の生き方

- 1) 好きなことを楽しむ生き方
- 2) 後悔せず充実した生き方

第7カテゴリー：現代医療への問いかけ

- 1) 現代医療への疑問・意見
- 2) 医療者への批判・意見

以下に、各カテゴリーの特徴と具体的記述内容について述べる。

第1カテゴリー：かけがえのない命

このカテゴリーは、生徒達が命はお金にはかえられない人間にとって唯一無二の最も大切な、尊いものであることを表現したものである。サブカテゴリーとして、1) 大切な命 2) ひとつの命 から構成されている。

1) 大切な命

これは、命の大切さを生徒達が漠然と一般的、観念的に捉えているといえる抽象的な表現内容であった。具体的な記述内容としては、「命は大切なもの」「命は大事です」「命は世の中で一番大切なもの」「生命はかけがえのないもの」「尊いお金にかえられないもの」「命は宝」「無駄にしてはいけないもの」「命は大事ということだけははっきりしている」「命が大切なものというのはみんなの共通の意見だ」などがあった。

2) ひとつの命

これは、命が人間にとって唯一無二のものであるから大切であるという意味を表すものであった。具体的な記述内容としては、「命は一人に一つしかないから大切なもの」「命はひとつしかないから大切にしたい」「命はたった一つの決してお金では買えないもの」「命は他の何にも代えられない大切なもの」「物が豊かなこの時代でも命は買えない」などがあった。

第2カテゴリー：限りあるはかない命

このカテゴリーは、命のはかなさ、もろさ、そして命には限りがあるという命・死の不可逆性を表現したものである。サブカテゴリーとして、1) はかない命 2) 限りある命 から構成されている。

1) はかない命

これは、命が簡単に失われたり、壊れてしまうという命のもろさ、はかなさを表現している。具体的な記述内容としては、「命はただもろくはかない」「命はとてももろく病気に弱く、一部を壊すと命の全てが壊れる」「ペットが死んだのを経験して命はとてももろいと思った」「階段や転んだだけで命はくずれる」「命はこわれやすいもの」「命は容易に尽きるもの」「命、生きることは重いけど軽い。一番なくしてはいけないものだが一番簡単に失われてしまうもの」などがあった。

2) 限りある命

これは、命には限りがあり永遠ではないこと、人間はいつかは死んでしまうという命・死の不可逆性を表現している。具体的記述内容としては、「命は限りあるもの」「命は永遠ではない」「人には寿命がある」「人はいつか死んで

しまう」「人間はいつか他界する」「命にはいつか終わりがある」「人は早いか遅いかで最後は死ぬ」「命を失ったら二度と生きることができない」「科学が発達しても死んだ人を蘇らすことはできない」「命はなくしてしまうと一生戻らないもの」「命はコピーできない」「命をろうそくに例えるがそのとおりだ」などがあった。

第3 カテゴリー：命・生への意味づけ

このカテゴリーは、生徒達一人一人が命とは何か、生きるとは何かを多様で豊富な考え方、感じ方で表現している。また、命や生への問い、不思議さから命や生の意味を見出そうとしている表現も含まれる。サブカテゴリーとしては、1) 生物学的な命の意味 2) あらゆる生命の存在と価値 3) 与えられた存在としての命 4) 命の不思議さ 5) 命のあり方や生きることの意味 6) ひとつの流れとしての生と死 7) 命・生への問い から構成されている。

1) 生物学的な命の意味

これは、命や生を身体的機能や状態から表現しているものであり、具体的な記述内容としては、「命とは心臓が動くこと」「命には脳が必要です」「命がないと人はただの肉の塊になってしまう」「生命とは自分を動かしているもの」「命・生きると聞いて思うのは生態系」「命はただ一つ一つの部品がないと自分は成り立たず、命の意味がない」などであった。

2) あらゆる生命の存在と価値

これは、命が人間だけではなく地球上に生きている生物すべてに存在するという意味と、命の普遍的な価値や意味を表現している。具体的な記述内容としては、「この地球にはたくさんの命がある」「花も人と同じ命をもっている」「命は、生きているものが必ずもっているもの」「命は地球上にたくさん存在するので大切にしたい」「地球上にあるものすべてに命はある」「昆虫、動物、植物にも与えられ大事にしながら生きている」「イラクにも命はある」「人間だけでなく他の生物も生命をもっている」「生命は人間だけでなく、鳥、昆虫など様々な種類がある」「命は生きるための道具」「命は生きるための動力源」「命は生きているから存在するもの」「命は生きるエネルギー」「何をするのも命があるからできる」「命があるから人・動物・植物は生きている」などがあった。

3) 与えられた存在としての命

これは、命を与えられたもの、授かった存在として表現しているものであり、具体的な記述内容としては、「命とは、生かされているもののこと」「命は、その現世で与えられた世界の存在」「命は、生きている時に親から与えられた

もの」「命とは、両親の愛の結晶」「皆、平等に与えられたものそれが命」「命は、生きるものに与えられたもので上も下もない」「命は、人がつくられたときにもらうもの」などであった。

4) 命の不思議さ

これは、命や生きることのお不思議さを表現しているものであり、具体的な記述内容としては、「命とは、答えない謎のもの」「生命は、奇跡や理論とかではない不思議なことがある」「命、生きることは神秘的」「生きるということは簡単にみえて一生わからないもの」などがあつた。

5) 命のあり方や生きることの意味

これは、命のあり方や存在と生きることを対応させて表現しているものであり、具体的な記述内容としては、「感情も命がなければ感じれない」「命があるから夢を実現できたり、自分の道に進んでいける」「生きることは最低限やり遂げること」「生きるということは、その人の夢や希望に向かつていくもの」「生きることは自分のやりたいことをする」「命は人間のこころだ」「命は心そのものだ」「命は生きるという強い心がある」「生きることは素晴らしい」「生きることは普通に生活すること」「生きるとは今を生きること」「生きることはとても大変」「色々なことを感じるこころが生きるこころ」「生きることは辛いこころも楽しいこころもある」などがあつた。

6) ひとつの流れとしての生と死

これは、生と死をひとつの流れの中で捉えて表現しているものであり、具体的な記述内容としては、「生物には、生まれるということと死ぬということがあつる」「生と死は1セットである」「人が生きるのも死ぬのも流れのうちだ」「この世に生を受けたくさんのこころをし、この世を去っていただくただそれだけ」「生まれ子孫を残し死ぬ。全ての生物がこの本能に従って生きる」「生まれて死んでまた生まれてということをして人類の時代が長くなるこころで地球のために表されていく」「目に見えない命は終わりがあない」「命は消えるといつても心の中に永遠に生き続けるので本当に消えるわけではあない」などがあつた。

7) 命・生への問い

これは、命や生きるこころへの疑問、意見を率直に表現しているものと命や生きるこころの意味を模索している思いを表すもの、また投げやりの内容があつた。具体的な記述内容としては、「命とは何だ」「なぜ、命があるのか誰か知つているのか」「命とは何かよくわからない」「自分は何のために生きているのか」「命は自分でもまだわからないが、いつかはわかるもの」「命とか生きるこころを言葉で表現するのは難しい」「生きるってなんだろう」「自分の大切な人が亡くなつたこころがあないのてよくわからない」「考えても答えがあない」

「命は言葉で言うのは簡単だが実際よくわからない」などがあった。

一方、「一番難しく、一番くだらない問題」「命について考える人間が馬鹿に思える」「生きていることに何の意味があるのか」「命について深く考えたこともないし、何も知らない」「命、生き方について一度も考えたことはない」という記述内容もあった。

第4 カテゴリー：死について思うこと

このカテゴリーは、死に関する生徒達の考え、思い、疑問などが表現されているもので、サブカテゴリーとしては、1) 死への恐れ 2) 死や死後への問い 3) 死への意味づけ から構成される。

1) 死への恐れ

これは、死への恐怖感や嫌悪感を表現しているもので、具体的な記述内容としては、「死ぬのは怖い」「死にたくないというのはきっと変わらない」「死なないで済むのなら死にたくない」「死ぬというのは自分がいなくなるので恐ろしい」「人が死んだという出来事は怖く感じる」「周りの人が死ぬのも嫌だし、自分が死ぬのも嫌」などがあった。

2) 死や死後への問い

これは、死とは何か、死んだ後はどうなるのかという疑問を表現しているもので、具体的な記述内容としては、「人はなぜ死ぬのかということをよく考える」「死ぬとは何だ」「死ぬのなら、なぜ生まれてくるのか」「命について考えるとき、死んだらどうなるのか」「死んだ後はどうなるのかということが気になる」「死んだ後の自分の意識（命）はどこに行くのか」「死んだら自分はどこに行くのか」「マンガでは天国があり意思が存在するが、それがなかったらどうなるのか」などがあった。

3) 死への意味づけ

これは、死について生徒達なりに意味づけている表現内容であった。具体的な記述内容としては、「死は無だ」「死んだら嫌なこともないが楽しいこともない」「死は逃げ道でしかない」「死んだら充実した人生も消える」「死ぬために生きるから死ぬ」などがあった。

第5 カテゴリー：命を軽んじることへの怒り・疑問・批判

このカテゴリーは、生徒達が日常、新聞やテレビなどを通して見聞きする自殺、犯罪（殺人）、テロという出来事から自分の命、他者の命を奪う言動への怒りや疑問、また自然や地球を汚している行為への憤りなどが表現されている。サブカテゴリーとしては、1) 自殺する人への怒りと疑問・批判 2) 他者の

命を奪う言動への批判・疑問 3) 地球や自然の命を汚す行為への批判・意見から構成されている。

1) 自殺する人への怒りと疑問・批判

これは、メディアを通して知る自殺行為への怒りや疑問、さらに自殺する人への批判を表現しているのもであり、具体的な記述内容としては、「自殺する人は間違っている」「もらった命を一人で抱え込んで命を絶つのは大馬鹿者だ」「自分の命を自分で捨てるほど寂しいことはない」「自殺しようとする人は命の大切さを学ぶべきだ」「自殺は生きていく人に申し訳ない」「自殺などで命を無駄にしたくない」「なぜ自殺するのかよくわからない」「なぜ自分の命を絶つ必要があるのか」「自殺する人の気持ちが理解できない」「自殺は悲しいこと」「自ら命を絶つことはもったいないこと」「自分の命は自分で守り、簡単な理由で捨ててはいけない」「せっかく生まれてきたのに自ら命を絶つなんて絶対にいけない」「家族や親戚が悲しむ」などがあつた。

2) 他者の命を奪う言動への批判・疑問

これは、自殺行為と同様に生徒達が、メディアを通して見聞きする殺人事件やテロ行為などから、命を軽視する言動への批判や疑問が表現されている。また、生徒達の身近な生活の中で起こる他者の命を軽んじる言動への批判も含まれる。具体的な記述内容としては、「中学生が人を殺すのは衝撃的なこと」「少年犯罪を見て、動機があつても殺人は絶対ダメなのに理由もなく殺すのは一番よくない」「どんな理由があつても人の命を奪うのは最低だ」「他殺は絶対にしてはいけないこと」「殺人をする人は命の重みがわかっていない人」「犯罪を犯す人は命に対する感覚がなさすぎる」「命について考えさせられたのはアメリカの同時多発テロの時」「人を殺すことに反対で、死刑にも反対」

「世の中ゲーム化していて、人を殺してもリセットボタンを押せば元に戻る人がいる」「冗談でも『死ね』などと言つてはいけない」「学校で適当に『死ね』と言う人がいるが言われた人はショックだと思う」などがあつた。

3) 地球・自然の命を汚す行為への批判・意見

これは、地球にすむすべての生命を軽んじる社会の風潮や行為への批判を表現しているものである。具体的な記述内容としては、「虫や動物の命を簡単に奪う」「地球には絶滅寸前の動物もいる」「自分達の生命の源の地球を自分達で汚している」「人間は、自分の命を守る自然の命を自ら失っている」「自然・動物・人間に命があり、自分で守るもので他人がまもれるものではない」「人は、自分達のことを他より優れていると思ひすぎだ」「私達は地球を守つていなくてはならない」「人間は他の生物と何も変わらず、平等の命をもらったことを自覚しなければならない」などがあつた。

第6 カテゴリー：自分の生き方

このカテゴリーは、生徒達が今後の生き方として、自分の好きなことをしたい、楽しみたいという気持ちや、後悔せずに生きたい、充実した生き方をしたいという気持ちや決意を表現しているものである。サブカテゴリーとしては、1)好きなことを楽しむ生き方 2)後悔せず充実した生き方 から構成されている。

1)好きなことを楽しむ生き方

これは、生徒達が今後の生き方として、自分の好きなことをして楽しみたいという気持ちを表現している。具体的な記述内容としては、「今を楽しく生きたい」「せっかく与えられた機会だから楽しんで生きたい」「人に流されず、自分が大切だと思うことを好きなようにしたい」「自分のしたいことをしながら生きたい」「生きている間には悲しさや楽しさがあるが、自分のやりたいことを追いつけるのが生きること」「自分の求める生き様は、太く長く自分の好きなように生きるということ」「その時その時を楽しく過ごせればいい」などがあった。

2)後悔せず充実した生き方

これは、生徒達が今後の生き方として、後悔せずに充実した毎日を過ごしたいという気持ちや決意を表現している。具体的な記述内容としては、「たった一度しかない人生だから大切にし、充実させ一分一秒を貴重に過ごしたい」「今できることをして後悔しないように努力していきたい」「この世に生まれてきたことに後悔したくない」「嫌なことがあっても、前向きに限られた道を一生懸命歩いていきたい」「この命をもらったからには、毎日を力強く生きていこう」「自分の命だけでなく、周りの人で支えてくれる人も大切にしていきたい」「人間は人生の終わりまで一日を大切に過ごさなければならない」などがあった。

第7 カテゴリー：現代医療への問いかけ

このカテゴリーは、生徒達がメディアを通して知る現代医療のあり方への疑問やそこに携わる医療者への批判や意見が表現されている。

サブカテゴリーとしては、1)現代医療への疑問 2)医療者への批判・意見から構成されている。

1)現代医療への疑問・意見

これは、現代の医療技術の進歩に伴う様々な弊害に対する疑問や意見が表現されている。具体的な記述内容としては、「医学を使って延命することに何の意味があるのか」「命を引き伸ばそうとするのは人間だけだ」「技術が上がる

までに何人もの命を犠牲にしているのか」「人を冷凍保存して科学が進んだら生き返させられるというのは本当にいいことなのか」「健康に百歳まで生きるのはともかく、何度も死にかけて百歳まで生きるのは本当にいいことなのか」「病院では、命が軽く見ているのかと思った」などがあつた。

2) 医療者への批判・意見

これは、命を預かる医療者の姿勢や責任についての意見や批判が表現されているもので、具体的な記述内容としては、「命のことを一番わかっているのは医師」「一人の命も犠牲にせず一人一人の命を大切に治していくべきだ」「病人の命は頭が良ければ預かることができるのか」「人を救うためには技術と学力ではどちらが大切なのか」「むやみに働いて金持ちになる医者の本物ではない」「大切な一人をたくさん救い、患者から感謝を受けるのが医者だと思う」「祖父が病院のミスで死んだ」などがあつた。

(2) Death-Education 実施後の記述内容

講演終了後、中学生 112 名が「命や生きること」について、どのように感じたり考えたりしたのかに注目し、記述内容を分析した。その結果、9つのカテゴリーが抽出された。カテゴリー及びサブカテゴリーは以下に記述した。抽出過程は表9に示した。

第1カテゴリー：大切さを実感した命

- 1) 大切さを再確認した命
- 2) 尊い命

第2カテゴリー：認識した死の現実

- 1) 頑張っても逃れられない死の悲しさ
- 2) 良い子悪い子に関係なく訪れる死
- 3) 死にゆく人の存在
- 4) 限りある儚い命

第3カテゴリー：支えられ・つながりあう命

- 1) 支えられ生きている命
- 2) 自分だけのものではない生や死

第4カテゴリー：自分達と同じと認識した障害者観

- 1) 障害者への差別・特別視といった誤解
- 2) 自分達と変わらない障害者

第5カテゴリー：軽視される命への問題意識

- 1) 命を粗末にすることへの怒り・疑問

- 2) 軽視される命への反省
- 3) 大切にしなければならない命
- 4) 身近な日常から始める改善
- 5) 現代社会への提案

第6 カテゴリー：当事者でない自分の心情

- 1) 当事者でないものの限界
- 2) ゴミだと感じる命
- 3) わからない・変化のない自分
- 4) 何も感じない私

第7 カテゴリー：変化した自己の認識

- 1) 気づいた障害・病気・事件等への無関心さ
- 2) 変化した考え・自己の自覚
- 3) 命について考える機会への感謝
- 4) 発見・学びたい命

第8 カテゴリー：幸せな自己の発見と感謝

- 1) 健康であることの気づき
- 2) 健康であることの感謝・感動
- 3) 生きていることの価値と感謝・感動

第9 カテゴリー：生き方の模索

- 1) 障害や病気を抱えた人の理解
- 2) 困難に尻込みする自分への気づき
- 3) 精一杯生きることの価値
- 4) 生きることへの抱負

以下に各カテゴリーの特徴と具体的記述内容について述べる。

第1 カテゴリー：大切さを実感した命

このカテゴリーは、実施前にも増して、命の大切さを再確認した気持ちを記述したものである。サブカテゴリーとして、1) 大切さを再確認した命、2) 尊い命から構成されていた。

1) 大切さを再確認した命

これは、「命の大切さを改めて知った」という再発見の気持ち、「命はすごく（とても）大切」など、改めて実感した命の大切さについて記述していた。U君の講演および骨腫瘍で下肢を切断、その後退院の日を待ち望んで副作用と戦いながらの化学療法とリハビリに耐え頑張った同年代の少年の闘病生活を編集したビデオを通して、今までより更に、命の大切さを実感し再確認する機会

となっていた。

2) 尊い命

命の尊さを表現する言葉として、「命の重さを実感」「命はかけがえのない宝物」「何にも代えられない尊いもの」などのように表現されていた。

第2 カテゴリー：認識した死の現実

このカテゴリーにも、講演者U君が入院中体験した、病気と一生懸命に闘っても死んでいかざるをえなかった子どもの存在について、語った思い・気持ちが反映したと思われる内容が表現されていた。サブカテゴリーとして、1) 頑張っても逃れられない死の悲しさ、2) 良い子悪い子に関係なく訪れる死、3) 死にゆく人の存在、4) 限りある儚い命から構成されていた。

1) 頑張っても逃れられない死の悲しさ

「一生懸命病気と闘っても死ぬのは悲しい」という記述内容で、報われない悲しさを表現していた。

2) 良い子悪い子に関係なく訪れる死

「いい子どもも悪い子どもも病気で死ぬ」といった記述内容で、ここでも頑張ったり努力したり、良い子であっても逃れることのできない死の現実と、その現実を直視し不条理とさえ感じる気持ちが表現されていた。

3) 死にゆく人の存在

「今この時にも死んでいく人がいる」「世の中に死にゆく人がたくさんいる」と、死の現実を身近に引き寄せ表現していた。

4) 限りある儚い命

「生きたくても生きられない人がいる」や「幼い子が病気に負けて死ぬ事を聞くと、命は弱く儚いと考えさせられた」という記述内容で表現されていた。ビデオを通して生きたいと願い苦痛に耐えて頑張る姿や、もっと生きてほしいと願う家族や友人をおいて死んでいかなければならない現実を直視し、限りある命の儚さを感じていた。

第3 カテゴリー：支えられ・つながりあう命

このカテゴリーは、たくさんの人に支えられて生きている命、自分1人のものではない生と死、周囲の人に波及する生と死といった内容を表現していた。講演やビデオを通して同年代の少年の身に起きた病気、死への不安といった出来事を通して、少年の生と死はその少年一人に留まらず、周囲の人々に波及することを認識した気持ちを表現している。サブカテゴリーとして、1) 支え

られ生きている命、2) 自分だけのものでない生や死、つまり周囲に派生する生と死から構成されていた。

1) 支えられ生きている命

これは、「親やたくさんの人に支えられ生きている」「1人の命の周囲にはたくさんの暖かい思いがある」という記述内容で表現されていた。人間は1人で生きているのではないこと、多くの人に支えられて生きていることを実感した内容であった。

2) 自分だけのものでない生や死

「亡くなったら、嘆き悲しむ家族がいる」や「生きているというだけで親孝行」など、命は自分1人だけのものではないことを認識し、周りの人々との絆やつながりを感じとっていた。

第4 カテゴリー：自分達と同じと認識した障害者観

このカテゴリーは、障害や障害者に対する元来の思いや考えを、障害を有しながら健康な生徒と一緒に高校生活を送り、自転車通学やライブ活動をしているというU君自身、あるいはU君の講話を通してあらためて感じ確認した障害者に対する率直な気持ちや見方を表現したものであった。サブカテゴリーとして、1) 障害者への差別・特別視といった誤解、2) 自分達と変わらない障害者から構成されていた。

1) 障害者への差別・特別視といった誤解

ここでは「障害者をおかしいと思うことがおかしなこと」「障害を特別視してはダメだ」「同じ命を持つ人間だから、おかしな感じがするのは嫌だ」と、障害を有する人を「差別」や「同情」といった気持ちでは見たくない、見るべきではないという考えを表現していた。

2) 自分達と変わらない障害者

ここでは「障害があっても普通に楽しい生活ができる」「U君はかっこよく、普通と変わらない」「障害者は少しハンディがあるだけで、普通の人と変わらない」「皆、障害者を誤解している」という記述に代表されるように、U君の明るく前向きにいきている姿、あるいは癌で下肢を切断したビデオの中の主人公の闘病姿を通して、障害者に対する見方・感じ方を述べ、障害者に対する誤解を警告していた。

第5 カテゴリー：軽視される命への問題意識

このカテゴリーは、命や生きることを軽んじるということをキーワードとし、生徒達の様々な反応をサブカテゴリーによる段階で表現していた。生徒達の反

応には、命を軽視していたことに気づきそれを反省する表現があり、また命を無駄にしたり粗末にしたりすることへの怒りや疑問を訴えていた。反省や怒り・疑問を更に発展させ、自分自身の命を守ることを述べたり、社会へ向けて提案も含んでいた。具体的なサブカテゴリーとして、1) 命を粗末にすることへの怒り・疑問、2) 軽視される命への反省、3) 大切にしなければならない命、4) 身近な日常から始める改善、5) 現代社会への提案から構成されていた。

1) 命を粗末にすることへの怒り・疑問

ここには、メディアを通して見聞きする自殺行為や殺人事件への怒りや疑問と、U君の生き方や中学生の闘病生活を綴ったドキュメンタリービデオの映像を通して感じたことをもとに、一生懸命生きたり病気と闘ったりしている人がいるのに、なぜ命を大切にしないのかといった批判の気持ちが表現されていた。具体的には、「自殺や殺人など、人の命をおもちゃのように考えている人がいる」「なぜ、今の日本や世界で個人的感情で命を奪ったり、自ら命を絶つということが起こるのか」「生きてくても生きられない人がいるのだから、命を無駄にするのは申し訳ない」「不自由なく生活している人達が事件を起こしていることに疑問を持った」などであった。

2) 軽視される命への反省

これは、命の大切さを再確認した生徒達が、日常生活においてふざけて言ってしまう自分の言動を振り返り、反省した内容を表現したものであった。具体的には「今までふざけて[死ぬ]や[殺す]と言っていた言葉の数々は、ひどいことだ」「[命を大切にしていない]という(U君の)言葉が身にしみた」「人の命が消えていくのを他人事だからいいやと思っていたが、今回話を聞いて人の命が亡くなるのは悲しいと思った」などであった。

3) 大切にしなければならない命

これは「命は決して無駄にしてはいけないものだ」と、命を粗末にしたり無駄にしたりしてはいけないと感じたことをストレートに表現したものと、「生きてくても生きられない子がいるのに、自ら命を絶ってはいけないと思う」と、生きてくても生きられない人がいることや頑張っている人の存在を挙げ、命を大切にしないのはその人達に失礼であると、命を大切にしなければならない理由を挙げていた。

4) 身近な日常から始める改善

「他人を想う気持ち、小さい植物も大切にするなど、普段の生活から改善していくべき」「小さいことでも何か始めていく必要がある」という記述内容で、身近なことに目を向け改善させることが、ひいては命を大切にすることへと

つながっていくとう考えが表現されていた。

5) 現代社会への提案

「世界中の人が生きることについてよく考えてみるべきだ」「これからの社会は常に人の命を考えて生活するべき」「健康な自分達が、自殺・事故・殺人などで命がなくなっているこの時代を変えるべきだ」という記述内容であった。今回行なった Death-Education は、命や生きることについて深く考える機会となっている。さらに生徒達自らが命を軽んじる社会の風潮や行為を変えていく必要性に気づき、社会に発信していた。

第6 カテゴリー：当事者でない自分の心情

このカテゴリーは、講演やドキュメンタリーの映像を通して感じた記述内容の中で、「障害と自分達は無関係である」「わからない」「何も感じない」など、少数ではあるが心境をストレートに表現したものであった。サブカテゴリーとして、1) 当事者でない者の限界、2) ゴミだと感じる命、3) わからない・変化のない自分、4) 何も感じない私から構成されていた。

1) 当事者でない者の限界

これは「障害のない私達に障害は関係ない」「おそらく人間は当事者にならないと理解できない」「障害を持って生まれてきた人の気持ちや辛さはわからない」といった記述内容で、障害や病気のことを理解しようとしたが無理であるという気持ちが表現されていた。

2) ゴミだと感じる命

「心の中ではまだ少しだけ命はゴミだと思っている」という記述内容であるが、講演を通して「命をゴミだと思ふ気持ちは軽減したものの、まだそう感じている」と、気持ちを率直に表現していた。

3) わからない・変化のない自分

具体的な内容として「体に満足しているので、何もわからない」「命について考えてもやっぱりわからない」や「あまり前と気持ちは変わっていない」「今[お前がここにいる意味は?]"と聞かれてもどうしようもない」などであった。

4) 何も感じない私

「特に感じることはなかった」「何も感じない」といった心境をストレートに表現した記述内容であった。

第7 カテゴリー：変化した自己の認識

このカテゴリーは、今回の講演から気づいたことや学び得たことを表現した記述と、講演を評価する記述内容が含まれていた。サブカテゴリーとして、1)

気づいた障害・病気・事件等への無関心さ、2) 変化した考え・自己の自覚、3) 命について考える機会への感謝、4) 発見・学びたい命から構成されていた。

1) 気づいた障害・病気・事件等への無関心さ

ここでは「今まで障害者に無関心であった」「今までは事件や事故に遭遇した人に無関心であった」という自己を認識していた。

2) 変化した考え・自己の自覚

「今まではバスなどで体の不自由な人が乗ってたりしても特に何も感じなかった」「今までは事件や事故に巻き込まれた人のことは考えたことはなかった」という記述から、今回の講演を通して障害や病気について知ることにより、今まで関心を向けたことがなかった自分に気づいたことを表現していた。

3) 命について考える機会への感謝

これは、「忘れかけていた命について深く考え、見つけ出すことができた」「生きることの考えが深まった」という記述に代表されるように、命や生きることについて考える機会になったことを表現していた。「今日、命というもののあり方を改めて教えていただいた」「この講話がこれからの人生に役立っていく」「障害を持っている人の発言に心を動かされた」という記述に代表されるように、講演を通して命や生き方を学び、貴重な体験として受け止めたことを表現していた。

4) 発見・学びたい命

これは、「今日の話聞いて、命についての考えが変わった」「今回の話は自分を変えられた」「これからは命に関心を持ち、考えていくことが課題となり、心が成長する手掛かりとなるかもしれない」という記述に代表されるように、今回の講演が命や生きることについて変化を与えていた。

第8 カテゴリー：幸せな自己の発見と感謝

このカテゴリーは、U君の生き方や中学生の闘病生活を綴ったドキュメンタリービデオの映像を通して、自分達が健康に生活できることがどれほど幸せなことか、ただ生きているだけでどんなに価値があり、素晴らしいことなのかを実感したものであった。サブカテゴリーとして、1) 健康であることの気づき、2) 健康であることの感謝・感動、2) 生きていることの価値と感謝・感動から構成されていた。

1) 健康であることの気づき

「健康な体で生まれてきた僕達は当たり前になっている」「ただご飯を食べるだけで幸せだと思うのは僕らにとって当たり前で、いかに安全で何不自由なく生きているかがわかった」という記述に代表されるように、今まで健康であ

ることが当たり前になっていたことに気づいたものであった。

2) 健康であることの感謝・感動

「障害なく生まれてきたのは普通のことではなく幸せなことだと感じた」「何でも自由にできることは本当に幸せだ」「自分がどれだけ恵まれているのか、病気と闘い頑張っている人がいることを感じた」「今まで五体満足に生まれてきても毎日不満ばかりぶつけてきたのを、今ではそれを後悔している」という記述に代表されるように、健康であること、障害がないこと、自由であることの思いを、「本当に幸せ」や「すごく幸せ」と強調して表現しているものであった。

3) 生きていることの価値と感謝・感動

「今まで生きている意味や生まれた理由は全然わからないと思っていたが、今回[生きる]という感動を感じた」「話を聞いて生きる喜びがわかった」「生きているだけですごいことだ」「生きていることに感謝して日々を過ごそう」という記述に代表されるように、生きていることの素晴らしさやすごさを表現していた。また、生きたくても生きられない人がいることや、病気や事故で亡くなった人の気持ちを思い、より一層生きていることへの感謝の気持ちを深めている記述も多い。

第9 カテゴリー：生き方の模索

このカテゴリーでは、生徒達の記述を段階別にサブカテゴリーで表現している。講演を通して障害や病気を抱えた人の状況を知り、その状況を自分と重ね合わせた時、耐えられないと尻込みする自分に気づいたこと、またその一方で、精一杯生きることによって価値を感じて、自分の生き方に目標を見出したり、生きることの抱負へと発展させた記述も多く含んでいた。サブカテゴリーとして、1) 障害や病気を抱えた人の理解、2) 困難に尻込みする自分への気付き、3) 精一杯生きることの価値、4) 生きることへの抱負から構成されていた。

1) 障害や病気を抱えた人の理解

これは、「生まれつきの障害や病気を抱えた人達の現状を初めて知った」「同年齢で病に命を脅かされている人達が少なからずいる事を知った」「どんな障害があってもあきらめないで最後まで立ち向かうことを知った」という記述にあるように、普通に生活している中ではなかなか知り得る機会が少ない障害や病気を持っている人のことを表現していた。

2) 困難に尻込みする自分への気付き

「自分なら障害に対して現実ではないと自分自身の存在を否定するだろう」「もし、自分がこんな病気になったら耐えられないと思う」「病気と闘う男の

子は強い人。私なら死にたくなると思う」という記述にあるように、ドキュメンタリービデオの映像の中で抗癌剤を使った苦しい治療を目の当たりにして、辛さや怖さを感じ表現していた。

3) 精一杯生きることの価値

これは、講演を通して感じられたU君の明るさや前向きさ、ドキュメンタリービデオの映像の中での中学生が、どんなに苦しい治療であっても闘病意欲を持ち続ける姿から、生徒達が感銘を受けたことを表現していた。具体的な内容は、「どんな障害があってもあきらめないで最後まで立ち向かうことを知った」「どんな重い病気に罹っても、希望を捨てないでその病気と闘うことを知った」「体は病気でも、健康な僕より心はすごく健康だ」「辛いことが何度おきてもくじけずに立ち向かっていく姿に感動した」などであった。

4) 生きることへの抱負

これは、「障害者の人々に恥じぬような生き方をこれからしていきたい」「毎日を精一杯生きることのできる人間になりたい」「これからはより一層命を大切にしたい」「これからは教えられた命の大切さや病気に立ち向かっていく勇氣、努力を自分に活かしていき、他の人にも教えていきたい」などの記述に代表されるように、生き方に目標を見出し、生きる姿勢を表現していた。

3) 考察

(1) 中学生における実施前後の記述内容に見られる特徴

① 大切さの再発見と他者との関係性の理解へ

Death-Education の実施前のレポートから抽出されたカテゴリーのなかで、命に関するものは、「かけがえのない命」「限りあるはかない命」であった。命の大切さをお金では買えない、ひとつしかないなどと表現するとともに、命の神秘性、脆弱性、有限性などについて記述しており、実施前は漠然と観念的抽象的な表現が特徴と言える。実施後は、「大切さを実感した命」として、記述の中に「改めて」「本当に」「やっぱり」など、大切さの再発見の気持ちと、今までより更に命の存在そのものが大切であることを強調している。また、「認識した死の現実」「支えられ・つながりあう命」という新たなカテゴリーが抽出され、一生懸命がんばっても死ぬことがある不条理な側面と、ひとつの命は複数の支えがあって存在し、ひとつの命が失われることは他者への影響をもたらすことなど、他者との関係性についても記述している。これらのことから、命の大切さを再発見するとともに、個としての命の存在から、他者との関係性や命の複雑性へと広がりに変化したことが推測される。

② 批判から改善策の発信へ

命を軽視することに関するカテゴリーは、実施前は「命を軽んじることへの怒り・疑問・批判」、実施後は「軽視される命への問題意識」へと変化していた。実施後は、実施前の殺人や自殺への怒り・疑問・批判を発展させ、命を守ることの必要性を訴える記述が増加している。生徒たちは、実施前の命の軽視を他人の悪い行為と位置付けた批判中心の記述から、実施後は、自分の中にも命を軽視していた部分を発見し反省したうえで、自分自身の改善点だけでなく、社会に向けて改善を訴えている。このように、実施後は、発見（気づき）→反省→感謝→抱負（発信）のように、段階的・発展的な変化がみられている。以上の点から中学生は、機会を得ることができれば、命や死、生きることについて、自分の考えを段階的に発展させることができる能力を有することが推測される。したがって、中学生に対する Death-Education の機会は、重要であるといえる。

③ 自分中心から他者との関係重視へ

また、生きることに関する実施前のカテゴリー「自分の生き方」は、「楽しみたい」「好きなことをしたい」「後悔したくない」など、健康で何でも実現可能であるという、今現在の自分の状況からの率直な記述内容であった。実施後のカテゴリーは「生き方の模索」であった。障害や病気を抱えて生きている人の状況を知り、精一杯生きることには価値を見出す一方で、困難にしり込みする自分にも気付いている。さらに、これからの自分が、どのように生きていきたいのか抱負を記述し、そのために勇気や頑張り、他者と協力して生きていくことが必要であると表現していた。これらのことから、生徒が望む生き方の内容は、自分を中心にした生き方の視点から、自分だけでなく他者との関係性にも目を向けた広い視野からの理解に変化したことが考えられる。

④ 死から生への関心の転換

実施前は、死に関するカテゴリー「死について思うこと」が抽出され、死への関心・恐怖・嫌悪が記述されていた。「命とは何だ」「生きるって何だろう」「死ぬとは何？」という根源的な問いに自問自答している記述内容に思春期の特徴が伺えた。しかし、実施後は、これらの内容に類似した記述はなく、生きることに関する記述が非常に増加していた。このことは、U君の話やビデオを通して、生徒達が何らかの回答や意味を見出していることが推察され、生徒の関心が、死よりも生きること（生き方）を考えていくことに気持ちが変わったものと考えられる。進路の決定を控え、これから生きていく選択を目前にした中学2年生にとっては、自分自身の生き方や生、死に関心を持つことは自然な姿といえる。その一方、日本における自殺死亡率は、10代後半から急激に増加する

現状にある¹⁰⁾。日頃、生や死について向き合って考える機会が失われているという現代において、死や生きるということの意味を身近な問題から中学生たちが考えていくことは重要な意義があると考えられる。

さらに、実施前後ともに、「くだらない」「考えたこともない」「自分とは無関係だ」といった記述もみられた。このような内容の記述は、実施後に減少しているため、Death-Educationの効果は大きいと考える。しかし、今回の研究では一人一人の記述内容をDeath-Educationの前後で照合し、変化を分析することは行っていない。今後は、実施前の生徒の反応が実施後どのように変化しているのか否かを含め、経時的に検討していくことも課題としたい。

(2) 中学生におけるDeath-Educationの評価

記述内容を比較すると、実施後には、実施前になかった障害・闘病に関する記述が非常に多かった。中学生にとってU君は、年齢が近い高校生であったことから親近感を持つことができ、目の前に立って語ったことによって、現実性を感じることができたと考えられる。また、ドキュメンタリービデオの主人公も生徒達と同じ年齢であったことから、現在の自分に引き寄せて考えやすかったと考える。このように身近に感じられた人物が、障害や病いを抱えて懸命に生きている姿は、生徒達の胸に迫り、障害や病気に対する理解が深まったと考えられる。また、実施前に記述されていたテレビなどを通して得られた殺人事件・医療事故への批判は、現代社会の問題をストレートに反映していた。中学生にとって、メディアによる影響が強いこと、さらに本研究における教材の影響の大きさから、Death-Educationには慎重に教材を選択する必要性も再確認できた。一方、生徒達が、地球環境や自然の中の生命体など幅広い視点で命、生、死について興味・関心を抱いていることも推察された。今回は、U君の講演、ビデオという具体的な出会いを通じたDeath-Educationであったが、前述したような生徒達の興味・関心から、教材を考えていくことも重要であると考えられる。今回のような機会の提供は、実施前後の全体的な記述内容・量の変化から、子ども達の関心を育てるとともに、子ども達の中に具体的な思考へと発展させる力があることが確認できた。大人社会が、子ども達の無関心さや行動を嘆き、批判するのではなく、子ども達の力を信じて、学ぶ教材や機会を提供していくことが必要である。

表8. 中学生：Death-Education 実施前

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
1. かけがえのない命	1) 大切な命	<ul style="list-style-type: none"> ・命は大切なもの ・命は大事です ・命は世の中で一番大切なもの ・命は宝 ・尊いお金に代えられないもの ・生命はかけがえのないもの
	2) ひとつの命	<ul style="list-style-type: none"> ・命は一人に一つしかないから大切なもの ・命はたった一つの決してお金では買えないもの ・物は豊かな時代でも命は買えない
2. 限りあるはかない命	1) はかない命	<ul style="list-style-type: none"> ・命はただもろくはかない ・階段や転んだだけで命はくずれる ・命はとてももろく病気に弱く一部を壊すと命のすべてが壊れる ・命はこわれやすいもの ・命は容易に尽きるもの
	2) 限りある命	<ul style="list-style-type: none"> ・命は限りあるもの ・命は永遠ではない ・人には寿命がある ・人はいつか死んでしまう ・命を失ったら二度と生きかえることはできない ・科学が発達しても死んだ人を蘇らす事はできない ・命はなくしてしまうと一生戻らないもの
3. 命・生への意味づけ	1) 生物学的な命の意味	<ul style="list-style-type: none"> ・命とは心臓が動くこと ・命には脳が必要です ・命がないと人はただの肉の塊になってしまう ・生命とは自分を動かしているもの ・命・生きると聞いて思うのは生態系
	2) あらゆる生命の存在と価値	<ul style="list-style-type: none"> ・この地球にはたくさんの命がある ・花も人と同じ命を持っている ・命は生きているものが必ずもっているもの

		<ul style="list-style-type: none"> ・人間だけでなく他の生物も生命をもっている ・命は生きるための道具 ・命は生きるための動力源 ・命があるから人・動物・植物は生きている
	3) 与えられた存在としての命	<ul style="list-style-type: none"> ・命とは生かされているもののこと ・命はその現世に与えられた世界の存在 ・命は生きている時に親から与えられたもの ・命とは両親の愛の結晶 ・皆、平等に与えられたものそれが命 ・命は生きるものに与えられたもので上も下もない
	4) 命の不思議さ	<ul style="list-style-type: none"> ・命とは、答えのない謎のもの ・生命は奇跡や理論とかではない不思議なことがある ・命・生きることは神秘的 ・生きるということは、簡単にみえて一生わからないもの
	5) 命のあり方や生きることの意味	<ul style="list-style-type: none"> ・感情も命がなければ感じられない ・命があるから夢を実現できたり、自分の道に進んでいける ・生きることは最低限やり遂げること ・命は人間の心だ ・命は生きるという強い心がある ・生きることは素晴らしい ・生きることは今を生きること ・色々なことを感じることで生きること
	6) ひとつの流れとしての生と死	<ul style="list-style-type: none"> ・生物には生まれるということと死ぬということがある ・生と死は1セットである ・人が生きるのも死ぬのも流れのうちだ ・この世に生を受け、たくさんのことをし、この世を去っていくただそれだけ ・目に見えない命は終わりが無い ・命は消えるといっても心の中に永遠に生き続ける

	7) 命・生への問い	<p>ので本当に消えるわけではない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 命とは何だ ・ なぜ命があるのか誰が知っているのか ・ 自分は何のために生きているのか ・ 命とか生きることを言葉で表現するのは難しい ・ 生きるって何だろう ・ 考えても答えが出ない命は言葉で言うのは簡単だが実際よくわからない
4. 死について	<p>1) 死への恐れ</p> <p>2) 死や死後への問い</p> <p>3) 死への意味づけ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 死ぬのは怖い ・ 死にたくないというのはきっと変わらない ・ 死なないで済むのなら死にたくない ・ 死ぬというのは自分がいなくなるので恐ろしい ・ 人が死んだという出来事は怖く感じる ・ 周りの人が死ぬのも嫌だし、自分が死ぬのも嫌 ・ 人はなぜ死ぬのかということをよく考える ・ 死ぬとは何だ ・ 死ぬのならばなぜ生まれてくるのか ・ 命について考えるとき、死んだらどうなるのか ・ 死んだ後の自分の意識（命）はどうなるのか ・ 死んだら自分は何処へ行くのか ・ マンガでは天国があり意思が存在するがそれがなくなったらどうなるのか ・ 死は無だ ・ 死んだら嫌なこともないが楽しいこともない ・ 死は逃げ道でしかない ・ 死んだら充実した人生も消える ・ 死ぬために生きるから死ぬ
5. 命を軽んじることへの怒り・疑問・批判	1) 自殺する人への怒り・疑問・批判	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自殺する人は間違っている ・ もらった命を一人で抱え込んで命を絶つのは大馬鹿者だ ・ 自殺は生きてくて死んでいく人に申し訳ない ・ なぜ自殺するのかよくわからない

	<p>2) 他者の命を奪う言動への批判・疑問</p> <p>3) 地球・自然の命を汚す行為への批判・意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの命を絶つことはもったいないこと ・せっかく生まれてきたのに自ら命を絶つなんて絶対にいけない ・少年犯罪を見て動機があっても殺人は絶対ダメなのに理由もなく殺すのは一番よくない ・どんな理由があっても人の命を奪うのは最低だ ・殺人をする人は命の重みがわかっていない人 ・人を殺すことは反対で、死刑にも反対 ・冗談でも「死ね」などと言ってはいけない ・学校で適当に「死ね」と言う人がいるが言われた人はショックだと思う ・虫や動物の命を簡単に奪う地球には絶滅寸前の動物もいる ・自分達の生命の源の地球を自分達で汚している ・人間は自分の命を守る自然の命を自ら失っている ・人は自分達のことを他より優れていると思いきすぎだ ・私達は地球を守っていかなくてははいけない ・人間は他の生物と何も変わらず平等の命をもらったことを自覚しなければならない
<p>6. 自分の生き方</p>	<p>1) 好きなことを楽しむ生き方</p> <p>2) 後悔せず充実した生き方</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今を楽しく生きたい ・せっかく与えられた機会だから楽しんで生きたい ・自分のしたいことをしながら生きたい ・生きている間には悲しさや楽しさがあるが、自分のやりたいことを追いつけるのが生きること ・自分の求める生き様は、太く長く自分の好きなように生きるということ ・その時その時を楽しく過ごせばいい ・たった一度しかない人生だから大切に、充実させ一分一秒を貴重に過ごしたい ・今できることをして後悔しないように努力して生きたい ・この世に生まれたことを後悔したくない

表9. 中学生：Death-Education 実施後

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
1. 大切さを実感した命	1) 大切さを再確認した命 2) 尊い命	<ul style="list-style-type: none"> ・ 命の大切さを改めて実感 ・ 命はすごく（とても）大切 ・ 命は大切 ・ 命の重さを実感 ・ 命はかけがえのない宝物 ・ 命は何にも代えられない尊いもの
2. 認識した死の現実	1) 頑張っても逃れられない死の悲しさ 2) 良い子悪い子に関係なく訪れる死 3) 死にゆく人の存在 4) 限りある儂い命	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一生懸命病気と闘っても死ぬのは悲しい ・ 幼くして亡くなるのは悲しい ・ いい子供も悪い子供も病気で死ぬ ・ 今この時にも死ぬ人がいる ・ 世の中に死にゆく人がたくさんいる ・ 生きたくても生きられない人がいる ・ 命は弱く、儂い
3. 支えられ・つながりあう命	1) 支えられ生きている命 2) 自分だけのものでない生や死	<ul style="list-style-type: none"> ・ 親やたくさんの人に支えられて生きている ・ 支え合い、共に生きていくことが大切 ・ 1人の命を大切に思う人がいる ・ 1人の命の周囲にはたくさんの暖かい思いがある ・ 死ぬと周囲の人が悲しむ ・ 生きるというだけで親孝行
4. 自分達と同じと認識した障害者観	1) 障害者への差別や特別視といった誤解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 障害者をかawaiiそうと思うことがかawaiiそうなこと ・ 同情の気持ちは持ちたくない ・ 同じ命を持つ人間だから、かawaiiそうと感じる

	<p>2) 自分達と変わらない障害者</p>	<p>のは嫌だ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別な差別が嫌い ・障害を特別視してはダメだ ・差別せず、同じように生きるのが普通である ・障害があっても普通に楽しい生き方ができる ・障害があっても生きたいということは皆と同じ ・U君は普通と変わらない ・障害者は少しハンディがあるだけで、普通の人と変わらない ・皆は障害者を誤解している ・障害も様々だが、皆楽しく普通に暮らそうとしている
<p>5. 軽視される命への問題意識</p>	<p>1) 命を粗末にすることへの怒り・疑問</p> <p>2) 軽視される命への反省</p> <p>3) 大切にしなければならぬ命</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・頑張っている人がいるのに、命を無駄にしている人がいる ・五体満足でも自殺・心中する人がいる ・自殺や殺人など命をおもちゃのように考えている人がいる ・不自由のない生活をしているのに、事件・殺人があることに疑問 ・殺人や自殺する人達の考えがわからない ・障害がないのに自殺するのは甘えている ・命を捨ててしまうのはおかしいこと ・自殺や殺人は愚かで悲しい ・自殺や殺人は誰にも幸せや喜びを与えない ・病気などで生きたくても生きられない人に対して、命を大切にしないのは失礼 ・命の大切さがわかれば、無意味な殺人や自殺はしない ・「死ね」という言葉を使っていた事を反省 ・命を軽く見ていた事を知る ・命は無駄にしてはいけない ・命は粗末にしてはいけない ・自殺してはいけない

	<p>4) 身近な日常から始める改善</p> <p>5) 現代社会への提案</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 普段の生活や小さいことから改善する必要性 ・ 皆命を大切にすべきである ・ 命や生きる事を考えるべきである ・ 時代を変えるべきである ・ 助け合う世の中にすべきである ・ 物事を冷静に見て、将来を考えるべきである
<p>6. 当事者でない自分の心情</p>	<p>1) 当事者でないものの限界</p> <p>2) ゴミだと感じる命</p> <p>3) わからない・変化のない自分</p> <p>4) 何も感じない私</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 障害者や病気を持つ人達の気持ちや辛さはわからない ・ 障害は自分達と無関係 ・ 当事者でなければ理解不能 ・ ドキュメンタリーの大変さが伝わらず ・ 少しだけ命はゴミだと思ふ ・ 体に満足しているので、何もわからない ・ 命について考えてもやっぱり答えはわからない ・ ここにいる意味を問われてもどうしようもない ・ 前と気持ちや考えは変わっていない ・ 考えたままに考えたので、どう捉えられてもいい ・ 特に感じることはない ・ 何も感じない
<p>7. 変化した自己の認識</p>	<p>1) 気づいた障害・病気・事件への無関心</p> <p>2) 変化した考え・自己の自覚</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今までは障害者に対して無関心 ・ 今までは障害や病気に対してかわいそうという考えだった ・ 今までは事件や事故にあった人に対し無関心だった ・ 命に対する考えが変わった ・ 考えが変わった

	<p>3) 命について考える機会への感謝</p> <p>4) 発見・学びたい命</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分を変えることができた ・ 命のあり方を教えられた ・ 講演を聞いてよかった、感動した ・ 講演が今後の人生に役立っていく ・ 命について考えることができてよかった ・ 命について、命とは何かを発見 ・ 命・生きることについてゆっくり、色々考えた ・ 命について学びたい ・ 生きることの考えが深まった ・ 今回の時間は重い時 ・ できることを全てやることを教えられた
<p>8. 幸せな自己の発見と感謝</p>	<p>1) 健康であることの気づき</p> <p>2) 健康であることの感謝・感動</p> <p>3) 生きていることの価値と感謝・感動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 健康であることが当たり前になっていた ・ 健康を当たり前と思うことは失礼 ・ 障害がない・不自由がないことを当たり前にしてはいけない ・ 障害がないことは普通のことではなく幸せなこと ・ 健康なことはすごく幸せなこと ・ 自由なことは幸せ ・ 食べられることは素晴らしい ・ 五体満足でも不満ばかりぶつけていたことを後悔している ・ 生きるという感動を感じた ・ 命あること、動く手足があることに感謝 ・ 生きたくても死んでしまう人がいるので自分は幸せ ・ 講演を聞いて幸せを実感 ・ 普通に暮らせることがどれくらい幸せかわかった ・ 生きる喜びがわかった

		<ul style="list-style-type: none"> ・自分がどれくらい恵まれているかわかった ・生きているだけで幸せ ・生きていることはすごいこと ・生きることは素敵で素晴らしいこと ・生きていることに感謝 ・生きているだけで価値がある <p>生きているのが当たり前と思っ込んでではダメだ</p>
<p>9. 生き方の模索</p>	<p>1) 障害や病気を抱えた人の理解</p> <p>2) 困難に尻込みする自分への気づき</p> <p>3) 精一杯生きることの価値</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・障害や病気を抱えた人の現状を初めて知る ・同年齢で命を脅かされている人がいることを知る ・障害や病気があってもあきらめずに闘うことを知る ・障害を持つ人やそれを支える周囲の人々の頑張りや苦しみをを知る <ul style="list-style-type: none"> ・障害や病気は、自分なら耐えられない ・怠ける自分を惨めに思う ・採血で弱音を吐く自分がだらしがない ・生きることは大変 <ul style="list-style-type: none"> ・障害があっても明るくプラス思考である ・障害を持っていても生まれてきてよかったと思っていると感じた ・病気や障害を持っていても一生懸命生きている ・限りある命だと知っているから、家族との時間や学校生活を楽しんでいる ・病気や障害を持つ人の方が、強さと優しさを持っている ・自分の命に誇りを持ち、大切に生きていた子供達は明るい ・体は病気でも心は健康だ ・辛い事を乗り越えると退院できる ・病気を背負っていても命の大切さを知っていれば頑張れる ・病気に立ち向かう姿に感動

	<p>4) 生きることへの抱負</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 毎日を精一杯生きることのできる人間になりたい ・ 他人と比べず、自分に甘えず、強い人間になりたい ・ これからはより一層命を大切にしていきたい ・ 何よりも命を大切にしたい 人生を充実させたい ・ 辛いことがあっても頑張って生きたい ・ 助け合って生きていきたい ・ 命や生きていくことについて意識して考えていきたい ・ 1日を大切に過ごしたい ・ 限りある命を一生懸命生きることが大切 ・ 自分の命は最後まで活用する ・ 生きられるところまで生きる ・ 健康な分、頑張る必要がある ・ 教えられた命の大切さを他の人にも教えたい ・ 目的を持ち、目標達成の努力をしたい ・ 責任を持って人生を歩みたい ・ プラス思考でいきたい ・ 自分を大事にしたい ・ 皆で分け合って幸せにしたい ・ 自分のために生きたい ・ 自分を信じて生きていく ・ 自分の生き方を考えていきたい ・ 障害者に恥じぬような生き方をしたい ・ 病気や餓死した人の分まで生きる
--	---------------------	--

V. 全体考察

以上、小学校低学年・高学年、中学生に実施した Death-Education の実際と、実施前後に提出したレポートから生徒の反応について分析を行なってきた。考察では第一に各年代による反応の特徴を明らかにする。第二にさらなる Death-Education の充実にむけ、子どもを取り巻く社会環境に目を向け、課題を明らかにする。第三に家庭・学校における Death-Education のシステム化について、最後に Death-Education の臨床的意義について触れたい。

1. 死と対峙する仲間からの学び

1) 各学年による反応の特徴

低学年の特徴として、教材「ポチとルナはいつも一緒」を見る前は、死について漠然とした表現であったが、実施後は命が大切である理由や感情移入を感じさせる表現へと変化が見られた。つまり、死や命を守ることの一般的知識から感情表現へと変化がみられた。さらに実施後には命のはかなさや死の普遍性、人間の霊的側面でもある死の永遠性についての記述が多く見られた。

低学年は、このような教材をストレートに受け止め、共感できる心と能力を持っていることが確認できた。

高学年の特徴として、ドキュメンタリー番組の教材「天国のたかし君、奇跡をありがとう」を見る前は、死について観念的・感覚的表現が多く、死を身近なものというより遠い出来事としてとらえる傾向がみられた。つまり死を実感できない低学年の姿が伺えた。実施後は命の大切さについて「あらためて」「本当に」「すごく」といった感嘆的な修飾語を付加した記述、また避けられない死への恐れや哀しさといった、自分自身に引き寄せたと思われる記述内容の増加がみられた。この年代の特徴として、死を懲罰的なものととらえる傾向が指摘されているが、「良いことをしたのに・・・」、「病気なのに頑張ったのに・・・」など、死を不当なものとしてとらえる記述も見られた。さらに実施前は、命や生きることを世界の貧困や飢餓といった一般的テーマの記述であったが、実施後は、映像の中のたかしくんが身をもって示していた、生きることのすごさに対する感動・発見、生への希望や価値、どのように生きるべきかといった内容の記述が多く見られた。

高学年の生徒は、死の否定的イメージより生き方や亡くなるまで頑張ったその姿に注目していることが確認できた。さらに、生きる意味や人間の強さ・可能性にまで言及している点が印象的である。高学年は、ピアジェの認知的発達では具体的操作段階から形式操作段階にある。他者の体験から自分だったらと

立場を転換して考え感じるができる心と能力を有していることが確認できた。

中学生は、先天的疾患により生まれた時から障害を有し、入退院を経験した高校1年のU君の講演と、癌により下肢を切断、さらに転移のため強い副作用に耐え闘病生活を送る中学生をとり上げたドキュメンタリービデオを教材に用いた。実施前後の変化として、一般的な死の理解からいくら頑張っても逃れられない現実の死の理解へ、当たり前と思っていた「支えられて生きていること・健康であること」がいかに幸せなことであるか、気づいていなかった自分を発見する機会となり、家族への感謝の気持ちを強くしている。さらに死と対峙しながら生きる姿、生きるために苦痛に耐え一生懸命頑張る姿、しかし病気に勝てず亡くなっていく姿を通して生命の大切さを実感、生きることの大切さと意味を考える機会となっている。さらに障害者に対する偏見から理解へ、命を軽視される社会への問題意識、そしてどう生きるべきかといった生き方の模索が表現されている。

ここでも死の否定的イメージより、障害を有しつつ明るく生きる障害者の姿から自分達の中にあつた偏見や誤解に気づいたり、亡くなるまで頑張った姿から生きる意味や自分の生き方を模索するといった変化が確認できた。

2) 各学年に共通する反応の特徴

各学年とも提示された教材から私達の予想を越えた、共感できる心・能力を有していること、生徒は、死と対峙する仲間の姿から生命の大切さ・生きることの意味、さらに障害者への偏見や命を軽視される社会への問題提起、どう生きるべきかといった生き方の模索へと発展させることができることを確認できた。

生き物や人間（自分の命・他者の命）に対する残虐な事件が後を絶たず、その低年齢化も問題となっている。今回の Death-Education の結果は、これらの問題の原因も解決の糸口も、死をタブー視し子どもとの会話を避ける傾向が強い大人そして日本社会にあることを示唆している。

2. Death-Education の欠如を超えて

1960年代のアメリカでは、医師からの癌の告知は全く行なわれていなかった。その後小・中学校の主に宗教の時間に、死について教える機会がもたれるようになり、Death-Education が哲学・心理学・文学の観点から本格的に行なわれるようになった。さらに法的な医療訴訟の増加もあって、1970年代の後半には病名の90%以上が医師から告知されるようになり、前後して市民のターミナルケアやホスピスに対する関心が高まった。

Earl・A・Grollman¹¹⁾ は身近な人との死を体験した子どもと接するときの親（大人）の心構えを、次のように述べている。

- 1) 「死」をタブー視しない。
- 2) 悲しいという気持ち、人を悼む気持ちはすべての人に共通しているという認識を持つ
- 3) 子どもの気持ちを素直に表現させ開放させる
- 4) 家族の一人が亡くなったことを学校の先生に知らせる
- 5) 子どもへの対応に自信がない時は、他の人に相談してみる
- 6) 目先をごまかすような架空のつくり（例えば：死んだ人の生まれ変わり）話をしない
- 7) 親の説明が絶対に正しいと思込ませない
- 8) 親（大人）も悲しい気持ちを素直に表現する
- 9) あふれる愛情で子どもを支えつづける

上述したように、死をタブー視し子どもとの会話を避ける傾向が強い日本社会において、今回の Death-Education の結果は多くの問題と課題を示唆している。各学年とも予想を越えて共感能力、死と対峙する仲間から否定的側面ではなく「生命の大切さ・生きることの意味、さらに障害者への偏見や命を軽視される社会への問題提起」、さらにどう生きるべきかといった生き方を模索できる生徒が多いことを確認した。大人は、子どもが大切な人の死といった悲しみからも否定的側面のみでなく、それ以上に人間として大切な「命や生きること」、「思いやりや感謝の心」を自ら培うことができる存在であることを信じているところから出発することが求められている。Earl・A・Grollman の心構えは、子どもと死というテーマを介して接するとき、親（大人）に多くの示唆と糸口を提供している。

3. 学校教育における Death-Education のすすめ

アメリカではすでに死への準備教育が幼児・小学校教育で実施されている日本においても、生き物や人間（自分の命・他者の命）に対する残虐な事件の低年齢化が社会問題となっている今日、家庭においても学校教育においても Death-Education の必要性は広く認識されつつある。個々人あるいは個々の学校の努力によって試みられ始めている。しかし、死をタブー視し大人が子どもとの会話を避ける傾向が強い社会において、カリキュラムに必ず組み入れるといったシステムとして導入が図られる段階には至っていない。

今回実施した Death-Education に対する生徒の反響は、私達の予想を越えるものであった。子どもの認知的発達や身近な日常生活・日本文化に根ざした

Death-Education は、「限りある命の大切さ・愛おしさ」といった心を育むうえで、有用であることを示唆している。

乳児期を過ぎ幼児期になると、現代社会における死亡原因の第一位は悪性新生物といった病気ではなく不慮の事故である。10歳-14歳では自殺が死亡原因の第3位に、15歳以降では第2位を占めている。このような現代社会におけるDeath-Educationの取り組みは、医療との関連においてのみでなく、広く学校教育や家庭・社会教育の場で、システムとして定着し発展させていくことが求められる。その具体的方略および内容については、今後の私達の課題である。

4. Death-Education の臨床的意義

小児看護の立場から行なうDeath-Educationの意義について、メンバーで話し合い共通理解を図った。その結果、方向性として健康や病気・入院体験（児・者）を通して、「命」・「生きること」について考える出発点（From Death to life）としていくことを確認した。教材は①同年代の病気・入院体験者自身、あるいは②その家族・兄弟姉妹を講師として依頼し、体験者の体験談を積極的に導入した内容とすることとした。

高学年で用いたドキュメンタリービデオの主人公は、不治の心臓病を抱えながら亡くなる直前まで大好きな友達と一緒に学校生活を送り続けた少年とその家族である。中学生で用いたドキュメンタリービデオの主人公は、癌による下肢切断と転移に対する化学療法に耐え、待ちに待った退院の日を迎えた少年とその家族である。

実施後の高学年・中学生の反応は、私達の予想を越えて死の否定的側面ではなく、死と対峙する仲間の姿から生命の大切さ・生きることの意味、さらにはどう生きるべきかといった生き方の模索へと思考を発展させている。

さらにたかし君を通して自分が病気になった時のことを思い、予期的学習の機会ともなっていた。具体的には、「病気になっても一生懸命やれば、何でもできるんだと思った」「どんなに重い病気でも、励ましあいながら生きていく」「自分が病気になってもたかし君みたいになれるんだと思った」「たかし君の、命がつきるまで生きると言い聞かせて命を大切にしていたことが、とても心に残った」などである。

このようにDeath-Educationは、①死から生（From Death to life）を考える機会となっている、②生徒は死から生（From Death to life）を考える能力を有している、③他児の体験を通して、自分が病気になった時のことを予期的に学習する機会となっており、臨床的意義といった点からも意義があることを確認できた。

VI. Death-Education の評価と課題

1. 子どもの持っている力（認知的発達段階）を信じること

低学年は、絵本鑑賞への集中さは、最後まで持続していた。これは発達段階を考慮し鑑賞時間を10分程度の時間内とし、視覚とともにナレーションによる聴覚からの効果も図った結果と考える。レポートの記述内容は、実施前より実施後の方が増加していた。今回は初めての試みでもあり、生徒の受けとめ・衝撃を考慮し、人間ではなくペットとの死別をとり上げた。しかし低学年なりに人の死を見つめる力を有していることが、確認できた。今後は、病気や人の死をも教材として視野に入れて検討していきたい。

高学年は、経験の有無により個人差はあるが、死の概念（不可逆性・不可避性・普遍性）を理解する年代である。高学年で用いたドキュメンタリービデオの主人公は、不治の心臓病を抱えながら、亡くなる直前まで大好きな友達と一緒に学校生活を送り続けた少年とその家族である。実施後の記述内容から、年齢的にも学校生活中心の展開という点からも、生徒の中に身近なこととしてとり込まれたと思われる内容・実感が増加していた。所要時間・内容は妥当と考える。今後は子ども同士が感じたことをお互いに語り合い、気持ちを共有し合うことができる方法を検討していきたい。

中学生で用いたドキュメンタリービデオの主人公は、癌による下肢切断と転移に対する化学療法に耐え、待ちに待った退院の日を迎えた少年とその家族と、先天性疾患による障害を有するU君自身が体験したこと・考えについての講演である。実施後の記述内容から、ビデオ・講演内容は日頃気づかないで生活していた障害者や病者の存在とその生きる姿を直視する機会となり、生徒達の胸に迫りくるものが多々あったことが読みとれた。所要時間・内容は妥当と考える。今後は生徒同士が感じたことをお互いに語り合い、気持ちを共有し合うことができる方法を検討していきたい。

2. 死をもタブー視せず、身の回りの出来事を子どもと語り合うこと

高学年では、病気と闘いながら、お世話になるだけでなく人に喜んでもらえることをしたいと、一生懸命生きてにも関わらず亡くなったたかし君を思い、「死の不公平さと死への恐れ」を記述した生徒がいた。Earl・A・Grollman が述べていたように、このような生徒には気持ちを素直に表現させ開放させるとともに、あふれる愛情で支えつづけることが必要である。今後子どもとの語り合いを介した Death-Education についても検討していきたい。

中学生は、発達段階からみると個人的な体験・世界から自分を取り巻く社会・

世界へと関心・問題意識は広がる時期である。中学生の実施前の記述内容には、自然・生命体から医療・社会問題まで、幅広い視点から生・命・死に関する関心・興味が述べられていた。同時に疑問や意見も述べられていた。しかし実施後の記述内容のような、自分の中に深くとり込まれた体験と思われる内容・実感といった記述内容ではなかった。多くの中学生は講演とビデオを通して、「生まれた時からからだの不自由な人」「病気で苦しんでいる人」「生きてくても生きられないで死んでいく人」の存在を**知らなかった自分**に気づいたと述べている。

前述したがピアジェは、イメージ・概念を外界から取り入れ形成していく段階（同化）と外界に応じて自己の行動シエマやイメージ・概念を変えていく段階（調節）の均衡のとれた状態、バランスのとれた状態を適応状態と述べている。情報化社会は、子ども達が周りで起きている出来事を自己の中にとり込む前に、その量と速さのために、不消化のまま通り過ぎていっていることが推測される。つまり同化と調節のバランスがとれていないと考えられる。

自分と異なる健康状態や、入院生活を送る同年代の存在を知らないで暮らしていた自分に気がつくことができ初めて、障害や病気と闘う人の**生きる姿**に気づき、そしてその姿を通して何かを感じ・思うことが出来て初めて、それが**自己の体験**として取り込まれることが示唆される。ピアジェは、発達の順次性を強調するとともに経験の果す役割を重視している。経験はただ環境と接していれば良いというものではなく、環境との相互作用を通して遂げられるものである。

そのためには、死をも含めて身の周りや世界で起きている出来事について、直接話し合う機会を、家庭で、そして学校教育で計画・実施していくことが今後さらに重要となると考える。

VII. おわりに

子どもを取り巻く社会は、バーチャルな死の体験が死の実体験より先行して子どもの生活に入り込んでいる。さらに近年、青少年の生き物や人間（自分の命・他者の命）に対する残虐な事件報道があとをたたない。生きたくても生きられず亡くなった多くの子ども達を見送ってきた私達は、Death-Educationの必要性を痛感、そのための具体的方略の開発をすすめ、今回実施することができた。

その結果、各学年とも私達の予想を越えて、共感できる心・能力を有していること、死と対峙する仲間の姿から生命の大切さ・生きることの意味、さらにどう生きるべきかといった生き方の模索へと発展させることができることを確認できた。また Death-Education は、死と対峙する仲間を通して自分が病気になった時のことを予期的に学習する機会となっており、臨床的意義も確認できた。

今後さらに、直接話し合う方法を含め Death-Education の実施・充実を図るとともに、学校教育におけるシステム化の方略を検討していきたい。

謝辞：私達の長年の課題であった Death-Education の実施にあたり、快く場を提供下さいました A 小・中学校の校長先生・副校長はじめ学年主任・担任の先生に、そして一緒に真剣に学んで下さった生徒の皆さんに、心から御礼申し上げます。

また、中学生に貴重な体験を語って下さり、多くの感動と生きている世界への視野を広げるきっかけを提供して下さいました U 君に感謝申し上げます。

Ⅷ. 引用文献

- 1) 岡田洋子他：子どもの「アニミズム・死の概念発達」と生活体験～Death-Education の方略を求めて～、科学研究費補助 [基盤(C)(2)] 研究成果報告書、2001年3月
- 2) 岡田洋子：学童期にある小児の死の概念発達に関わる要因の検討、天使女子短期大学紀要、No11、21-35、1990
- 3) 波多野完治他：子どものものの考え方、岩波新書、1976
- 4) 常葉恵子・岡田洋子・岡堂哲雄他：児童期における死の概念発達、聖路加看護大学紀要、第6号、31-41、1979
- 5) 前掲載3)
- 6) 前掲載1)
- 7) 菊田まりこ：いつでも会える、学研、1998
- 8) 富田和己：社会面からみた子どもの死の現状、小児看護、21(11)、1479-1500、1998
- 9) 北山秋雄：地域づくり (Community development) の視点から、特集Ⅱ生を豊かにする死の教育、思春期学 21(1)、70-74、2003
- 10) 長谷川慧重他、国民衛生の動向・厚生指標、49(9)、406-407、2002
- 11) Earl・A・Grollman、重兼裕子訳：死ぬってどういうこと？、春秋社、12-18、1995

参考文献

- ・ E・Kubler - Ross : A Letter to a Child with Cancer, Arrangement, 1979
- ・ Laurie Krasny Brown etc : When Dinosaurs Die, Arrangement, 1999
- ・ Earl・A・Grollman : Talking About Death, UNI, 1978
- ・ Sagara Rosemeyer Miharu : Meaning of Life and Death for Children
In Japan -An Interpretive Study-
Doctor of Philosophy in Nursing in The Graduate Division
Of The University of California Sanfrancisco, 2003
(未発表)
- ・ アルフォンス・デーケン他：死への準備教育のための120冊、AZUMA SHOBO、1993
- ・ 芹沢俊介：生と死、筑摩書房、1998
- ・ 生命尊重センター編：生命尊重教育のすすめ、東信堂、1993

- ・生と死を考える会編：「生と死」を学ぶ、春秋社、1997
- ・種村エイ子：「死」を学ぶ子どもたち、教育史料出版会、2000
- ・細井八重子：子どもに「死」をどう教えるか、東洋館出版社、1993
- ・R・C・ミラー、死の教育、ヨルダン社、東洋館出版社、1993
- ・葉祥明：もう一度会える、大和書房、2001
- ・佐藤律子編：種をまく子供たち 小児ガンを体験した七人の物語、POPLAR、
2001
- ・鈴木康明編：現代のエスプリー 生と死から学ぶいのちの教育、至文堂、2000
- ・エリック・ローフス：子供たちにとって死とは？、晶文社、1993
- ・すずらんの会編：電池が切れるまで 子ども病院からのメッセージ、角川書
店、2003
- ・エリザベス・テール、きみにあえてよかった、評論社、評論社、1997
- ・きたやまおさむ：「さようなら」って言わせて、大修館書店、1997
- ・甲斐裕：ロン、新風舎、1997
- ・みらいなな訳：葉っぱのフレディ、童話屋、1999
- ・大塚敦子：さよならエルマおばあさん、小学館、2000
- ・平野卿子訳：どこにいるの、おじいちゃん？、偕成社、1999
- ・小川仁央訳：わすれられないおくりもの、評論社、1984
- ・及川和男：いのちは見えるよ、岩崎書店、2002
- ・河原まり子他：さようなら、ありがとう、僕の友だち、岩崎書店、2001
- ・石黒美佐子：麻意ね、死ぬのがこわいの、立風書房、2000
- ・石黒美佐子：麻意ちゃん、やさしさをありがとう、立風書房、1993

【視聴覚教材】

- ・フジテレビ：「天国のたかし君 奇跡をありがとう」、アンビリーバボー
- ・「絶対あきらめない！小児ガン・母と子の約束」、巨大病院救命最前線

資料

資料 1 : 生徒への承諾書	1
資料 2 : 保護者への承諾書	2
資料 3 : 低学年の記述内容	3
資料 4 : 高学年の記述内容	10
資料 5 : 中学生の記述内容	23
資料 6 : 低学年 教材「ポチとルナはいつも一緒」	55

承諾書

上記の内容を承諾します。

生徒氏名

連絡先（電話番号）

資料 1 : 生徒への承諾書

生徒の皆様へ

突然お便りさせていただきます。

私達は、小児看護学を専門としている看護師です。以前は病院で小児看護に、現在は大学で看護教育に従事しています。

悲しいことですが事故・事件によって尊い「いのち」が失われるニュースが毎日のように報じられています。私達は病気の子ども達との出会いを通して、「いのち」の大切さ、「いのち」を大切に生きることについて考えてきました。そして病気以上に事故・事件で亡くなる子ども達が多いことを残念に思い、心配しています。

この度、貴中学校の先生方のご協力を得て、「いのち」の大切さ、「いのち」を大切に生きることについて、子ども達と一緒に考える場を持ちたいと考えております。そしてこのような機会・輪を広げていきたいと考えています。実施に際しては、以下の点に関して十分配慮し行なう予定でおります。

- ① この時間終了後、感想文を提出する（400字1枚以内）
- ② この催しを受けるか否かの選択は、自由である
- ③ 成績には一切関係しない
- ④ 感想文を個人名が分かるような形で使用することは無い

このような目的を理解し協力をお願いします。なお、参加してもよいと想う方は、下記の承諾書にサインし提出をお願い致します。

2003年9月 日

〒078-8510 旭川市緑ヶ丘東2条1丁目1-1 電話68-2931（直通）
旭川医科大学医学部看護学科 岡田洋子（代表）菅野予史季・志賀加奈子・
宮川妃佐子
天使大学看護栄養学部 荃津智子・井上由紀子
石川県立看護大学 井上ひとみ

承 諾 書

上記の内容を承諾します

生徒氏名

連絡先（電話番号）

資料 2 : 保護者への同意書

保護者の皆様へ

突然お便りさせていただきます。

私達は、小児看護学を専門としている看護師です。以前は病院で小児看護に、現在は大学で看護教育に従事しています。

便利で豊かな現代社会にあって、悲しいことですが事故・事件によって尊い「いのち」が失われるニュースが毎日のように報じられています。私達は病気の子ども達との出会いを通して、「いのち」の大切さ、「いのち」を大切に生きることについて考えてきました。そして病気以上に事故・事件で亡くなる子ども達が多い現代社会に、危機感さえ感じています。

この度、貴中学校の先生方のご協力を得て、「いのち」の大切さ、「いのち」を大切に生きることについて、子ども達と一緒に考える場を持ちたいと考えております。そしてこのような機会・輪を広げていきたいと考えています。実施に際しては、以下の点に関して十分配慮し行なう予定でおります。

- ⑤ セッション終了後、感想文を提出する（400字1枚以内）
- ⑥ このセッションを受けるか否かの選択は、自由である
- ⑦ 成績には一切関係しない
- ⑧ 感想文を個人名が分かるような形で使用することは無い

このような趣旨へのご理解と、実施にあたり保護者の方から承諾を頂きたくお願い申し上げます。

2003年9月 日

〒078-8510 旭川市緑ヶ丘東2条1丁目1-1 電話68-2931（直通）
旭川医科大学医学部看護学科 岡田洋子（代表）菅野予史季・志賀加奈子・
宮川妃佐子
天使大学看護栄養学部 荃津智子・井上由紀子
石川県立看護大学 井上ひとみ

承 諾 書

上記の内容を承諾します

保護者氏名

連絡先（電話番号）

資料 3 : 低学年の記述内容

1) Death-Education 実施前の記述内容

カテゴリー 1. みんなの生きる大切な命

- ・命は大事・大切
- ・命は一つしかないから大事・大切
- ・命は一つしかないから一番の宝物
- ・命は小さいけれどたいせつだね
- ・命は人や動物には必ずあるものなので一つ一つ大事にする
- ・家族みんな命をもっているね
- ・鳥も魚も木も命がないと生きていけない
- ・命は人間だけではなく、動物にも魚にもある
- ・みんなの生きる命
- ・みんなみんな生きている。
- ・命は大きくても小さくても同じ
- ・命があると長生きできるかもしれない
- ・神様からかりている大切なもの

カテゴリー 2. はかない命・限りある命

- ・命は一つしかない
- ・命は一つしかないからそれが無くなると死んでしまう
- ・命は世界のみならず、動物も一人一つ
- ・たとえ赤ちゃんでも命が無くなったら一貫の終わり
- ・赤ちゃんが生まれても死んだ人は返ってこない
- ・命は絶対交換とかできない
- ・命はあっという間に無くなると残念だな
- ・命を無くなさいようにしていないと、すぐ、命が無くなってしまう

カテゴリー 3. 命を失う原因と死がもたらすもの

- ・車にひかれそうになったとき
- ・ガンや病気にかかったとき
- ・生まれるときに病気にかかって死んでは大変
- ・生まれるとき病気にかかったり、目があかなかつたら大丈夫かなと思う
- ・虫やハチに刺されたとき死んでしまう
- ・けがをしてもいのちにかかわる

- ・ひとと、堅いところに頭をぶつけること
- ・長くいきをしなかったら死ぬ
- ・世界の人口が減るので大変なことになる
- ・命がないとなにもできない
- ・命がないと生きていけない
- ・命がないと死んでいるのと同じ
- ・命がないと何もできない

カテゴリー4. 命を守ろうという意志・具体的な手立て

- ・命の時計を大事にする
- ・命はみんな一つしかないから守ろう
- ・いのちは一つしかないから自分の命は自分で守る
- ・誰だって命は一つしかないから命は守らなきゃいけない
- ・自分の命は一つしかないから大切に自分で守ろうと思いました
- ・大きくても小さくても一つの命は自分で守らなければ生きていけない
- ・交通事故にあわないようにする
- ・車にひかれないようにしたい
- ・車に乗っている人が見えないかもしれないから見る
- ・横断歩道を渡るときは左右をよく見てそして手を挙げて渡ります
- ・ちゃんと赤だったら渡らないで青になったら渡る
- ・左右をちゃんと見て横断歩道を渡る
- ・横断歩道を渡るときは青になってから渡る
- ・信号をちゃんと見る
- ・ちゃんと止まれの標識があったら左右をちゃんとする一時停止の時はちゃんと右左見て渡る
- ・止まっている車の前を通ること
- ・車道に上がらないで歩道を歩く
- ・自転車は小回りができるだけ聴くものに乗る
- ・自転車とぶつからないように
- ・あまり不注意をしないようにしないとダメ
- ・道路や線路に飛び出さない
- ・かえるとき油断しちゃダメ
- ・危ないものを使うときはお父さんやお母さんと一緒に使う
- ・危ないことをしない
- ・火遊びをしない

- ・子どもだけで花火をしない
- ・手のひらの半分が火傷したら病院に行く
- ・動物にかまれたりひっかかれたら応急手当をして病院に行く
- ・けがをしないように
- ・命をなくさないようにけがをしない
- ・階段から落ちたくない
- ・骨を折っちゃいやだ
- ・火事になりたくない
- ・たばこを吸わない
- ・ゴミを分けて捨てる
- ・ふざけない
- ・すごく小さい紙を切らない
- ・スポーツに夢中にならない
- ・命はなるべく傷つけない
- ・体に気をつけて食べ物を食べる

カテゴリー 5. 命や死に対する問いや死別への思い

- ・どうして人間は死んじゃうのですか
- ・どうして命は一つしかないのですか・命が無くなったらもう友だちやお父さんお母さんに会えなくなる
- ・地球には食べ物がなくて死んじゃう人たちがいて悲しい
- ・動物を飼っていて死んだら悲しい
- ・命を失うとみんなを悲しませる原因になる
- ・亡くなってしまった人はとってもかわいそう
- ・事故で亡くなった人はかわいそう
- ・子どもが死んだら両親がとってもかわいそうです
- ・生きる力が無くなってしまった人は辛いと思う
- ・動物を飼っていて死んだら悲しい
- ・体が大きくなると命も大きくなるの
- ・人間は、病気でも死んじゃうことがあるんですか
- ・長生きできればいいな

カテゴリー 6. 死後の命

- ・命は一つしかないから生き返らないけど神様になって人間は生きる
- ・命が無くなったら拜んでから焼いてお骨にされちゃう

2) Death-Education 実施後の記述内容

カテゴリー1. 命の大切さへの実感

- ・命はすごく大切なものなんだな
- ・ありとか少ない命は大切にしよう
- ・好きなペットがいたら人より小さいからもっと大切にしなければならない
- ・命は大きくても小さくても大事な命
- ・命は生き物（虫・動物）植物にもついているからとても大事
- ・みんなの命は大事にね一つしかないから
- ・命は一つしかないからもっともっと大切にしなければならないんだなあと思いました
- ・本当に命は一つだからちゃんと大切にしないといけない
- ・命はちゃんと大切にしなければならぬ体にとってたいせつなもの
- ・自分も命の大切の仕方がだんだんわかってきた
- ・自分も命の大切の仕方がだんだんわかってきた

カテゴリー2. はかなく戻らない命

- ・命はやっぱり一つしかないんだと思いました
- ・どうぶつ、人間だって命は一つしかない
- ・命は一つだから死んだら終わりなの
- ・命を亡くすと戻ってこない
- ・命は死んだらもう二度と返ってこない
- ・命は一つしかないから死んだらもう終わりだね
- ・命は一回落としたら戻らない
- ・命は誰の命も変わらない、無くなってしまうんだと思いました。
- ・命はパッと無くなる
- ・命は小さい
- ・99%良くても、1%悪ければ死ぬ可能性はある
- ・僕も犬を飼っているからそういうことがあるかもしれません
- ・もし動物を飼ったら気をつけなくちゃだめ
- ・死はちょっとした弾みで起こるかもしれない

カテゴリー3. 死の不動性

- ・命がなくなると動かなくなる
- ・動物は体が冷たいと死んでいる
- ・命が無くなると何もできなくなると思いました
- ・命の不思議なパワーが無くなると死ぬんだ

- ・命がないと生きていけない
- ・命が無くなったら誰とも遊べない
- ・一緒におやつを食べられない
- ・お散歩もできない
- ・死んだら友だちと一緒に遊べない
- ・交通事故で死にたくない
- ・けがをしたくない
- ・生きている人もいれば死んでいる人もいるんだね
- ・死んでしまった犬の友だちやお父さんたちは生きていました
- ・動物だって命をもっている
- ・小さいものでもみんなと同じ命をもっていると思いました
- ・体に火がついて死んでしまうことがあります
- ・灰をすって死んでしまうことがある
- ・命はけがでもなくなる
- ・気をつけないと死んでしまうかもしれません

カテゴリー4. 大事な命を守る必要性の実感と命を守る行動

- ・命を守る
- ・ちゃんと守らなきゃいけない
- ・自分で一つしかない命を守らなければならないんだ
- ・命はすごく大切だから自分の命は自分で守る
- ・命はすごく大事なものだから自分の命は自分で守らなきゃいけないんだとようやくわかった
- ・自分の命は世界に一つしかないのできちんと自分で管理する
- ・車に轢かれて死んじゃった人がいるから自分も気をつけよう
- ・左右をちゃんと見て横断歩道を歩く
- ・信号も無い道路に飛び出さず、左右をよく見て道路
- ・車が留まっているところを通らない
- ・線路に飛び出さない
- ・線路に石を投げない
- ・自転車はできるだけ小回りのきくものを使い
- ・自転車に気をつける
- ・危ないものはお父さんお母さんと一緒に使う
- ・体に悪いものを食べない
- ・体調に合わせて行動する

- ・犬や動物は人より生まれる時間が短いからいっぱいかわいがらないと、と思う
- ・ペットも自分なりにお世話してあげる
- ・かわいそうだとすぐ病院に連れて行く

カテゴリー5. 死や死別に対する思い

- ・死ぬってかわいそうだね
- ・命を亡くすと悲しい
- ・生き物が死んでしまったらかわいそう
- ・小さい命でも命が亡くなるとかわいそうだと思います
- ・死んでしまった人は生き返りたくても死んでしまったから生き返れないのですごくかわいそう
- ・寂しい
- ・誕生日にもらった親友のポチが死んでルナがかわいそう
- ・一番仲良くしている人、生き物が死んでしまったら悲しいね
- ・友だちがしんじゃったらその人のお友達がすごくかわいそうで悲しかったです
- ・死んでしまった人の友だちやお母さんたちは生きていた中で一番悲しいんだなと思いました
- ・命がないと他の人が悲しくなる
- ・犬が死んだら心が無くなって人間が悲しんで泣いちゃう
- ・動物が死んでも人間が死んでも悲しい
- ・遊んで死んでしまったもっと悲しいな
- ・死んでしまったら悲しいけれどお墓に入ってしまったらもっと悲しいな
- ・お墓に入れたときルナはすごく悲しかった
- ・もしそういうことがあたら寂しいだろうなと思った
- ・ずっと一緒だったのに別れるって辛いね
- ・ポチは死んじゃったけれど心にはずっと生きているんだなと思いました
- ・命はなくなってもあたたかいということを学びました
- ・一緒に遊べないけれど目を閉じればまた会えるから悲しくも寂しくもない
- ・犬のポチは目をつぶれば一緒といわれたことで新たな一歩を踏み出したと思う
- ・命というものは死んでしまってもつながっているんだと思いました
- ・ポチは死んじゃったけれど、離れていてもいつも一緒ずっと友だち
- ・ポチが死んでもルナの心の中にいるんだなと思いました。
- ・目を閉じたら会えそうになる
- ・命は一個しかないから必ず無くなってしまふけど命はまだ1つあるみたい
- ・ポチとルナは命と命のアンテナがつながった

- ・ポチは死んじゃったけれど仲良しなのでルナはポチのことを忘れられなかった
- ・ポチは死んじゃってもルナにあいたかったんだね
- ・死んでしまったらめでは見えないけれど近くにいるんだね
- ・だけどいつもそばにポチがいるから寂しくない
- ・もし死んでしまったらうちのお庭にお墓を作って埋めてあげたいです。
- ・自分の犬が死んでしまったけれどずっと心の中にいると思う
- ・僕の犬は心の中にずっといる
- ・命が無くなっちゃった人でも天国で生きている
- ・死んだら一生会えないけれど私のそばに死んでしまったゲンタがきっとそばにいてくれると思います
- ・誰が死んでも心の中にいるんだと思った
- ・死んでしまった人は目に見えないけど近くのどこかにいるんだね

カテゴリー 6. お話の中で疑問に思い、感じたこと

- ・どうしていつか死んじゃうの
- ・命ってどこにあるんだろう
- ・目をつぶるとなぜ一緒になれるの
- ・命はどうしても一つしかないのかなもっと一杯あればいいのに
- ・ポチはどこにいてしゃべったの
- ・突然ポチが死んでしまうところが心に残った
- ・ルナとポチはずっと仲よしだったのにさよならの時がきてしまったね
- ・犬と遊べて良かったね
- ・プレゼントで犬をもらって良かったね
- ・命ってすてきだ
- ・感動した
- ・最初は楽しそうだったです
- ・犬を飼っているその命とルナさんの命があるから遊べるね
- ・死んで生き返ったから命がつながった

資料4：高学年の記述内容

1) Death-Education 実施前の記述内容

カテゴリー1. かけがえのない命

- ・命は、大切にしたい
- ・命を大切に、交通事故とかあわないように協力して生きたい
- ・命は、一人に一つしかないから、その一つの命を大切にしていきたい
- ・命と聞いてもピンとこない。でも大切だと思うときがある
- ・命は、大切
- ・命は、動くものだけにあるから大切にしたい
- ・命は、世界で一つだけのたからもの
- ・命とは、人間が生きるために一番必要なもの
- ・命は、人や生物などの一番大切なこと
- ・命は、誰にとっても一番大切なもの
- ・命は、大切なもの
- ・命は、一人に2つない
- ・命は、一つしかない
- ・命は、なくてはならないもの
- ・命は、大切なもの
- ・命は、一つしかないから必ず守る
- ・命は、一番大切なもの
- ・命は、一人に一つしかない
- ・命は、生きていくのに大切なもの
- ・命は、大切だと思う
- ・命は、大切に一番ないと生きられない
- ・命とは、生きている時に一番大切なもの
- ・一人に1つしかない
- ・いらぬ命なんてないと思う
- ・命は、世界中どこでも一番大切なもの
- ・世界じゅうだれでも命をもっている
- ・命は、一番のたからもの
- ・命は、とても大切なものだと思う
- ・命は、生きるために必要だから
- ・命は、1つしかないものだから大切にしたい
- ・命は、一つしかない

- ・人間や生物にとって、一番大切なもの
- ・命は、大切
- ・命は、大切なもの
- ・命は、大切
- ・命は、大切なもの
- ・命は、一人一人がもっている大切なもの
- ・命は、一つしかない
- ・いつも2つあったら命をみんな大切にしないと思う
- ・2つもあるんだったら、1回くらい死んでもいいやと思う
- ・だから一つのほうが、ずっと大切にできると思う
- ・命といえば大切と思う
- ・わけは、一つしかないから
- ・命が、二つも三つもあれば人は、軽い気持ちで命をすててしまうし、お医者さんだ
っていなくなる
- ・命が一つしかないのはわかっています
- ・命は、一番大切なもの
- ・命は、一番たいせつなもの
- ・命とは、生きるために必要なものだから、一番大切だと思う
- ・命は、生きているものになくてはならないもの
- ・これしかないといきていけない
- ・命は、すごく大切なものだと思う
- ・命は、なくてはならないもの
- ・命は、大切
- ・命は、大事だと思う
- ・命は、大切だと思う
- ・命は、一番大切なもの
- ・命とは、生活の中で一番大切なもの
- ・命は、大切なものだと思う
- ・命は、ひとつしかないから
- ・命は、一番大切な所なんだろう
- ・命は、神様のさずけもの
- ・神様がくれたおくりものだから、せいっぱい生きて、命を大切にしたい

カテゴリー2. 生きている実感

- ・お母さんのお腹から生まれて、今生きているのがうれしい

- ・ 生きていることがうれしい
- ・ 生きていることが
- ・ 生きることは、しあわせ
- ・ 生きることは、すばらしい
- ・ 生きることは、うれしい
- ・ 生きることは、大切だと思ふことがある
- ・ 生きることは、自分の意思で動く
- ・ 生きることは、思ふこと
- ・ 生きることは、協力すること
- ・ 生きることは、悲しむこと
- ・ 生きることは、笑ふこと
- ・ 生きることは、怒ること
- ・ 生きることは、自分の感情があること
- ・ 生きることは、この世にいる
- ・ 生きることは、いろいろなことができる
- ・ 生きることは、じゆうに動ける
- ・ 生きることは、楽しいこと
- ・ 生きるって、しあわせ
- ・ 生きることは、うれしいと思ふ
- ・ 生きるってことは、すばらしいこと
- ・ 生きていると、かなしいこと、うれしこと、たのしいことなどいろいろある
- ・ こどろが、はやくなる
- ・ いつも楽しく遊んだりしている
- ・ 生きるって、しあわせ
- ・ 生きることは、たのしい
- ・ 遊ぶために生きる
- ・ 勉強するために生きる
- ・ 命がないと思ふとちよつと嫌だ
- ・ 生きることは、つらい時、楽しい時あるけど生きているだけでしあわせと思ふ
- ・ つらい時でもがんばれる
- ・ 生きているとじんせい、いろいろなことがあるから楽しい時や、楽しくない時があるから
- ・ 生きることはいい
- ・ 生きるはふだん遊ぶ
- ・ 生きることは、大事なこと

- ・ 生きることは、ごはんを食べておいしいと思うとき
- ・ 生きることは、遊んでいて楽しいと思うとき
- ・ 生きることは、勉強する
- ・ 生きることは、テレビを見ていておもしろいと思うとき
- ・ 生きることは、歩く
- ・ 生きることは、遊ぶ
- ・ 生きることは、しゃべる
- ・ 生きることは、食べる
- ・ 生きることは、勉強する
- ・ 生きることは、犬と走る
- ・ 生きることは、持久走をする
- ・ 生きることは、ビックマウンテン百人一首ランキングをする
- ・ 生きることは、学校に行く
- ・ 生きることは、ねぼける
- ・ 生きることは、勉強している
- ・ 生きることは、走る
- ・ 生きることは、しゃべる
- ・ 生きることは、遊ぶこと
- ・ 生きることは、起きる
- ・ 生きることは、歩くこと
- ・ 生きることは、身の周りの友達と遊んでいる
- ・ 生きることは、果物やごはんを食べている
- ・ 生きることは、お花を見てホッとしているとき
- ・ 生きることは、星を見て「きれいだな」とほほえんだり、感じる時
- ・ 楽しいとか、嬉しいとか感じれる
- ・ 生きているということは、すばらしいこと
- ・ 生きることは、おいしいご飯をおなかいっぱい食べるとき
- ・ 鬼ごっこをしてころんだ時、「いたい」と思った時
- ・ 生きることは、みんなと話をしたとき
- ・ 生きることは、テレビを見て悲しく思うとき
- ・ 生きることは、お花をみて「きれいだなあ」と思う時
- ・ 生きることは、いろいろな物を見て「きれい」「すごい」「おもしろい」と思う時
- ・ 生きることは、みんなで何かするとき
- ・ 生きる事は、いい事
- ・ 生きるるとたのしいことがいっぱいある

- ・生きるということはよろこびだと思う

カテゴリー 3. 他者の死や存在を通して考える生と死

- ・私は好き嫌いもあるけど世界の子ども達は、食べ物も食べれない人もいるのに私はぜいたくかな？と思ってたりした
- ・世界には、食べ物も水もなくまずしい人はいっぱいいるのかなと思った
- ・ニュースや新聞で人が、一人でも「亡くなってしまった」「殺された」と聞くと「誰がそんなことしたんだろう」とか「かわいそうだな」と思う
- ・第一人殺しは、ぜったいよくないと思う
- ・世界人口 62 億から一人へるのは、ほかにその人の親や友人がかわいそう
- ・生きる可能性があるが、ほとんどの人が病気で死んでいる
- ・病気になっている人でとくに心臓にかんけいしている病気が年々ふえています
- ・テレビで 100 才くらいの人を見て、ふつうは 80 才くらいで死んでしまうのに 100 才まで生きるって事はすごいんだなと思った
- ・世界には、食糧難で亡くなる人もいるんだなあとと思った
- ・ピカチュウのねいぐるみとか、ドラえもんのマンガ本とドラクエゲームソフトとかこれでもか、これでもかとあらゆるものをもっている
- ・こんなに恵まれているのに、若い人たちの自殺がふえている
- ・こころのきずが、深くきざまれてしまうそれを代表する病気がうつ病です
- ・毎日のように、ニュースで悪いことをしていないのに殺されている人がいるし、自殺をする人もいるみたいですけど、やっぱり生きていいことはいい事だと思う
- ・テレビを見ていて、いろいろな病気で苦しむ人が出てきて、「まだ生きているからがんばろう」と思っているだと思ったらかわいそうだった
- ・いろいろなテレビで、貧しいくらしをしている人を見たことがあり、もう死にそうなの人が世界中にいることを知っている。かわいそうだ
- ・ニュースで殺人事件色々ある
- ・絶対に人の「命」は、天に召されるまで殺しては絶対にいけないと思う
- ・テレビで、医療関係の手術などは、成功して生きている人が多いけど手のほどこしようになくて死亡してしまう人もいて、その家族はとても悲しそうで人の命は、ひとつしかないとあらためて実感した
- ・死んでしまったら、大好きな家族にも会えなくなる
- ・すごい大好きなおじいちゃんが死んでしまって、自分も死にたい。そうしたら、じいちゃんにもまた会えると思うことが何度かあった
- ・でも、それは家族にまた私と同じような悲しみがうまれるのだからと考えて、やっぱり生きて大きくなったら、家族のやくにたつようになりたいと思った

カテゴリー4. 生や死への意味づけ

- ・命があると生きていて、命がないと死んでいる
- ・生きるってことは、この世にそんざいしているってこと
- ・命は、じゅみようがくるときえてなくなる
- ・命がないと死んでしまう
- ・この世から消えるのはかなしい
- ・死んでしまうとまた生きることはできない
- ・生きることは誰にでもできることだけど、病気やガンになって助からない時は何をやっても生きることができない
- ・生きることは大変なこと
- ・人間は、生きることが大切
- ・命がないと生きていない
- ・生きていくために命があるのかな
- ・生きることって死ぬことよりも大変なことかな
- ・命がないと死んでしまう
- ・ひとつに命がなくなれば死んじゃうってこと
- ・生きることは、子ども、大人がいること
- ・生きていくということは、今ここにいくること
- ・生きることは、自分のことだけじゃなく、いろいろな生物を助けたりすること
- ・生きることは、自分のことだけじゃなく、いろいろな人々を助けたりすること
- ・生きることは、社会に役立つことをすること

2) Death-Education 実施後の記述内容

カテゴリー1. 死の不公平さへの思い

- ・悪い事をしていない、しかもいいことをやったたかし君が、なぜ死んだのかわからない
- ・命のビデオを見てちょっと不安になった
- ・たかし君が生きかえるなら、生き返らせてあげたい
- ・きせきをおこして、悪い人が光にもどってほしい
- ・死んじゃったから悲しかった
- ・あんなに頑張ったのに死んじゃった
- ・命がなくなるって、すごくこわいということもわかった
- ・たかし君は、たしかに病気でつらかったと思う
- ・ものすごいことだし、大変なことで本当に生き続けられたらよかったのにと考えた
- ・命が亡くなると死んでしまう

- ・もっと長生きしたい
- ・病気はあったけれども、もう少し生きてほしかった
- ・命をなくしたら二度と手に入らない
- ・家族が重い病気になってどうすればいいのだろう、死んでしまったらどうしよう、一人になったら生きられない気がして、一人では生きていけない
- ・なぜだろう。まだ、小学生なのに重い病気をもっているのだろうと思った

カテゴリー 2. いのちの大切さの再確認

- ・生きているのは、思っている以上に幸せだなと思った
- ・命は、大切なもので、すじがきなどないと思った
- ・命があれば、こんなこともできるんだと思った
- ・命の大切さがわかった
- ・命は、「大切」の2文字
- ・命ってたいせつだなあと思った
- ・命の大切さがわかった
- ・命を大切にしなきゃいけない
- ・命があるだけで、幸せなことがわかった
- ・命は、とても大事なんだなあと思った
- ・命は、大切なんだなあと思った
- ・命は、大切なことなんだあと思った
- ・「命」は、とても大切なのがよくわかった
- ・命は、生きることにあって一番大切なものなんだとわかった
- ・命のほんとうの大切さがよくわかった
- ・命の大切さがわかった
- ・命は、大切なもの
- ・「命」は、大切なものだと思った
- ・命は、大切なものだと思った
- ・命は、大切だと思った
- ・命の大切さをあらためて知った
- ・命は、すごく大切だと思った
- ・命は、生きるものにとって大切なものだと思う
- ・命は、大切だと思った
- ・命は、生きるために大事なもの
- ・命は、大切
- ・命は、本当に大切だと思った

- ・命は、大切だと思った
- ・命の大切さを知った
- ・命は、すごく大切だとわかった
- ・命は、大切
- ・命は、とっても大切だなあと思った
- ・命は、大切でなくてはならないもの
- ・どんな事やどんな物よりも命よりも大切なものはない

カテゴリー3. 生きることのすごさへの感動・発見

- ・不自由でも何かはできる
- ・生きているのは、思っている以上に幸せなことだなと思った
- ・病気にかかったりしても平気で頑張っていて生きているたかし君はえらい子だと思った
- ・生きる勇氣、希望をもってたかし君は、生きていてすごいと思った
- ・生きることは、素晴らしい
- ・生きているだけで、役に立っていることを学んだ
- ・たかし君は、すごいと思った
- ・感動した
- ・生きることは、素晴らしいと思った
- ・人に何かしようとしていても、自然に役に立っていた
- ・生きていれば、役に立っているから生きていくことが大切だということを忘れない
- ・生きるって、素晴らしいこと
- ・自分が生きているだけで、人の役になれることがすごいと思った
- ・生きるって、すごいことなんだと思った
- ・障害をもっていても、人に親切にできると思った
- ・障害をもっていても、生物の命を救ったりできると思った
- ・生きることは、人を思いやること
- ・生きることは、自分で何かできること
- ・生きることは、夢や希望をもつこと
- ・生きることは、自分で考えること
- ・生きることは、人を愛せること
- ・生きることは、「大切」の2文字
- ・生きることは、自分の勇氣をためす
- ・生きることは、人の役に立つこと
- ・生きることは、相手にきせきをもたらす

- ・生きることは、相手に勇気をささげる
- ・生きることは、相手に希望をささげる
- ・生きることは、人の役に立つ
- ・生きるということは、たかし君が思ったと同じように病気におかされながらも人の役に立つということ
- ・生きていくには、色々なことがあることがわかった
- ・手や足が動かないけど、みんなに役立っていることがすごいなと思った
- ・生きているだけで人はよろこぶんだなと思った
- ・「生きる」ということは、幸せそのものなんだと思った
- ・大人でもできない、すごく大きな事をしてびっくりした
- ・障害をもっていても、みんなと同じように生きていた
- ・ウサギをすごく可愛がっていて、エサのにんじんを送ってすごいと思った
- ・生きることは、とても大切だという気持ちが伝わってきた
- ・人の役に立つことがわかった
- ・生きてなんでもできることがわかった
- ・生きることは、すばらしいこと
- ・生きることは、生きている間じゅうにしかないもの
- ・生きる大切さを知った
- ・人には、こんなに役に立てることがわかった
- ・「生きている」ということは、「役に立てる」ということだと思った
- ・生きることは、がんばれることだと思った
- ・生きることは、とても大切なのがわかった
- ・たかし君が、生きているだけで（がんばっていると）命の大切さがよくわかった
- ・生きることだけで、みんなまわりの人に役に立てている
- ・生きることは、大切なこと
- ・生きることは、自分以外の人に役に立つすばらしさ
- ・生きることが、こんなに素晴らしいことなんだと思った
- ・たかし君の命の輝きを見たような気がした
- ・人のうれしいことをして、自分もうれしくなるのは素晴らしいことだと思った
- ・大人でも出来ないことをやって、すごいなと思った
- ・生きることってすばらしい
- ・生きることは、うれしい
- ・生きることは、たのしい
- ・生きることは、しあわせ
- ・生きているから何でもできるんだ

- ・生きることは、病気の人にとって、とても大事だとわかった
- ・「生きる」ことは、何でも出来ると思った
- ・「生きる」ことは、頑張れる事だと思った
- ・生きることは、人の役に立つためにいるんだと思った
- ・病気でも、知らないうちに役に立っているんだと思った
- ・生きることは、とても大切なんだとわかった
- ・たかし君の頑張りがきせきになり、うさぎをすくったのがよかった
- ・生きるということは、すごく大事だと思った
- ・たかし君は、すごく優しい人だと思った
- ・生きることが、大切だとわかった
- ・たかし君は、病気に耐えてがんばった
- ・すごくつらい病気に耐えてよかった
- ・たかし君は、病気なのにみんなの役に立とうとして思ってすごいと思った
- ・遊んだり、勉強したりして生きるということは、すごいと思った
- ・右手、右足が動かないのに、人形劇をやるなんてすごいと思った
- ・たかし君は、2つの病気をもっているにも一生懸命生きつづけている
- ・生きるって、すごいと思った
- ・たかし君の生きている時間は、短かったけれど色々なことができてすごい人だと感じた
- ・たかし君は、えらいと思った
- ・けっこう、感動した
- ・病気になっていたのに、一生懸命頑張っていたところがすごかった
- ・ウサギのためにニンジンを送ったのがえらいと思った
- ・入院や退院とかして、頑張っているからすごいと思ったし、えらいと思った
- ・生きるってことが、どんなに大切かがわかった
- ・あらためて、生きることは大切だと思った
- ・病気をもっているのに、みんなの役に立ちたい、生きつづけたいと思うなんてすごいと思った
- ・たかし君は、からだが悪いのにみんなの役に立っているのは、すごいと思った
- ・人は、せいぜい長くても100年くらいしか生きれないけれども、たかし君はその間に生きるだけのことを行った
- ・たかし君は、たった12年の間にウサギにエサをやったり、人形劇をしてすごいと思った
- ・生きることは、大事
- ・たかし君は、人にはすごーくやさしい

- ・生まれた時から、障害などで亡くなる人もいるけれど、たかし君の人形劇の感想みたく大人まで生きることができる人もいることがわかった
- ・たかし君は、人や動物達に色々なことをしてすごいなと思った
- ・感動した
- ・たかし君は、色々な人を幸せに出来る人だと思った
- ・本当にこの話は、感動できるいい話だと思った
- ・生きる喜びや、命の大切さがとても感じた
- ・人の役に立とうとして、毎日の練習や右手が不自由なのに頑張っていて、折り紙をおっていて、スゴク頑張っていて、スゴクやさしいと思った
- ・大変な病気にあっても、生きつづけようなど、頑張ろうなどと思って、必死で頑張っ
てすごいなと思った
- ・他人に幸せになってほしいみたいな活動を病気になっているのに頑張ってやっていた
- ・ウサギも元気になってたかし君は、ほっとしたと思った
- ・生きることの大切さ、命は大事なことがビデオを見て思った
- ・生きる喜びを知った
- ・たかし君は、右手が不自由なのに人形劇を頑張ってえらいと思う
- ・たかし君は、動けないのに人の役に立とうとしてえらい
- ・生きているって、いいなと思った
- ・たかし君は、自分は何も役に立たないと思っていたけど、自分のもっているところを
全部やってえらいなと思った
- ・たかし君は、色々な病気で苦しんでいたけどお小遣いを使ったり、色々なことをして、
きれいな心がたくさん、たくさんある
- ・クラスメートもえらいなと思った
- ・なくなってもちゃんと心の中のいる
- ・たかし君は、12年しか生きられなかったけど100年分頑張った気がする
- ・みんな、たかし君のことを思って泣いたり、笑ったりしてたので、たかし君は、すご
い人だなと思った
- ・ニンジンを自分のお小遣いで買ったり、人形劇をお年よりの人にやってあげたり、な
かなかできないことだと思った
- ・たかし君は、クリスマスに人形劇や各学校のために自分自身から、ニンジンを買って
届けたことはすごいと思った
- ・たかし君は、とってもすごいと思った
- ・たかし君は、たくさんのきせきをいこしてうれしそうだった
- ・やっぱり、たかし君は、すごいと思った
- ・人は、生きていたら人の役に立てるんだなと思った

- ・病気になっても一生懸命やれば、何でも出来るんだと思った
- ・クラスメートも協力していいと思った
- ・たかし君は、いい人だなと思った
- ・たかし君は、せいいっぱい生きた
- ・たかし君は、役に立つことをいっばいした
- ・少し、感動した
- ・生きることは、よろこび

カテゴリー4. 生きる姿勢

- ・これからは、不自由な人を助けたい
- ・生きていれば役に立っているから、生きていくことが大切だということを忘れない
- ・簡単に死んでもいいとか言わないで、生きることでもう、宝物だというくらい命を大切にしていきたい
- ・自分が死んだら、役に立たないから命を大切にしていきたい
- ・自分たちも、人のために出来ることをやろうと思った
- ・どんな事があっても、生きていればいい
- ・どんな重い病気でも、励まし合いながら生きていく
- ・たかし君は、生きることを教えてくれた
- ・私は、アトピーなんですけど、ビデオを見て私のアトピーはこれにくらべて全然、楽なんだと思った
- ・自分が、病気になってもたかし君みたいになれるんだと思った
- ・これから動物をもっと、もっと大切にしたいと思った
- ・人のためにやろうということではなく、自分からやろうという気持ちが大切だと思った
- ・私は、一生懸命生きていきたい
- ・私は、命ってすばらしいなあ、がんばって生きていきたいなあと思った
- ・生きている中で一番大事なものは、生きている心であることがわかった
- ・自分の命は、自分で守るという言葉をよく聞くけど、時には助けてもらわなければいけないときもある
- ・僕達は、たかし君のように一生懸命生きている感じがしないので、生きつづけることを大切に思って一生懸命生きていきたい
- ・人間の命は、80才くらいで終わってしまうけれども、その間にできることはたくさんあるんだなあと思った
- ・たかしくんのが、「命がつきるまで生きる」と言い聞かせて命を大切にしていたことが、とても心に残った

- ・たかし君が、悟ったことは、とても大切なことで、生きるために必要な言葉だと思った
- ・「自分は、自分のために生きる。それだけで、人のためになっている。」それだけ、愛している人だと思った
- ・私も、たかし君みたいにやさしい気持ちをもちたい
- ・人のために何かしたら、自分やまわりの人達が嬉しくなれるんだと思った
- ・これからは、「もっと、みんなを（困っている人がいたら）助けてあげよう」と思った
- ・人に優しくしてあげようと思った
- ・「生きつづける」ことは、とっても大事なことで、大変なことだけど、これからも生きつづけていたいと思った
- ・たかし君は、みんなに生きる大切さを教えてくれたと思った
- ・私も人の役に立とうと思う
- ・人は生きていたら、何か人のためにできるんだなと思った
- ・ボランティアをすることは、とても大事なことだと思った。私も、やってみたい
- ・「生きつづける」ということは、忘れない！という感じがした
- ・何にでも一生懸命にやれば、いくら病気になってもボランティアはできるんだと思った
- ・私も、たかし君みたいに人や動物などにいいことを色々したいなと思った
- ・いっぱい生きるといっぱいよろこび、時にはつらい時もあるけれど、そのよろこびで消えるから気にしない
- ・お友達にめいわくなんてかけられない、そんな気持ちをもった

カテゴリー5. 意図的な命の抹消への憤り

- ・友達で「殺してやる」とか平気で言っている人がいた。どうして、そんなこと言うんだろう。みんな頑張って生きているのに！病気の人に聞かせたら何て言うだろう
- ・私は、絶対「殺す」なんてことは、絶対言いたくないと思う
- ・みんな命を大切にしているが、自殺するバカがいる

資料 5 : 中学生の記述内容

1) Death-Education 実施前の記述内容

カテゴリー 1. かけがえのない命

- ・命は大切なもの
- ・命は大事です
- ・「命」「生きる」事は大切なこと
- ・命はとても大切なもの
- ・命というものは大切なもの
- ・命は本当に大切なものだ
- ・人は大切にしなければならない
- ・一番大切なもの
- ・自分の一番大切なもの
- ・世の中で一番大切なもの
- ・命は何より大切なもの
- ・命は一人に一つしかない大切なもの
- ・命は一つしかないから大切にしたい
- ・命は大切な、なくてはならないもの
- ・命を大事に生きていかなければならない
- ・命が大切なものということはみんなの共通の意見だ
- ・命は一生の中で一番大切にすべきもの
- ・命は大切なものだから自分の命、他人の命を大切にしていきたい
- ・命は儚い命は大切にしよう
- ・命は地球上の生物すべてのはじまり命が一番大切なこと
- ・命は地球上にたくさん存在するので大切にしたい
- ・一日一日を大切に生きることは大事
- ・何かをするとき一番大切なもの
- ・命の大切さや命についてのあり方を思った
- ・命は何よりも大切なもので、いつまでたってもその大切さはかわらないもの
- ・あまり命について考えたことはないが、命がどれくらい大切なものかはわかっている
- ・どんな命も生きていくことにはかわりはないから、大切なもの
- ・命は人が生まれてから死ぬまでずっと持っていて、一番大切なもの
- ・命はとにかく大事で、人よりも自分の命を守ること
- ・今の自分の考えでは大事なものだということだけがはっきりしている
- ・語りつくせぬくらいの重みが「命」にはある

- ・命は地球より重い
- ・命はとても重いもの
- ・命とは尊いもの
- ・命は自分の宝
- ・軽々と口で言えるがとても重いのちは、個人が持つ最も大切な宝物
- ・命は尊いもので、その命が活着ている中で心に刻んだものは計り知れない
- ・命は『死ぬ』という言葉を簡単に言っではいけないくらい尊いもの
- ・命はただ、もろく、尊いもの
- ・命は軽くない
- ・命は平等ではない
- ・命はそんなに軽いものではない
- ・生命はかけがえのないもの
- ・とてもかけがえのないもの
- ・命は他の何にも代えられない大切なもの
- ・命は一番大切にしていくなかけがえのないもの
- ・命は重いものであり、簡単に扱えるものではない
- ・全てのものがもっでいて、何よりもかけがえのないもの
- ・命はお金にかえられないもの
- ・命はお金では買えないものだから、一番大事
- ・命はたったひとつの決してお金では買えない大切なもの
- ・物が豊かなこの時代でも命は買えない
- ・命はなんとなくイメージで、尊い、お金にかえられないもの
- ・自らの人生を大切に生きるべき
- ・命は生物全てが守る義務がある
- ・別の考え方では子孫を残し、人間が絶滅しないようにすることもかもしれない
- ・私たちの責任の重さは地球の命です
- ・私たちは地球を守っていかなくてはならない
- ・小学校2・3年までは命はそれほど大切ではないと思っていた
- ・命は大して大切なものでも重いものでもない
- ・新聞・映画等では「命が大切」などと書いてある
- ・「命は一つしかない」「命は大切」は頭の中では常識化している
- ・命の大切さというのも当たり前すぎる
- ・大切にするかどうかは個々で異なる
- ・「命の大切さ」は道徳の教えに過ぎない

カテゴリー2. 限りある・はかない命

- ・命は限りがあるもの
- ・命は永遠ではない
- ・人には寿命がある
- ・人には必ず寿命がある
- ・人間は必ず他界する
- ・人は早いか遅いかで最後には死ぬ
- ・人の命のレールはいずれ途切れる
- ・目に見える命は終わりがある
- ・命があるから生きている
- ・命がなくなれば人は死ぬ
- ・命にはいつか終わりがある
- ・人は必ず死がおとずれる
- ・人はいつか死んでしまう
- ・人はいつかは死ぬ運命にある
- ・よく命をろうそくに例えるがそのとおりだ
- ・命は自然に存在するもので、自然に消えていくもの
- ・今、この瞬間にもまた一つ命が途絶えたかもしれないとてもむなしいもの
- ・時に限りがある命だから輝いているのかと思う
- ・命は大切にしなければならないが、いつかはなくなるもので年をとれば消えていく
- ・命はもうだめだと思ったときにおとってしまうもの
- ・そのエネルギーは乾電池みたいに限りがある
- ・寿命はエネルギーを使い切ってしまったとき
- ・生きることは命を授かった生物全てが当たり前でできること
- ・1日が24時間と同じように、みんな結局はここからいなくなる
- ・いつ寿命がくるかもわからない
- ・自分が生きていなければならないという危機感や、しなければならないことが終わりを安心したときに死が近づいてくる
- ・「命」「生き方」「人生」は一人一人違い、一度きりでやり直しのきかないもの
- ・一人の人間に与えられる命は一つ＝人生も一度きり
- ・共通していることは一回限りの人生と一つの命
- ・命は一つしかない
- ・命は一人一つもっているもの
- ・人命はかけがえのない、一度きりのもの
- ・命は消すと戻らない

- ・（店の看板を壊した時）看板は作れるが、命はつukれない
- ・二度と生き返れないのは誰でも同じ
- ・死ぬということはもう二度と同じ人生は歩めないということ
なくしてしまうと一生戻らないもの
- ・「命」というものが尽きれば「人」はもう戻らない
- ・一度失ったら、もう二度と戻らない尊いもの
- ・命を失ったら二度と生きることができなくなる
- ・人生はたった一度きりでこの命で生活できるのも一度だけ
- ・命はコピーできない、壊せない
- ・同じ人生を取り戻すことはできない
- ・命とはこわれやすいものだ
- ・命は容易く尽きるもの
- ・人はとてももろく「病氣」にとっても弱く、一部をこわすと、すぐに「命」は全てがこわれる
- ・命は大事だが、こわれやすいもの
- ・「命」「生きること」は重いけど軽い、一番失くしてはいけないものだが一番簡単に失くせるもの
- ・飼っていたハムスターを死なせてしまったとき、命は思っていた以上に簡単に失われてしまうものだった
- ・階段や転んだだけで命はくずれる
- ・簡単に失ったり、壊したりできるもの
- ・命ははかないもの
- ・ペットが死んだのを経験して) 命がとても儚いと思った
- ・始まりがあり、終わりのあるもの
- ・人間は死ぬために生きている
- ・人が生きるのも死ぬのも「流れ」のうちだ
- ・生物には生まれるということと死ぬということがある
- ・人が生まれてから死ぬまでのこと
- ・生きているものの定めであり、生と死は1セットである
- ・もし命が限りのないものなら、ペットの大切な役割に気付かなかっただろう

カテゴリー 3. 命・生きることの意味づけ

- ・命とは何だ
- ・なぜ命があるのか誰か知っているのか
- ・なぜ命ははかなく消えるのか

- ・ いまいちよく掴めないもの
- ・ 命は自分でもまだわからないが、いつかはわかるもの
- ・ 生きている間は多くの疑問を持ち続けるもの(生きているってなんだろう)
- ・ 考えても答えは出ない
- ・ 命とは答えのない謎のもの
- ・ 生命は奇跡や理論とかではない不思議なことがあると思う
- ・ 命はどんな意味があるのか
- ・ 「命」「生きる」と聞いて思うのは生態系
- ・ 命はあたたかいものだ
- ・ 死んだら意識がなくなる
- ・ 命は目に見えないが、例えると心臓を動かすエネルギーだと思う
- ・ 「命がなくなる」事は人間では「臓器が停止し死ぬこと」である
- ・ 命がつきるといのは「心臓が止まる」ということを指す
- ・ 命とは心臓が動くことと考えます
- ・ 死ぬとは、脳が死に一生動かなくなること
- ・ 命には脳が必要です
- ・ 命を助けるには脳の働きが大切
- ・ 生命とは自分を動かしているもの
- ・ 昨日まで生きて動いていたものが動きを止める
- ・ 命はただ一つ一つの部品がないと自分は成り立たず、命の意味がないと思った
- ・ 生きることは命というエネルギーを使うこと
- ・ 命は生きるエネルギー
- ・ 「命」がなくては「生きている」とは言えない
- ・ 『死ぬ』ということは『存在』できなくなる＝生きていないという事
- ・ 生きることは命があるからできること
- ・ 生きるとは死んでないこと
- ・ 人間は命があるから生きている
- ・ 生きるためには命がないと生きられない
- ・ 命がなければ僕たちは存在しない
- ・ 命をもらった時点で「生きること」はしている
- ・ 色々な事を感じる事が生きる事
- ・ 『生きている』から命をもっている
- ・ 人が死ぬと悲しいが、生き続けなければいけない
- ・ 命は人がつくられたときにもらうもので生きているものだけがもっているもの
- ・ 命は生きているから存在するもの

- ・「命」があるから「人」は存在する
- ・生きるとは存在すること
- ・生きるということは命が形を成している時の名である
- ・命がなければ人はただの肉のかたまりになってしまう
- ・人が生きている時に親から与えられるもの
- ・命はその現世で与えられた世界の存在
- ・命とは生きさせているもののこと
- ・何をするのも命があるからできる
- ・人生を歩むために必要なもの
- ・命は生きるための道具
- ・生きる為の動力源
- ・命は人間の「こころ」だ
- ・生きることは自分でどの方向にも変えられ、自分が死ぬまでもっているもの
- ・命や生きる、言葉では簡単だが、表すのは大変なことだ
- ・一言で言えるものではない
- ・命は一言では言えないもの
- ・命は言葉で言うのは簡単だが実際はよくわからない
- ・命とか生きることを言葉で説明するのは難しい
- ・生きる理由は無限大の答えがある
- ・命は証明ができない
- ・目に見えるものではなく、造形もなく、表現しにくい名詞
- ・命について語りつくせる人はいないと思う
- ・命は一人一人が一生守るもの
- ・命に代えられるものは何もないので自分自身で守らなければいけない
- ・今度からは命が一つ一つにあると思ひ、考えてから物事をしようと思う
- ・何かを得るために何かを犠牲にしなければ生命は生きられないのか
- ・多くの人が生まれてすぐ、そばに大切な同じ命をもった人がいる
- ・命はとても重くそれは皆がわかっていることだが、日々の生活で優先してしまうのは感情です
- ・そもそも「もの」ではないのかもしれない
- ・命がなくなって喜ぶ人は誰一人いない
- ・地球・宇宙のなかで役に立っているのか
- ・生きていればいいわけじゃない
- ・生まれて、結婚して、子供を産んでというのは私にとって生きることで何でもない
- ・他人が死んだりすると「ひどい」とかしか出ず、あまり深いことは考えない

- ・「命」ということに今まで巡り合っていない
- ・生きる理由を見つければもっと生きるという事について深く考えるだろう
- ・命について色々考えてきた
- ・「命」と考えても頭に浮かぶものがない
- ・命についてよく考えたことがないからよくわからない
- ・命がよくわからない
- ・そもそも人は何のために生きているのか
- ・命って何なのかはわからない
- ・自分はこれから何をすればいいのか悩めば悩むほどわからなくなる
- ・自分の大切な人が亡くなったことがないのでよくわからない
- ・「生きる」という事の意味はよくわからない
- ・「命」が何なのかわからない
- ・命とは何かよくわからない
- ・自分は何のために生きているのか
- ・どうして生まれてきたのか
- ・命がなければ地球には何も無い
- ・地球上にあるもの全てに命はある
- ・動物や植物、自然にも同じことは言える
- ・地球上にいる生物が維持しているもの
- ・この地球にはたくさんの命がある
- ・人間だけでなく、他の生物も生命を持っている
- ・生命は人だけでなく、鳥・昆虫など様々な種類がある
- ・花も人と同じ命を持っている
- ・イクラにも命がある
- ・ペットの命はあまりにも小さすぎるが、その生き方は大きなものだ
- ・どんな生物も命がなければ何もできない
- ・命は『生きている』ものが必ずもっているもの
- ・どんな生物も命がなければ何もできない
- ・命があるから人・動物・植物は生きている
- ・動植物も「命」が存在していて生きている
- ・木もアリも一つの命をもっている
- ・人間・動物・植物いがいにもあるものだと思う（消しゴムや紙などにも）
- ・人間の命は動物や植物に支えられている
- ・昆虫・動物・植物にも与えられ、大事にしながら生きている
- ・人間は他の生物と何も変わらず、平等の命をもらったという事を自覚しなければなら

ない

- ・ 鮭はたくさん卵を産むが一匹か二匹しか残らない
- ・ 「生きるために殺す」のは仕方がない
- ・ 命がなくなったら好きなことができなくなるし、好きなものを見ることができなくなる
- ・ いきなり人生が終わるのではなく、ある時その人に決められた命が終わるのだと思う
- ・ 植物の命も人の命と同じくらいに思って世話をしている
- ・ 命は生きるものに与えられたものであり、上も下もない
- ・ 皆平等に与えられたもの、それが命
- ・ 「命は皆平等じゃないのか」と思う
- ・ 命は皆平等に扱われるべきだ
- ・ なぜみんな同じではないのか
- ・ 死に直面したわけでもないのに悟ることも不可だ
- ・ 人の死を身近に感じたことはない
- ・ 文章に表せと言われても何も書けない
- ・ 感情も命がなければ感じられない
- ・ 生きたくても生きるのが困難な人もいる
- ・ 「ころ」がなくなった人間に「いのち」もない
- ・ 人の死を身近に感じたことはない
- ・ 文章に表せと言われても何も書けない
- ・ その理由は人によって違うが理由は浮かんでこない
- ・ ひねくれた考え方を持つ者もいるかもしれないがそれもまた立派な「生き方」である
- ・ 死にたい人には迷惑なもの、生きたい人には必要なもの、何も感じてない人には何気ないものでしかない
- ・ 命は言葉では言えないのは、考える前にいのちはあって、命がなくなれば考える必要はなくなるからだ
- ・ この世に生を受けてたくさん事をし、この世を去っていく、ただそれだけのこと
- ・ 「生きる」「死ぬ」ただそれだけ
- ・ 生きることには何の興味もない
- ・ 「命」にあまり重大さ、重さを感じない
- ・ 命に重さなんてない
- ・ 「命」について考えると人間が馬鹿に思える
- ・ 「命」は私にとってただのゴミと一緒に
- ・ 「生きる」ということは「無意味」なことではないか
- ・ 生きているものに何の意味があるのか

- ・一番難しく、一番くだらない問題
- ・人はいきなり命を落とすことはないと考え、その事を心の奥にしまい込んでいるのだ
- ・命はあって当たり前と思っはいけないと思うのは、そう教えられてきたせいなのかもしれない
- ・「命より大切なものはない」「命は一つだけ」と言われるが、わかっているが、自分が死ぬという事は考えがたいこと
- ・命は大切なものだと思うが、それ以上は考えたことはない
- ・命「生」こんな言葉から思いつくのは「死」という言葉だけ
- ・「生」は最も辛い罰だ
- ・生きることはつらいこと
- ・自殺は良いことではないが、唯一の逃げ道なので個人の自由
- ・自殺願望が強いので「命」は捨ててもいいと思っている
- ・ただ、死にたい
- ・「人を殺す」事は絶対にいけないことだが、「なぜいけないの？」と聞かれたら答えられない
- ・生きることは色々大変なこと
- ・「命」について考えると、全然深いところまで考えていない自分がいて情けなく思う
- ・命はその命をもった人に命令を出す（人生の喜び・悲しみに対し）と思う
- ・人を幸せにするという理由が多いだろうが、自分は満足しない
- ・意味なしで生まれたものはない
- ・命があるから夢を実現できたり、自分の道に進んでいける
- ・命の生
- ・命はあるからこそ価値がある
- ・生きていて何もしない人はいない
- ・ろうそくとの違いはそこにあり、それが生きているものの特徴である
- ・世の中の人「命」を常に意識しているわけではない
- ・命を落としてしまえばそこで人生は終わり
- ・誰も命を落とすことを望んではない
- ・「今、自分が生きていることすら偶然に近い
- ・命が与える影響も大きい

カテゴリー4. 死について思うこと

- ・死んだら嫌な事もないが楽しい事もない
- ・死ぬのならなぜ生まれてくるのか
- ・人はなぜ死ぬのかということをよく考える

- ・死んだ後の自分の意識（いのち）はどこに行くのか
- ・命について考えるとき、死んだらどうなるのか
- ・死ぬとは何だ
- ・自分が死んだらと考えると色々考えてしまう
- ・マンガでは天国があり意思が存在するが、それがなかったらどうなるのか
- ・死んだら自分はどこに行くのか
- ・「死んだ後はどうなるのか」ということが気になる
- ・最近本を読んで命について深く考えた
- ・死＝無だ
- ・死ぬとは消えてしまうこと
- ・消えてしまったら何もかも失ってしまう
- ・死んだら何もかも失う
- ・死んだら充実している人生も消える

カテゴリー5. 命を軽んじることへの怒りや疑問

- ・自らの命を自らの手で絶つ人もいる
- ・日本は自殺大国だと聞いた
- ・今、自殺する人が多い
- ・自殺も自分の命を殺すので、殺人と同じ
- ・命を無駄にする人もいる
- ・尊い多くの「命が」失われている（全国で発生する事件・事故で）
- ・人に命を奪われるものもいれば、自ら絶つものもいる
- ・事故等で命を落とす人もいる
- ・遊びのように自らの命を奪ってしまうなんて大人の世界はそんなに疲れるものなのか
- ・世の中がゲーム化していて、人を殺してもリセットボタンを押せば元に戻る人がいる
- ・命を簡単に絶ってしまうドラマや事件が多い
- ・テレビ等で「殺人」という言葉がよく使われるが、軽い言葉ではないのではないかと思う
- ・地球には絶滅寸前の動物もいる
- ・虫や動物の命を簡単に奪う
- ・自分たちの生命の源の「地球」を自分たちで汚している
- ・人間は自分の命を守る自然の命を自ら失っている
- ・人は自分たちのことを他より優れていると思いきすぎだ
- ・もし、死について考えるなら全ての事に気を使う（交通事故等はなくなる）
- ・（交通事故など）人が命を奪おうとするまで追い詰めていいのか

- ・人間は自分の命にあまり危機感を持っていないと思う
- ・何にも代えられないことは当たり前すぎていつの間にか重さなどを忘れている
- ・命の大切さ、有難さがわからない人、気付かない人が増えたのが残念
- ・最近命を大切にしない人が増えてきている
- ・人の命というものを全く考えない人が増えてきている
- ・大事な生命を奪うという愚かな行為が出てきている
- ・自分や他人の命を大切にするという意識が薄れていっている
- ・近頃の人々は命の大切さをわかっていない
- ・命を軽く考え、死を身近に感じる人が増えている
- ・辛いことがある人生を、今の人は生きることを簡単にやめてしまう
- ・命を粗末にする人が多い
- ・命は簡単に扱っていいのかと疑問に思う
- ・命は安易に扱うものなのか
- ・最近人間は命・生きることについて考えが変わってきたと思う
- ・人によって命の重さが違うなんてありえない
- ・冗談でも人に「死ね」などと言ってはいけない
- ・殺人事件があると人はかわいそうなどと言うが、犯人を見つけようという人はいない
- ・自殺した人のことを考えても気付くのが遅く、その人はもう帰ってこない
- ・知り合いじゃないから動かないのはひどい
- ・学校で適当に「死ね」と言う人がいるが言われた人はショックだと思う
- ・（いじめで）自分の将来を絶つなんてどんなに悲しいか
- ・なぜ自殺する人がいるのか
- ・自殺する人の気持ちがわからない
- ・自殺する人のことがわからない
- ・なぜ自殺するのかよくわからない
- ・なぜ自殺をするのかわからない
- ・なぜ、自分の命を絶つ必要があるのか
- ・なぜ自らの大切なものを失ってしまうのか（自殺・他殺等）
- ・自殺する人の気持ちを理解できない
- ・命のあるときに一生懸命生き、自分の意思で命を無駄にするのはやめたほうがいい
- ・生きること、命を簡単に捨てないでほしい
- ・簡単に死ぬとか言わないでほしい
- ・自殺するのも勇気がいるが、その苦難を乗り越える勇気を持てる人になってほしい
- ・命を粗末にする人には一番大切にしてほしい
- ・親からもらった命を粗末にしてほしくないと思う

- ・自殺はこの世で最大の禁忌
- ・「死ぬ」ということを簡単に考えてはいけない
- ・自分の命は自分で守り、簡単な理由で捨ててはいけない
- ・自分の命を自分で捨てることほど寂しいことはない
- ・せっかく生まれてきたのに自ら命を絶つなんて絶対にいけない
- ・死ぬことはしてはいけない
- ・エネルギーが残っているのに自分から失おうとするのはダメだ
- ・大切な人はその人を必要としているので、自ら命を捨ててはいけない
- ・いじめ等で自殺する人がいるが、大切な命をなくすのはいけない事だ
- ・自殺は生きていくて死んでいく人に申し訳ない行い
- ・自殺などで命を無駄にしたくない
- ・自殺をする人はおかしい
- ・命を捨てることは変だ
- ・自殺は悲しいこと
- ・もらった命を一人で抱え込んでいのちを絶つのは大馬鹿者だ
- ・自殺する人は間違っている
- ・命を粗末にして恥ずかしくないのかと思う（自殺等のニュースを見ると）
- ・自ら命を絶つことはもったいない事
- ・命を簡単に捨てるのはもったいない
- ・自殺する人を聞くが、生きていることが楽しいしもったいないと思う
- ・家族や親戚が悲しむ
- ・死を逃げ道と考えてはいけない
- ・「死」は逃げ道でしかない
- ・自殺しようとする人は命の大切さを学ぶべきだ
- ・やめることは簡単でも、増やすことはできない
- ・「死にたい」と「死のう」は違う
- ・命を簡単に捨てる人は夢や希望がないのではないか
- ・日本の命に対する考え方は間違っている（精神的不安定の人が殺人を犯したときなど）
- ・中学生が人を殺すのは衝撃的なこと（最近の犯罪の報道で）
- ・自殺する人、人を殺す人は「死」を深く考えていないのか、それとも楽観的にしか見たことがないのか
- ・事故はかわいそうだし、他殺は悲しすぎる
- ・苦しませる方も、命の大切さを知ることが大切
- ・命を大切にすることは難しい（反応するのが難しい）
- ・どんな理由があっても人の命を奪うのは最低だ

- ・その命を他人が勝手に奪っていいのか
- ・自然・動物・人間に命があり、自分で守るもので他人が守れるものではない
- ・命はとても大切なもので、他人がその命を途絶えさせる権利はない
- ・他殺は絶対にしてはいけないこと
- ・「殺す必要がないのに殺す」のは間違っている
- ・（少年犯罪を見て）動機があっても殺人は絶対にダメなのに理由もなく殺すのは一番良くない
- ・自分に与えられた「命」なのに、他人と同じものになっている人がいる
- ・「いのち」を殺したからといって、さらに一つの「いのち」を殺すことには遺憾の意を示す
- ・関係のないものの命を奪うのはやめよう
- ・他人の命を汚したりできないし、それ以上を望むこともできない
- ・殺人をする人は「命」の重みがわかってない人
- ・犯罪を犯す人は「命」に対する感覚がなさすぎる
- ・命についてか考えさせられたのはアメリカの同時多発テロのとき
- ・ある詞に「あなたは人間を殺せますか？」と書かれていて、命はどんなものか関心を持つと同時に少し怖かった（死刑囚について書かれたもの）
- ・「こころ」がある限りその人にはまだ更生の道があるはずだ
- ・人を殺す事に反対で、死刑にも反対
- ・まだ「こころ」がある死刑囚を死刑にしてもいいのか

カテゴリー 6. 自分の生き方

- ・命はとても大切だがいつかはなくなるので、守ることよりもどう使うかが大事
- ・命生きることは楽しい
- ・生きることは素晴らしい
- ・生きることは素晴らしい
- ・命・生きることは神秘的
- ・「生きる」とは辛いことであり楽しいことである
- ・生きることは辛い事も楽しい事もある
- ・生きるということはその人の夢や希望に向かっていくこと
- ・生きるという事は普通に生活すること
- ・生きるということは「今」を生きるということ
- ・生きることは人間の個人の権利
- ・生きることは最低限やり遂げること
- ・生きることはとても大変

- ・「生きる」ということは簡単にみえて一生わからないもの
- ・その問題に人は関わっていない
- ・命が大切とわかっているけど、守りきれず消えていく
- ・誰かのために死ぬるなら、自分の命で誰かが幸せになれるならそれは本望だ
- ・生きている間には悲しさや楽しさがあるが、自分のやりたい事を追いつけるのが生きる事
- ・大切な人を守るために捨てる
- ・自分は人を幸せにしているのか、幸せにできるのか
- ・普段の生活の中で死を考えるようなことはまずない
- ・人の死を考えるにはまだ若すぎる
- ・自分で命という愛の結晶をつくりだす、それが人生・愛・命・生きること
- ・「命」「生き方」について一度も考えたことはない
- ・「生きる」「命」については深く考えたことがない
- ・命について深く考えたこともないし、なにも知らない
- ・考えたことはない
- ・命について深く考えたことはない
- ・特に考えたことはない
- ・命生きることについては考えたことがない
- ・「命」「生き方」について一度も考えたことはない
- ・いつか「生きて」みたい
- ・「命」を大切にするには「生き方」が関係する
- ・人の命より自分の命を守りたい
- ・どんなことがあっても生きたい
- ・生きるためなら何でもできる
- ・少し嫌われても長く生きたほうがいい
- ・とにかくたくさん生きたい
- ・命は大事にできるだけ長く生命を保っていられるようにしないといけない
- ・早死にせず、自分が求める理想の大人になれるよう生きて生きたい
- ・今一番大切に思っている家族がいなくなったらと考えるだけで悲しいので、命を粗末にするようなことはしたくない
- ・命というものを最後まで味わいたい
- ・その時その時を楽しく過ごせればいい
- ・「今」を楽しく生きたい
- ・楽しむ事
- ・楽しい命にしたい

- ・せっかく与えられた機会だから楽しんでいきたい
- ・生きていることに意味がなくても、死ぬときに笑って死ぬるように楽しく生きていきたい
- ・人に流されえず自分が大切だと思うことを好きなようにしたい
- ・自分の求める生き様は、太く長く自分の好きなように生きるということ
- ・粗末にせず、やりたい事をやり、楽しむことが最高の命のあり方で生き方だ
- ・自分の好きな自動車のエンジンを使って自分が生きてきた人生に生きがいを感じてみたい
- ・自分のやりたいこと、やらなければならないことをするため、自分の夢をかなえる為に生きている
- ・自分のやりたいことをすること
- ・自分で自分を信じ、思ったままに生きていきたい
- ・自分のしたいことをしながら生きたい
- ・自分だけの人生なので自分のためだけに使いたい
- ・生き方等は自分で選ぶもの
- ・精神科医になって、悩んだ人がどうするのかを知り、自分の生き方の糧とする
- ・命は火のようないつ消えるかわからないものだが、精一杯生きることができたらすばらしい人生だ
- ・たった一度しかない人生だから大切にし、充実させ、一分一秒を貴重に過ごしたい
- ・たった一度きりの人生だから、特別で悔いのない人生を送りたい
- ・今できることをして、後悔しないように努力していきたい
- ・悔いのない一生を送りたい
- ・死ぬときに後悔が残らなければ、それは良い生き方ではないだろうか
- ・この世に生まれてきたことに後悔しないようにしたい
- ・自分が死に直面したとき、人生を後悔したくない
- ・人生は人それぞれで生き方もその人の自由だが、一度きりの人生を無駄にしたくない
- ・命は大切に重い、失ってしまえば何もかも終わる
- ・無駄にしてはいけないもの
- ・「命」は決して粗末にしてはならないもの
- ・人間は人生の終わりまで一日を大切に過ごさなければならない
- ・生まれたばかりの赤ちゃんも息をして、今自分にできる事を必死に頑張っている
- ・たくさん苦勞を重ね、楽しく生きることが一番の幸せ・生き方だと思う
- ・嫌なことがあっても、前向きに限られた道を一生懸命歩んでいきたい
- ・この命をもらったからには、毎日を力強く生きていこう
- ・自分と戦って自分を超越ることができたとき、人は生きている

- ・生きるのは辛いというが、それは一時で皆が必ず通る道
- ・どんなに憎い目にあっても命だけは粗末にはしてはいけない
- ・自分の人生を簡単に投げ出そうと思わない
- ・人は悩み、自分自身と戦いながら生きている
- ・たった一つしかない命または人生に人間は努力する
- ・命の重さを見つめ直すべき
- ・これからは心を入れ替えて生きていきたい
- ・生き方は一日一日をどう生きたいかを考えたほうがいい
- ・人の生き方は家の環境、時代などに影響される
- ・最後は自分の意志の強さが重要になる
- ・生まれてきてよかったということを死ぬまでに本気で感じてみたい
- ・相手の意見のままについていくのは「自分」の人生を無駄にしている
- ・若さも体力もなくなり、最後に残るのは自分の本当の良さで、その良さを作るのが人生・生きること
- ・命は自分で守り自分で治し自分で成長させていかなければならない
- ・自分の命は自分の気持ちでも左右される
- ・いつか自分に勝てたら、きっと死んでも良い
- ・生きているからこのような疑問が持て、生きている間にわかるのかなと思いきこの世界に「存在」している
- ・人は命が尽きかけていても生きたいという気持ちが強ければ生きられる可能性は高くなる苦しいことばかりでなく、楽しみもあると知ったら自分自身で命を絶つ人はいなくなると思う
- ・父親はみんなに愛されて悲しまれて死んだが、僕には理想ではない
- ・罰を受けてもいき続けようとする強い心が私にはない
- ・世の中には色々な生き方がある
- ・生き方はその人の全てが出ているもの
- ・生き方のある人となない人では生活の仕方が変わってくる
- ・人が生きる理由を見つけたときどうなるのか
- ・生きる気力を持ち続けるには「目標」をもちそれに向かい努力すること
- ・生きる理由を見つけると生きる目標がなくなる
- ・人は生きる理由を探すために生きていると思う
- ・人が生まれるということは何か理由がある
- ・自分の命だけではなく、周りで支えてくれている人も大切にしていきたい
- ・人間は一人では生きていけない
- ・一人では生きていけないので、人と支えあえる関係を築くことも大切だない

- ・今を充実して生きれば命を大切に生きるという使命を達成できると思う
くいのないように生きよう
- ・人生の中で新たな発見をしていけばいい
- ・今の自分を一生懸命に生きるのが大切だ
- ・生きて何かを見つけた人は幸せ
- ・生き方は自分に何を求めるかによって違ってくる生きることが当たり前だと思っていたが、この当たり前のことがすごいことだと思う
- ・命は限りあるからこそその生き方がわかるのだ
- ・自分が本当に求める生き様は人を傷つけない暮らしをすることかもしれない

カテゴリー 7. 現代医療への問いかけ

- ・命のことを一番わかっているのは医師
- ・一人の命も犠牲にせず一人一人の命を大切に治していくべきだ
- ・病人間の命は頭が良ければ預かることができるのか
- ・人を救うためには技術と学力ではどちらが大切なのか
- ・むやみに働いて金持ちになる医者は本物ではない
- ・人を冷凍保存して科学が進んだら生き返らせると言うのは本当にいいことなのか
- ・すぐに終わらせることもあるが、誰かの手によって長くすることもできる
- ・健康に百歳まで生きるのともかく、何度も死にかけて百歳まで生きるのは本当にいいことなのか
- ・医学を使って延命することに何の意味があるのか
- ・命を引き伸ばそうとするのは人間だけだ
- ・技術が上がるまでに何人もの命を犠牲にしていいのか
- ・大切な一人をたくさん救い、患者から感謝を受けるのが医者だと思う
- ・病院では日常茶飯事に命が失われる
- ・病院では命を軽く見ているのかと思った
- ・祖父が病院のミスで死んだ

2) Death-Education 実施後の記述内容

カテゴリー 1. 大切さを実感した命

- ・生まれた意味は生きるためであり、生きる意味は命を大切にすること
- ・やっぱり命は大切なもの
- ・命とは大切なもの
- ・命とは何よりも尊いもの
- ・命の大切さを改めて実感した

- ・命とはかけがえのないもの
- ・命はとても大切だ
- ・命を大切にしようと感じた
- ・命の大切さがわかった
- ・命の大切さを改めて感じる事ができた
- ・命は本当に大切だと感じた
- ・命の大切さを改めて知りました
- ・命の大切さとそれに立ち向かう勇気を知りました
- ・今回の講演で改めて命の大切さや大きさを知ることができた
- ・命は儚い、だから大切にしなければならない
- ・命は何にも代えられないもの
- ・命は1つしかないのにその重さを計り知れないほどあり、命の影響はありえないほど大きい
- ・命の大切さを感じた
- ・命の大切さを考えた
- ・1番大切なものは命だ
- ・命は大切である
- ・命の重さを実感した
- ・命の大切さを実感した
- ・命はとても大切にすべきものだ
- ・命は大切だと思った
- ・命はかけがえのない宝物
- ・今は命の大切さがわかった
- ・命を大切にしよう
- ・命はかけがえのないもの
- ・命は重みがあって大切なものだと感じた
- ・命は大切な存在だ
- ・命が大切なことは当然だ
- ・改めて命、生きることは大切なこと、もっと大事にしないといけないと思った
- ・命の大切さについて考え直すことができた
- ・命は大切です
- ・命の大切さがわかった
- ・改めて命の大切さを知り、生きていることに喜びを感じた。
- ・改めて命について考えさせられた
- ・人の命はやっぱり大切だ

- ・命を大切にすることの大切さを感じた
- ・命はすごく大事なもの
- ・命の重大さが少しわかった気がする
- ・命はもっと大切にすものだ
- ・改めて命という大切さを実感した
- ・本当に命の大切さがわかった

カテゴリー 2. 認識した死の現実

- ・命はとても弱いもの
- ・命はとても儚いもの
- ・命をもつものは先は見えずに、何が起ころかわからない
- ・幼い子が病気に負けて死んでいく事を聞くと、人間はそんなに弱い生き物なのかと深く考えさせられた
- ・生きてくても生きられない人がいる
- ・今この時にも死んでいく人がいる
- ・世の中には死んでいく人がたくさんいる
- ・いい子供でも悪い子供でも、病気に勝てずに死んでしまうことがある
- ・生きてくても病気で生涯を終えてしまう人もいる
- ・助からない人もいるというのが衝撃だった
- ・闘病・治療が激しいことを知り、びっくりした
- ・勇敢に立ち向かって亡くなってしまった人に悲しみました
- ・頑張っても頑張っても死んでしまうなんてすごく悲しい
- ・一生懸命病気に闘っても命を落としてしまう人がいることは悲しいこと
- ・世の中には十歳まで生きられない子供たちがいることを知り、辛く悲しく思った

カテゴリー 3. 支えられ・つながりあう命

- ・命がなくなったら、嘆き悲しむ家族、兄弟、友達がいることを考えていなかった
- ・生きるというだけで、親孝行になる
- ・1つの命はその人のものだけど、その存在を大切に思ってくれている人がいる
- ・自分の生活を支えてくれるたくさんの人達がいるからこそ、生きていける
- ・幼くして死んでいった人も、命の大切さを残して、家族を残していったのだと思う
- ・一人の命の周囲には沢山の暖かい思いがあることを知った。命は大切にむやみに危険にさらしてはならないことを知った
- ・生きていることは沢山の人が支えているから、その人は幸せに暮らせている
- ・1人の人間・動物が死ぬと、沢山の人が悲しみ、寂しい思いをする

- ・病気等は「仕方ない」という事もある。「殺人」は残された家族・友人は怒りと憎しみで、その人の生きがいさえ奪うこともある
- ・辛い事にぶつかり、生きることが楽しくないと思う事があっても、大切な人が自分を支えている
- ・生きるということは親に支えられて実現していることだ
- ・あの少年も親がいなければ抗がん剤もリハビリもしないだろう
- ・人の強さは支えてくれるもう1人がいるからこそ、強くなれる
- ・人間はみんな平等で、誰かが特別に同情されるわけでもなく、1人1人がお互いに支え合い、命という大切なものを持ち生きている
- ・ともに生きていくことが大切
- ・命に関わるというのはどんな形にしろ、本人、周りの人など多くの人が傷つく
- ・人間は人間がいなければ生きていけない

カテゴリ4. 自分達と同じと認識した障害者観

- ・障害があっても普通の生活ができる。障害があっても楽しい生き方ができる
- ・障害を持っていても、生きたいということはみんな同じ
- ・障害があるからといって特別な目で見てしまうのはダメだと思った
- ・U君は、かっこいい。普通と変わらない
- ・障害を持った人は普通の人と違うオーラがあると思った。ごく普通の高校生で「強いなあ」と感じた
- ・障害者の人は少しハンディがあるだけ。普通の人と変わりはないと知った
- ・障害を持った人をおかしいと思う事が本当にかわいそうなこと
- ・可哀想だという同情の気持ちは持ちたくない
- ・障害を持つ人達を可哀想だと感じるのも嫌い、それはみんな同じ命を持った人間だから
- ・障害者という言葉が嫌い、それは弱者として見る差別が嫌いだから
- ・特別な差別が嫌い
- ・「障害者=変な行動をする」という考えを絶対に持ってもらいたくない
- ・障害者も生きているんだし、健常者と同じ扱いをした方がいい
- ・健常者が変な行動をすると「障害者みたいだ」というのが1番嫌いだ
- ・障害を持った人は障害を持っているだけで他は人間と同じ
- ・みんなは障害者を誤解している
- ・障害者も人だから、人なりに生かしてあげたい、でもそれができない人も数多くいることを再認識した
- ・障害を持つ人達は絶対につらい事を味わって、今はそれなりに楽しんでいると思う

- ・障害を持っている人に比べればそれなりに苦勞はあるが、命に大変なことはないとい
ってもいいくらいだ
- ・たとえ病気や障害を持っていたとしても、私達と同じように明るく楽しい生活が送れ
るとわかった
- ・健常者も障害者も同じ人間なのだというのがこの授業で特にわかった
- ・障害を持った人もそうでない人も差別しないで、同じように生きるのが普通だと思
う
- ・見た目ではわからないが障害を持っている人、見た目でわかる人と様々だが、みんな
楽しく普通に暮らそうとするところは一緒だ
- ・あの高校生もライブをしたり自転車に乗ったり、普通に生きている

カテゴリー5. 軽視される命への問題提起

- ・一つしかない大切な命を捨ててしまうなんておかしいこと
- ・生きたくても生きられない人がいるのだから、命を無駄にするのはその人達に申し訳
ない
- ・頑張っている人もいるのに、最近命という大切なものを無駄にしている人がいる
- ・この世の中には五体満足でありながら、自殺・心中といった命を捨てる行為を行う人
がいる
- ・不自由なく生活している人達が事件を起こしていることに疑問を持った
- ・世の中には何の不便もなく生活しているのに、命に関わって殺す・殺されるという関
係があるのはおかしい
- ・障害を持ってないのに、自殺などをする人は自分に甘えている
- ・自分から命を絶つ奴、人を殺す奴は愚かで悲しいものだ
- ・今の世界には命を軽く見ている人が多い
- ・なぜ今の日本・世界では個人感情で命を奪ったり、自ら命を絶つということが起こる
のか
- ・殺人事件や自殺は何を考えてやっているのかわからない
- ・最近では自殺や殺人など、人の命をおもちゃのように考えている人がいる
- ・人の命を大事にしないのはダメだ
- ・普通に生きるのも難しい人がいるのに、世間では「殺人」「自殺」がある
- ・命に関わる事件を起こしている人は今日のように命について考える事がなかった人だ
と思う
- ・今、色々な事件があるが、なぜみんな自分の命を大切にしないのか不思議だ
- ・人（自分）の命を無駄にする人は、人間としていけない人だ
- ・生きたくても生きられない人がいるのに健康な私達が命を大切にしないとその人達に
失礼だ

- ・自殺など自分自身で命を絶つ人が私にもわからない
- ・そういった行動は誰にも幸せや喜びを与えてはくれない
- ・命の大切さがわかれば、人は無意味な殺人は起こさない、無意味な自殺をしない
- ・病気と一生懸命に闘っている人がいるのに、命を大切にしない人がいるのはその人の気持ちが全然わからない
- ・そういう人は頑張っ生きてようと思っいても死んでしまった人達に悪い
- ・今の世の中は自殺や殺人が毎日のように起きている。生きたくても生きられなかった人のことを考えると、なぜこんなことをしたのかとても疑問に思っ
- ・自殺する人はその限りあるものをそまつに扱っっている自殺や殺人などで人の命が消えていくのを「他人事だからいいや」と思っっていたが、今回話を聞いて他人事じゃない、人の命がなくなるのは悲しいと思っ
- ・クラスでもふざけて「死ね」と言う人がいるが、そんな言葉はふざけてでも言ってはいけない言葉だ
- ・日常生活で「お前死ねや！」とか「キエロ」など、命を軽く思っ言っていた自分に反省する
- ・今までふざけて「死ね」や「殺す」と言っていた言葉の数々はひどいことだ
- ・今まで自分がどれほど命というものを軽く見ていたかが思っ知らされた
- ・今日まで命というものを軽く考えていたような気がする
- ・「命を大切にしていけない」という言葉が身にしみ
- ・今までは自殺なども「嫌になったら死んじゃええ」くらいにしか考えてこなかったの
- ・今回は色々なことを考えさせられた。
- ・これからは誰かがむかつくからとか死んじゃえとか言わないし、考えないようにしたい
- ・命は粗末にしてはいけないもの
- ・命は決して無駄にしてはいけないものだと感じた
- ・命を無駄にしている今の時代を、無駄に命をなくさないようにするべきだ
- ・みんなにも人や命を大切にすることを心がけてほしい
- ・頑張っ生きてる人がいるのだから、命を無駄にしない方がいい
- ・命を粗末にできない
- ・これからの社会は常に人の命を考えて生活するべき
- ・事故で命を落としたり、不自由な体になることもあるので、みんなに自分の命をもっ大切にしてもらいたい
- ・健康な自分達が、自殺・事故・殺人などで命がなくなっっているこの時代を変えるべきだ
- ・他人を想っ気持ち、小さい植物も大切にするなど、普段の生活から改善していくべき

- ・小さいことでも何か始めていく必要がある
- ・日頃からの考えを変えて、辛い事があっても乗り越えていかないと駄目だ
- ・世界の人達が今日のように深く命について考えてほしい
- ・無駄な死がない世の中になればいいと思う
- ・もっと物事を冷静に見て、自分の将来を考えてほしい
- ・このような機会を増やし、私のように考えが変わる人が多くいればいいと思う
- ・命の灯火を消すことなく、いつまでもこの灯火をともし続けよう
- ・命は大切に守らなくてはいけない
- ・生きろ、命を守れ
- ・生きたくても生きられない子がいる、ならば私達は自ら命を絶ってはいけないと思う
- ・重たい病気を持っていて、頑張っている子を実際に見たことがないのでよくわからないが、命を粗末にしてはいけないということはわかった
- ・生きたくても生きられない、生きることのできない人があるので、自分で命を絶つことだけはしたくない
- ・人は生まれたときから人生の最後まで生き尽くす義務がある
- ・病気があっても生きるべきである
- ・世の中にはたくさん、生きたくても生きられない人がいるのだから、命を軽く投げ出してはいけない
- ・これからは自殺、殺人などのない、互いに助け合う世の中にしていくべきだ
- ・これからは無駄に死にたくはないと思った
- ・命をそまつにする様な考えはやめようと思う
- ・世界中の人が生きることについてよく考えてみるべきだ
- ・生きるということは何にも屈せずに人生を全うするということもあるかもしれない

カテゴリー 6. 当事者でない自分の心情

- ・障害を持って生まれてきた人の気持ちや辛さはわからない
- ・障害のない私たちに障害は関係がない
- ・心の中ではまだ少しだけ命はゴミだと思っている
- ・何も感じない
- ・自分は考えたままに考えた。どう捉えようとしてもかまわない
- ・おそらく人間は当事者にならないと理解できない
- ・薬や治療に関しての詳しい情報がわからないのでいまいち大変さが伝わってこなかった
- ・自分は病気をしたことはないので、実際どれだけ辛いかわからない
- ・体に満足しているので、何もわからない

- ・命について考えてもやっぱり答えはわからない
- ・今「お前がここにいる意味は？」と聞かれてもどうしようもない
- ・あまり前と気持ちは変わっていない
- ・講演を聞いて、自分の考えは全く変わらなかったが、命については改めて考えさせられた
- ・特に感じることはなかった
- ・基本的に考えは前回と変わっていない

カテゴリー7. 変化した自己の認識

- ・これからの人生考えていくものはこれかなと思った
- ・将来、獣医になりたいが命を扱う仕事なので、今の私自身で命とは何か、本当のものを忘れかけていると思った
- ・命についてもう1度ゆっくり考えたい
- ・私なりに色々考えてみたいと思う
- ・生きることの考えが深まった
- ・今回の時間は自分にとって重い時だった
- ・忘れかけていた命についてのことを深く考え、見つけ出すことができた
- ・今回、命とは何かを見つける事ができた
- ・自分でできることの全てをやるということを教えられました
- ・もっと命のことについて学びたい
- ・今までは事件や事故に巻き込まれた人のことは考えたことはなかった
- ・今までは自分が幸せだと思ったことがなかった。嫌な事・辛い事があると逃げ出していた。
- ・障害のある人はそれ以上に辛い思いをしているから、少しの事で逃げ出してはいけないと考えさせられた
- ・今日の話聞いて、「命について」の考えが変わった
- ・自分の中で何かが変わったように思う
- ・講演を聞いて、命について気になる事が変わった
- ・自分の命に対する考えを変えるための材料になった
- ・話を聞いて考えが変わった
- ・考えが変わった
- ・考え直さないといけない
- ・前回書いたことが恥ずかしい
- ・命について考え直すべきだ
- ・いじめや病気と闘って勝てなかったらしょうがないが、生き方を少しずつ変えていか

なければならないと思う

- ・自分が今までなぜ人が生きているのか、命の重さがわからなかったのか不思議でならない
- ・自分達が小さな事で悩んでいるのがバカらしい。もっと身の回りを見ないといけない
- ・命を粗末にはいけない。どれだけ幸せか考えたこともなかった考えたこともないことをたくさん学べた
- ・自分の考えが少し変わった
- ・これからは命に関心を持ち、考えていくことが課題となり、心が成長していくことの手掛りとなるかもしれないと感じた
- ・前回よりも命について興味深くなった
- ・今回の話は、自分を変えられたものだと思う
- ・今まではバスなどで体の不自由な人が乗ってたりしても特に何も感じなかった
- ・今まではこのような方々はかわいそうという考えを持っていたが、その考えは変わった
- ・前は死後の世界について考えていたが、それは問題ではない
- ・今までは「命は大切だ」「何で自殺なんかするんだろう」と簡単な考えしかしようとしていなかった
- ・今日、命というもののあり方を改めて教えていただいた
- ・命について沢山考える事ができてよかった
- ・今日の話が聞けてよかった
- ・「命について」の話を聞き、感心した
- ・障害を持っている人の発言に心を動かされた
- ・講演会と聞いて「面倒だ」と思ったが、そんなことはなかった
- ・この講話がこれからの人生に役立っていくと思った
- ・今日の話は、これからの人生に役立っていく
- ・今日の講演を聞いてすごく感動した

カテゴリー 8. 幸せな自己の発見と感謝

- ・私は「ご飯を食べること」「歩くこと」「生きていられること」が当たり前と感じてしまっている
- ・「不自由なことが体がない」これが僕達に当たり前のこと
- ・生きたくても生きることができない人がいる中で、私は何不自由なく生まれ、何事もなく生きている
- ・ただご飯を食べるだけで幸せだと思うのは僕らにとって当たり前で、いかに安全で何不自由なく生きているのがよくわかった

- ・健康な体で生まれてきた僕達はそれが当たり前になっている
- ・自分の体が上田さんの言っていたように普通になっていると思った
- ・いつも健康でいられることが当たり前になっていた
- ・「生まれた時から健康で生きてきた人はそれに慣れてしまって、命の大切さを忘れてしまっている」と言っていたがその通りだ
- ・人はいつどんな障害を持つかわからない
- ・病気に勝てず亡くなった方々のためにも生きていることが幸せだと考えていきたい
- ・普段何気なくしていることが、どれだけ幸せなことかを知りました
- ・自分がどれくらい「恵まれているのか」「命の重さ」というものが見えてきた気今まで生きていく意味や生まれた理由は全然わからないと思っていたが、今回「生きる」という感動を感じた
- ・生きたくても生きられない人がいるのだから自分が命あること、ちゃんと動く手足があることに感謝したい
- ・病気に勝とうとして、生きたいと思って、死んでしまう人がいる、それを聞いて自分は幸せ者だと思った
- ・今もどこかで病氣と闘っている人、食べ物がなくて生きられない人がいると思うと、私達はとても幸せだと思う
- ・講演を聞いて私達はすごく幸せなんだと思った
- ・普通に暮らせるだけでどれくらい幸せか、病氣と闘う勇氣というものを実感した
- ・話を聞いて生きる喜びがわかった
- ・自分がどれくらい「恵まれているのか」「命の重さ」というものが見えてきた気がする
- ・普段何気なくしていることが、どれだけ幸せなことかを知りました
- ・病気に勝てず亡くなった方々のためにも生きていることが幸せだと考えていきたい
- ・生きたくても生きられなかつたりする人が沢山いるのだから、私はもっと生きていく事に感謝しなきゃダメだと思った
- ・そのような人達に比べると私はなんて幸せなのかよくわかった
- ・「生きている」それだけで私や家族、友達は幸せなのだ
- ・生きていることはすごいこと
- ・生きていることはすごいことだ
- ・命がないと生きていけない。今ここにいる私達はすごい
- ・生きているだけでよい
- ・1番幸せなことは生きていることだ
- ・生きているだけで幸せだ
- ・「生きている」ということは幸せなこと

- ・生きられている事を大事にしたい
- ・命があっても、生きていく自信をなくす人もいる。命があることはうれしいという事を感じるべきだ
- ・生きるということは何気ないことかもしれない。生きることはとても素敵なことだと実感した
- ・生きていることに感謝して日々を過ごそうと思う
- ・今生きていることに喜びを覚えた
- ・死んでいく人もいる。生きられていることは素晴らしい
- ・周りを見れば自分はまだ自由で幸せだと気付かないのか。生きていけばうれしいこともいくつもある。
- ・生きることは普通だと思っていたが、とても大変な思いをして生きている人がいて、自分は恵まれている
- ・生きることはとても大切だ
- ・生きることは素晴らしいと思った
- ・事件や事故で死んでいった人達はどんな気持ちだっただろうと思うと、今生きている自分がとても幸福に思えた
- ・今回のビデオの少年を見て、「生きているだけで価値がある」と痛感した
- ・自分は幸せなんだという考えのもとに生きていきたい
- ・生きられるということは、本当に幸せだと実感した
- ・生まれた時に人間は1つの幸せをもっているのだ
- ・頑張って生きようとしている人々に対して、今の「健康」を当たり前と思っている僕は大変失礼だと思った
- ・病気で苦しんでいたり、生きたいのに生きられない人がいる中で、「生きているのが当たり前」と思い込んでいた自分がダメだと思った
- ・障害を持たないで生まれてきた人、不自由を持たないで生まれてきた人は当たり前とは思ってはいけない
- ・障害なく生まれてきたのは普通のことではなく幸せなことだと感じた
- ・何も障害をもたずに生まれた自分は本当に幸せだと実感した
- ・障害がないことを当たり前だと思っていたが、それは間違っていると思った
- ・健康で何の障害もなく暮らしている私はとても幸せだ
- ・私たちが当たり前のように生まれてきた健康体はすごく幸せなことという意味がすぐわかった
- ・健康体は今まで気にしなかったけど、本当に幸せなこと
- ・健康な体に生まれてきて良かったと実感した
- ・自由なことは幸せということも理解できた

- ・自由に動けること、自由に食べたり飲んだりできること、何でも自由にできることは本当に幸せだ
- ・食べることの素晴らしさを今まで考えていなかった
- ・食べることの大切さが、ビデオを見てよくわかった
- ・歩いたり、食べたり、書いたりできるのは当たり前ではない
- ・私達が普段生活している中で何気なく行っている食事や歩くことなど当たり前だと感じている事ができず困っている人が多くいるという実感がわいた
- ・今まで当たり前と思っていた健康というのは実は当たり前ではなく、生きられない人もいっぱいいるんだと思った
- ・今こうして普通に生活できている事は当たり前ではないと考えさせられた
- ・自分がどれだけ恵まれているのか、病気と闘い頑張っている人がいることを感じた
- ・今まで自分は五体満足に生まれてきても毎日不満ばかりをぶつけてきたのを、今ではそれを後悔している
- ・私達は障害なく生まれてきて、命の大切さを忘れているのかもしれない

カテゴリー 9. 生き方の模索

- ・頑張っている人々がいるのに対し、なぜ僕は簡単に怠けてしまうのかと、自分が惨めに思えた
- ・自分なら障害に対して現実ではないと自分自身の存在を否定するだろう
- ・もし、自分がこんな病気になったら耐えられないと思う
- ・病気と闘う男の子は強い人。私なら死にたくなると思う
- ・病気にはなりたくない。抗がん剤治療などは見てるだけで辛さが伝わってくるととても耐えられない
- ・上田さんのように人前で自分の話をできるようになるのも無理だ
- ・生きることは大変だ
- ・もし自分が病気になったら頑張れるかと考えると無理だ
- ・ガン治療の注射などに耐え、元気になる男の子に比べ、自分は血を採るとかで弱音を吐いていて、だらしなしいと思った
- ・体が不自由でできない人が一生懸命生きている姿を見たり聞いたりし、自分の生活を振り返ってみようと思った。
- ・生まれつきの障害や病気を抱えた人達の現状を初めて知った
- ・自分と同年齢で病に命をおびやかされている人達が少なからずいる事を知った
- ・どんな障害があってもあきらめないで最後まで立ち向かうことを知りました
- ・病気に勝てず死んでいった子供達が明るかったのはその子供達も自分の命に誇りを持って1秒1秒を大切に生きていたからではないか

- ・障害があっても自転車に乗ったり、学校に行ったり、何よりも自分の障害の事をプラスに考えていたのがすごいと思った
- ・彼らはそうではなくプラスに考える事ができる
- ・上田君は自分が生きていてる事をすごくありがたく受け止めていると思った
- ・障害を持っているのに、あんなに前向きに明るく生きていけることがすごいと思った
- ・ビデオのひどい痛みにも耐えてまでも退院したい、人と同じように生きたいと考えている少年に感動した
- ・ビデオの早く元気になりたいという一心で頑張っている姿に感動した
- ・体は病気に罹っていても、健康な僕より心はすごく健康だと思った
- ・どんな重い病気に罹っても希望を捨てないでその病気と闘うことを知りました
- ・「なぜ自分だけ？」と苦しい生活を送っているが、あきらめず病気と闘う姿が印象に残っている
- ・頑張っている人が病気に罹っている人だけでないことも知った（医者、看護師、家族も）
- ・たとえ重い病気を背負ったとしても、命の大切さを知っている人は頑張れる
- ・たとえ重い病気を背負っている人が大切な人だったとしても、命の大切さを知っている人なら頑張れる
- ・病気に勇敢に立ち向かう姿に感動した
- ・病気と闘い勝ち抜いて生きている人はすばらしい
- ・上田さんは一回も悲しげな表情を見せなかった。本当に充実していると感じた
- ・本当に障害者かわからなかった。プラス思考だ
- ・世の中には偉い人がいると思った
- ・苦しんでも生きる希望に向かって精一杯生きている人がこの世にいることを実感した
- ・ビデオの子も上田君も明日命があるかどうかわからない現実と向き合っているだから家族との時間や学校生活を楽しんでいる
- ・障害を持っている人は自分をかわいそうだとは思わず、むしろ生まれてきてよかったと思っているのかもしれない
- ・病気などで普通の生活ができない人もいるが、一生懸命に毎日を力強く生きている
- ・限りある命をのばそうと闘っている人もいる
- ・彼らは病気や障害と闘っている
- ・「生きたい」という意志で闘病生活を送っている人がいる
- ・「病気」と闘い、自分の毎日を精一杯生きることのできる二人のようにになりたい
- ・自分もそうなれるようになっていきたい
- ・これからは他の人と比べるのではなく、自分に甘えず、上田さんらのように強い人間になりたい

- ・障害を持っている人がどれだけ頑張って苦しみを乗り越えてきたのかがわかった
- ・辛い治療に耐え、明るく接することができるのは強い
- ・初めて生き抜く事を頑張っている人を見た
- ・病気を持った人も一生懸命生きている
- ・病気や障害を持っていても決してあきらめずに生きているのが素晴らしい
- ・病気や障害と向き合って元気に勇敢に生きていて、命の大切さが本当にわかっている
- ・辛いことが何度おきてもくじけずに立ち向かっていく姿に感動した
- ・自殺や殺人をする人はみんな病気を持っていない人達で、こんな風に絶望的なことになっても一生懸命生きようとしている
- ・難病に罹っても生きようとしている人だっているのでも自分も頑張って生きようと思った
- ・ビデオの少年は足に障害を持っているが、その分、強さと優しさを他の人より沢山持っている
- ・上田さんは体に不自由があっても、生きていく上でほとんど不自由だとは考えていないと思った
- ・障害を持って生まれてきても障害に負けず、夢に向かって生きているのは立派だしカッコいい
- ・病気と必死に闘っている人を見て、すごく頑張っている大きな人だと思った
- ・改めて苦しみながら生き抜いている人がいることを知った
- ・病気をってしまった人の方が強い精神力を持っている
- ・病気を抱えながらも、1日1日を楽しく過ごしているのは本当にすごい事だ
- ・少年と上田さんは障害を克服し今の生活を送っている。素晴らしくカッコいいことだと思う
- ・同年代でこんなに頑張っている人がいるんだと思った
- ・ビデオを見て、あんな辛い治療に耐え退院できたのはすごいと思った
- ・少年のお母さんが障害に対して弱いところを見せないことに感動した
- ・辛い検査や治療を乗り越えた者こそが初めて自分の家に帰れるような気がした
- ・命を大事にして一步一步前を出ていきたい
- ・自分の命や体をもっと大切にしながら毎日を生きようと思う
- ・自分の命を持っていることを誇りに思い、大切にしていこうと思う
- ・これからは命を大切に生きていこう
- ・これからは命という宝物を大切に、残りの人生を楽しんでいきたい
- ・これからの社会で、命や生きていくことについて少しでも意識していきたい
- ・これからは命・生きることをもっと深く考え、生きていきたい
- ・今、健康でもいつ何が起こるかわからないので、もっと命を大切にしていきたい

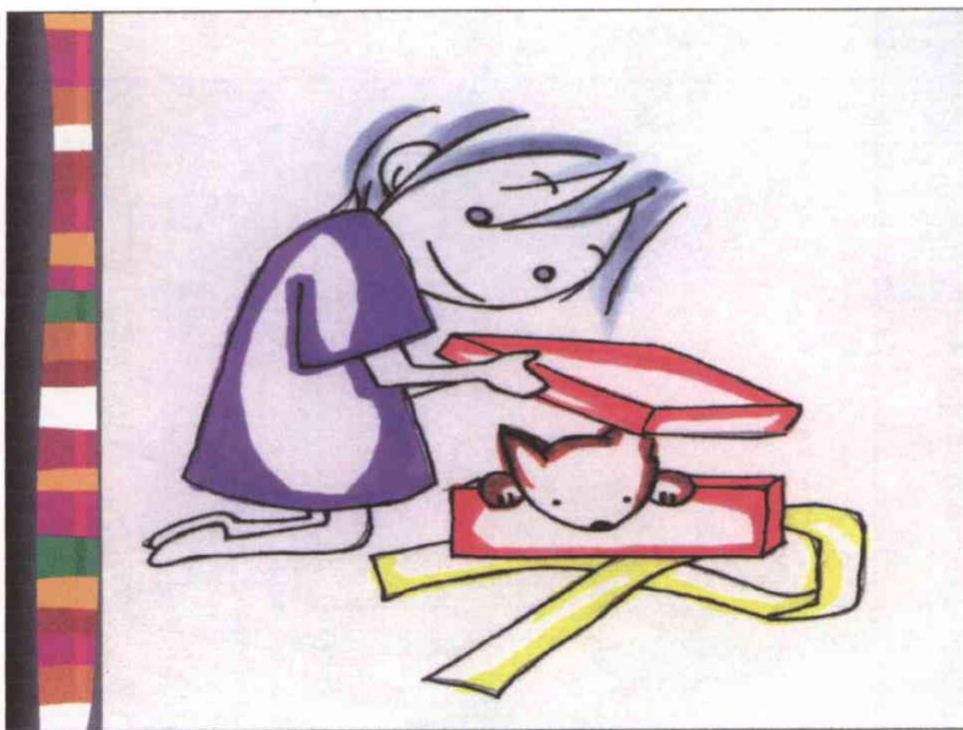
- ・これからの人生、自分に何があるかわからないが、1日1日を大切に過ごしていきたい
- ・生きている人は生き続けられる限り何よりも大切にしなければならない
- ・これからは今まで以上に命を大切にしていき、辛い事があっても頑張って生きていきたい
- ・これからはより一層命を大切にし生活を送りたい
- ・神様からもらった大切な命なのでいつまでも大切にしていきたい
- ・これからは自分の命を大切にし、人生を充実したものにしていきたい
- ・もっと命を大切にしていって助け合って生きていきたい
- ・一生懸命限りある「いのち」を生きよう
- ・自分の命は自分で最後までじっくり活用し、それを心に刻み込んで生きていきたい
- ・命は1つしかないものだから自分の生きられるところまで生きる
- ・限りある命を精一杯生きることが大切
- ・いずれきてしまう死に向かい合う前に、今を精一杯生きることを考える方が価値があると思う
- ・健康な分、頑張らなければいけないということを学んだ
- ・自分にできる精一杯のことをやりたいと心から思う
- ・これから教えられた命の大切さや、病気に立ち向かっていく勇気や努力を自分に活かしていき、他の人にも教えていきたい
- ・自分の目的を持ち、目標に到達できるよう努力したい
- ・私が楽しくないと思う日常を求めて頑張っている人がいる事を思い、幸せな人生を送ろうと思う
- ・障害がある人が幸せな生活を送るためにも、私達が頑張っていかなければならないという事を強く思った
- ・これからは障害を持つ人達のためにも、恥ずかしくない行動をとり、責任を持って人生を歩んでいきたい
- ・自分の夢の理学療法士になり、歩けないこどもや、人々のために働きたいと改めて思った
- ・これからの生活で命に対する考えを見直し今日聞いた話を沢山のの人に伝えたい
- ・今回の話しの1つ1つをしっかりと心にしまい、プラス思考でいきたい
- ・私を強く生きたい
- ・自分を大事にしようと考えた
- ・親が今まで育ててくれたこの身体を大事にしたい
- ・学んだことを心に残していきたい
- ・命は人と人との関わり合いでの心という捉え方をしていきたい

- ・これからは命をもっと大切にし、命についてよく考える必要がある
- ・今まで生きる意味は周りの人が悲しまないためとしか思ってなかったが、これからは自分のために生きていきたい
- ・その幸せを独り占めするのではなく、みんなで分け合って幸せにしたい
- ・生きたくても生きられない子が沢山いる事がわかったので、その子達に分もちゃんと生きる
- ・自分を信じてどこまでも生きていこう
- ・健常者である我々より頑張っていると思う。負けぬよう頑張って努力して生きていこうと思う
- ・障害者の人々に恥じぬような生き方をこれからしていきたい
- ・幸せに食べたりして生きている私たちは裕福だと思う。病気や飢えで死んでいった人の分まで一生懸命生きていかなければならない
- ・今を精一杯生きる
- ・「僕も頑張らないと」と思う
- ・命について考え、生活を楽しく生きられるようになりたい
- ・学んだ事を忘れず、これからの自分の生き方をしっかり考えていきたい
- ・くじけそうな人が周りにいたらよい方向へと引っ張っていき自分から「+」の人生へと作り変えていきます

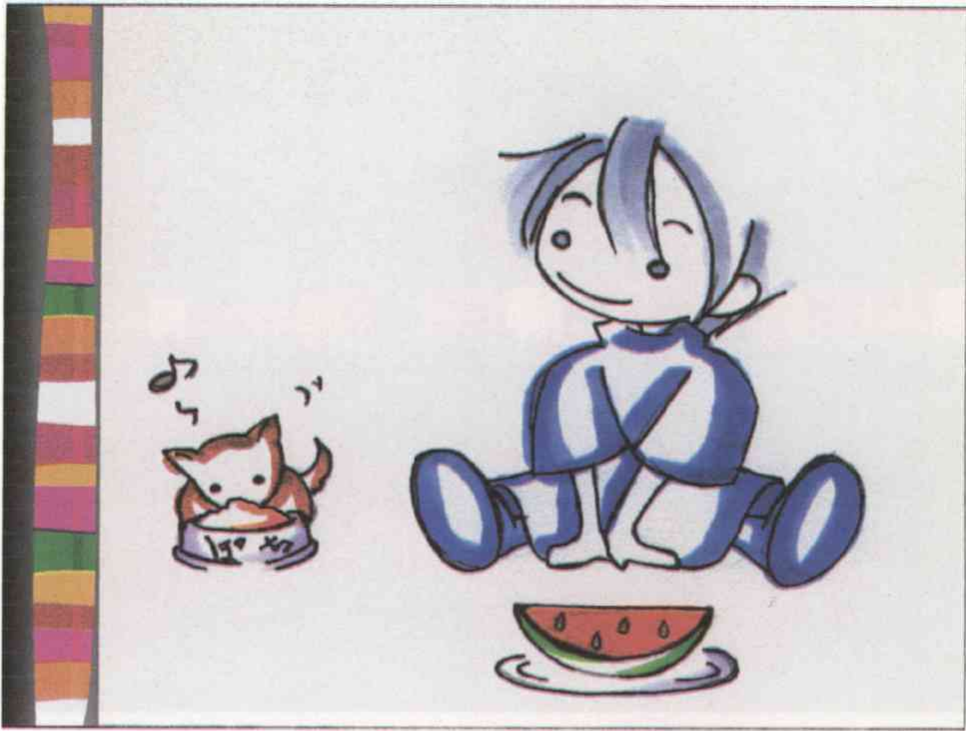


ポチとルナはいつも一緒、
いつでも会える。

「ポチとルナはいつも一緒」(創作絵本)
文：井上ひとみ 絵：谷保由依子
(石川県立看護大学教員) (石川県立看護大学学生)



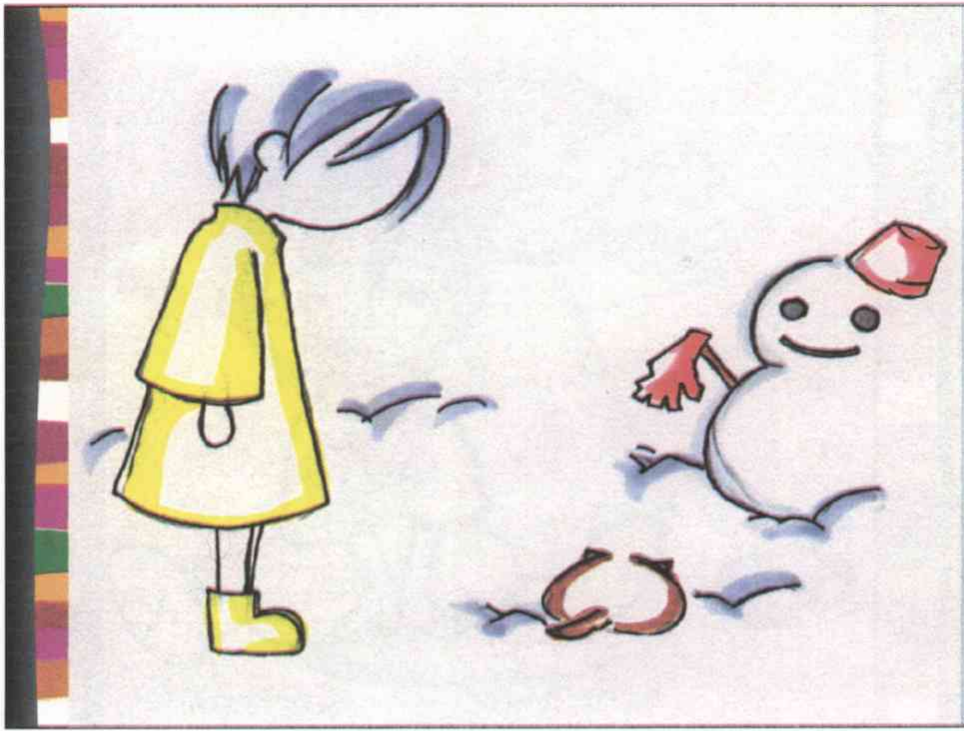
わーあ。可愛い。
待ちに待った誕生日、ポチはルナの所へやって来た。



ポチはただのペットじゃないんだ。ルナの一番の友だちなんだ。
ご飯も一緒、おやつも一緒、
ポチはルナが大好きだった。
ルナもすごく、ポチが大好きだった。



お使いに行くのも、公園へ行くのも、どこへ行くにも、二人は一緒。
毎日がとっても楽しかった。嬉しかった。すごく二人は幸せだった。
ずっと、ずっと、一緒にいれると思っていた。

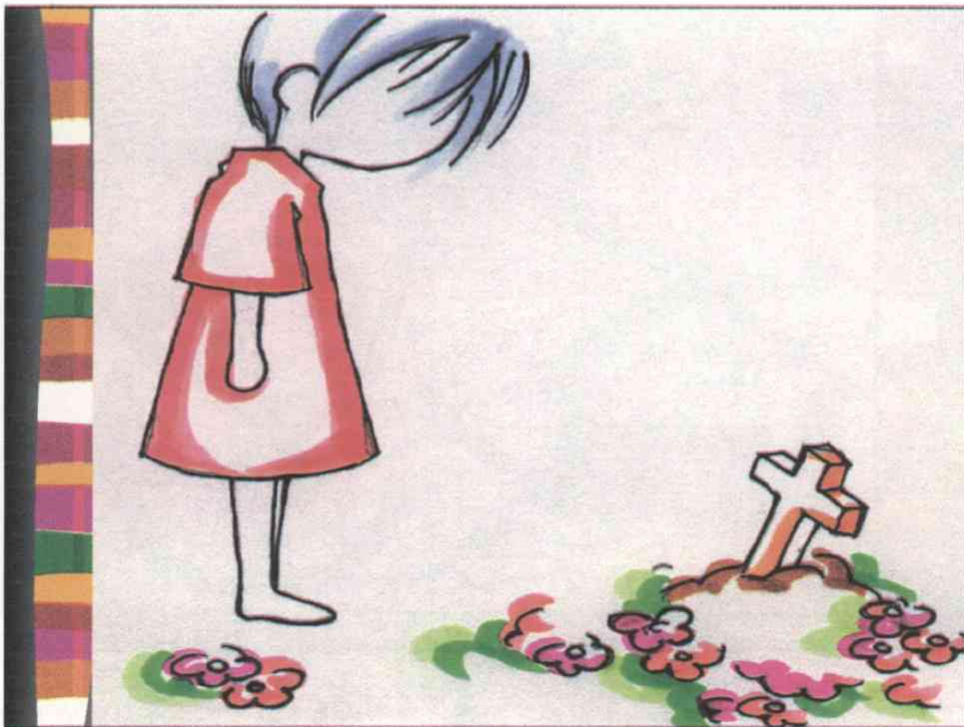


ある朝、ポチが動かなくなった。

なぜ？ どうして？

「ポチ」「ポチ」「ポチどうしたの？」「ねえ、一緒に遊ぼうよ。」

ルナがいくら呼んでも、ポチは目を開けなかった。いくら揺さぶっても起きなかった。ポチはピクリとも動かない。初めは暖かかったぬくもりが、だんだん冷たくなった。



ポチは、死んでしまった。ママと一緒に、ポチをお墓に埋めて、花を飾った。涙が後から後から流れて止まらなかった。



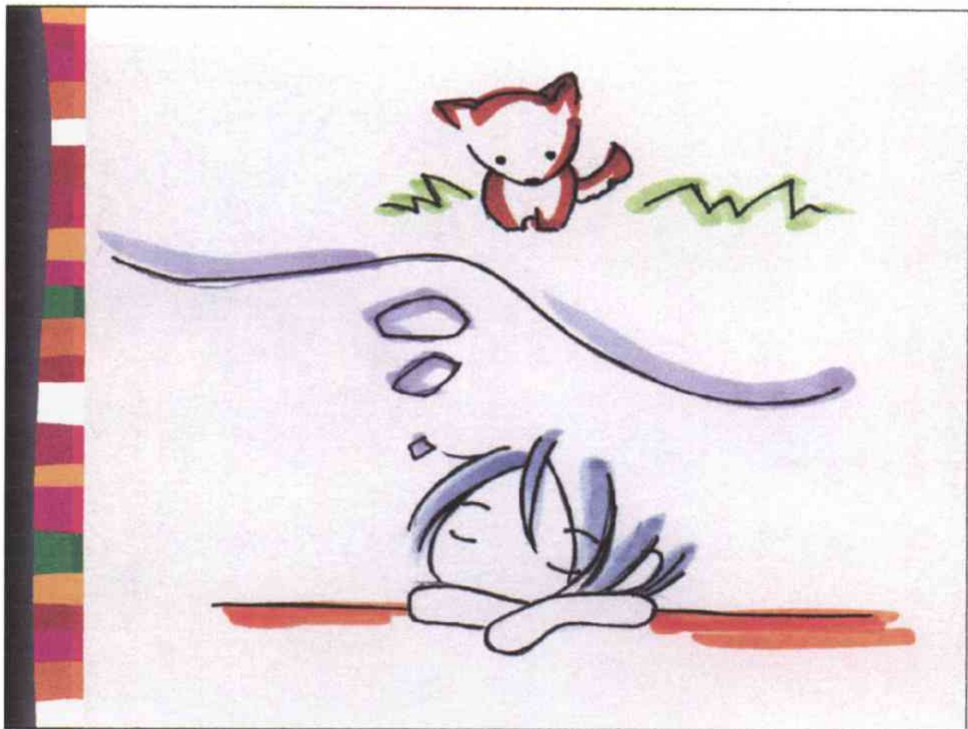
「ポチどうして、死んでしまったの?」「痛くなかった?」「怖くなかった?」
「死ぬって、どういうことなの?」「ねえ、死ぬってどういうこと?」
「今、どこにいるの?」「ねえ、ポチ、どこに行っちゃったの?」



なぜ?
悲しくて、さびしくて、
何をやっても嬉しくない。
おやつもおいしくない。



ポチ、返事してよ。
会いたいよ。
とっても会いたいよ。



「ワンワン」「ワンワン」と
ポチが嬉しそうに、ルナのところへ駆けて来ます。
アレー、ポチ、帰って来てくれたの？
嬉しいよ。
「ルナちゃん。もう、一緒に遊べなくなったけれど、そばには見えないけれど。ぼくは、ずーっとルナちゃんと一緒にだよ。目を閉じてごらん、ほらね、ぼくはルナちゃんと一緒にだよ。」



「あれー、ポチが人間のことばを話した。」



「そうか、そうだったんだ。私達は、あの時と同じで変わらないんだね。仲良しのままなんだね。」



目をつぶれば、私たちはいつも一緒だね。





病気

この病気は
僕に何を教えてくれたのか
今ならわかる気がする
病気になったばかりの頃は
なぜ どうして
それしか考えられなかった
自分のしてきたことを
ふりかえりもしないで
けどこの病気が気づかせてくれた
僕に夢もくれた
絶対僕には
病気が必要だった
ありがとう

はらだ たけひで／絵
E・キューブラー・ロス、ダギーへの手紙
P13、佼成出版社から